

主要地方道八女香春線関係埋蔵文化財調査報告 1

長 野 古 墳 群

福岡県八女市長野所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 158 集

2 0 0 1

福岡県教育委員会

長野古墳群

福岡県八女市長野所在遺跡の調査



(1) 長野古墳群全景



(2) 長野古墳群全景



(1) 1号墳全景



(2) 2号墳全景



(3) 3号墳全景

序

本書は、福岡県南部の八女市と北東部の田川郡香春町とを南北に結ぶ主要地方道八女香春線の道路改良事業に伴い発掘調査を実施しました長野古墳群の調査報告書であり、八女香春線関係の埋蔵文化財調査報告書としましては、本書が第1冊目にあたります。

長野古墳群は、八女市の南西部に所在し、巨石古墳として著名な県指定史跡でもある童男山古墳の約1km東側に位置します。また、八女古墳群においては最東端に位置する古墳群であることからその重要性が認識されておりました。

当教育委員会としましては、長野古墳群の重要性に鑑み、事業部局である八女土木事務所との間で古墳群を保存する方向で幾度となく協議を重ねて参りましたが、橋脚設置場所の関係上、路線変更が避けられないとの結論に至り、やむなく記録保存の方策を取る運びになりました。

今回の発掘調査では、5基の横穴式石室墳と古墳の石材を切り出した石切場遺構及び江戸時代後半頃の近世墓、さらに縄文時代後期の埋甕などが確認されました。中でも古墳の石材を切り出した石切場遺構が古墳とともに調査された事例は非常にまれなことであり、多くの成果を上げることができました。

本書が筑後地域における文化財及び歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査及び整理・報告書作成にあたり、多大なるご協力を頂いた地元の方々をはじめとして、関係機関・関係各位に深く感謝いたします。

平成13年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例　　言

1. 本書は、主要地方道八女香春線の建設事業に伴い平成10・11年度に福岡県教育委員会が、発掘調査を実施した長野古墳群の調査報告書であり、八女香春線関係埋蔵文化財調査報告書の第1冊目にあたる。
2. この事業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課が、福岡県土木部道路建設課（八女土木事務所）より執行委任を受けて実施したものである。
3. 遺構の実測は、田辺げん・田辺かな・小田の他に、森井啓次・岡寺良（福岡県文化財保護課）、中川寿賀子・大塚恵治（八市教育委員会）が行った。
4. 出土遺物の実測は、平田春美・棚町陽子・久富美智子・田中典子・永田秀徳、小田による。
5. 出土土器のうち、須恵器は断面を塗り潰し、土師器との判別を容易にした。
6. 本書掲載の写真は、遺構を小田が撮影し、遺物は北岡伸一の撮影による。
7. 挿図で使用する方位は、平面直角座標の第二系に基づく座標北である。
8. 遺跡分布図は、平成11年国土地理院発行の「八女」1/50,000を使用した。
9. 本書の執筆・編集は、小田が行った。

本文目次

I 調査組織と調査経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 検出遺構と出土遺物	9
1. 遺構の概要	9
2. 古墳時代の遺構と出土遺物	9
(1) 横穴式石室古墳	9
(2) 落込	41
(3) 石切場遺構	41
3. 近世以降の遺構と出土遺物	43
(1) 近世墓	43
(2) 胞衣壺	46
(3) その他の出土遺物	48
4. 縄文時代の遺構と出土遺物	53
(1) 集石遺構	53
(2) 埋甕	55
(3) 包含層他出土の遺物	55
IV 総括	58
1. 長野古墳群について	58

図版目次

	本文対象頁
卷頭図版 1 (1) 長野古墳群全景	9
(2) 長野古墳群全景	9
卷頭図版 2 (1) 1号墳全景	9
(2) 2号墳全景	19
(3) 3号墳全景	26
図版 1 (1) 長野古墳群全景（表土除去前、南から）	9
(2) 長野古墳群全景（表土除去後、南から）	9
図版 2 (1) 長野古墳群全景（気球写真、南上空から）	9
(2) 長野古墳群全景（気球写真、北上空から）	9
図版 3 (1) 1号墳全景（表土除去前、東から）	9
(2) 1号墳全景（表土除去後、東から）	9
図版 4 (1) 1号墳外護列石（北から）	9
(2) 1号墳外護列石（南から）	9
図版 5 (1) 1号墳墳丘断割り状況（東から）	10
(2) 1号墳墳丘断割り状況（北から）	10
図版 6 (1) 1号墳周溝土層堆積状況（東から）	10
(2) 1号墳周溝1Tr（南から）	9
(3) 1号墳周溝2Tr（東から）	9
図版 7 (1) 1号墳羨道部	13
(2) 1号墳羨道部左壁	13
(3) 1号墳羨道部右壁	13
図版 8 (1) 1号墳前室天井（左壁側）	13
(2) 1号墳前室左壁	13
(3) 1号墳前室右壁	13
図版 9 (1) 1号墳玄室入口側上部	10
(2) 1号墳玄室入口側下部	10
図版 10 (1) 1号墳玄室左壁	10
(2) 1号墳玄室右壁	10
図版 11 (1) 1号墳玄室天井（奥壁側）	10
(2) 1号墳玄室奥壁上部	10
(3) 1号墳奥壁鏡石	10
図版 12 1号墳出土土器	13
図版 13 1号墳玄室出土装身具	16
図版 14 1号墳玄室他出土鉄器	17

図 版 15 (1) 2号墳全景（表土除去前、東から）	19
(2) 2号墳全景（表土除去後、東から）	19
図 版 16 2号墳全景（気球写真、東上空から）	19
図 版 17 (1) 2号墳周溝1Tr（南から）	19
(2) 2号墳周溝2Tr（南東から）	19
(3) 2号墳周溝3Tr（東から）	19
(4) 2号墳周溝4Tr（北東から）	19
図 版 18 (1) 2号墳周溝5Tr（南から）	19
(2) 2号墳前庭部祭祀土器上部	20
(3) 2号墳前庭部祭祀土器下部	20
図 版 19 (1) 2号墳羨道部	20
(2) 2号墳羨道部左壁	20
(3) 2号墳羨道部右壁	20
図 版 20 (1) 2号墳前室天井（右壁側）	20
(2) 2号墳前室左壁	20
(3) 2号墳前室右壁	20
図 版 21 (1) 2号墳玄室左壁上部	20
(2) 2号墳玄室左壁下部	20
図 版 22 (1) 2号墳玄室右壁上部	20
(2) 2号墳玄室右壁下部	20
図 版 23 (1) 2号墳玄室天井（奥壁側）	20
(2) 2号墳玄室奥壁上部	20
(3) 2号墳奥壁鏡石	20
図 版 24 (1) 2号墳出土土器	22
(2) 2号墳出土装身具・鉄器	22
図 版 25 (1) 2号墳玄室出土鐵釘	22
(2) 2号墳前室出土鐵釘	22
図 版 26 (1) 3号墳全景（表土除去前、東から）	26
(2) 3号墳全景（表土除去後、東から）	26
図 版 27 (1) 3号墳墳丘（北東から）	26
(2) 3号墳墳丘（南から）	26
(3) 3号墳外護列石（南東から）	26
図 版 28 (1) 3号墳墳丘断割り状況（北から）	26
(2) 同（南から）	26
(3) 同（西から）	26
図 版 29 (1) 3号墳周溝II区土層（北東から）	27
(2) 3号墳周溝IV区土層（南東から）	27
(3) 3号墳周溝I区遺物出土状況（東から）	27

図 版 30	(1) 3号墳羨道部閉塞状況（東から）	30
	(2) 3号墳閉塞石除去後（東から）	30
図 版 31	(1) 3号墳羨道部	30
	(2) 3号墳羨道部左壁	30
	(3) 3号墳羨道部右壁	30
図 版 32	(1) 3号墳墓道左壁先端部	30
	(2) 3号墳墓道遺物出土状況	30
	(3) 3号墳左外護列石前面遺物出土状況	30
図 版 33	(1) 3号墳前室天井（右壁側）	28
	(2) 3号墳前室右壁上部	28
	(3) 3号墳前室右壁下部	28
図 版 34	(1) 3号墳前室遺物出土状況（奥壁側から）	30
	(2) 3号墳前室遺物出土状況	30
図 版 35	(1) 3号墳玄室入口側上部	28
	(2) 3号墳玄室入口側下部	28
図 版 36	(1) 3号墳玄室左壁	28
	(2) 3号墳玄室右壁	28
図 版 37	(1) 3号墳玄室	28
	(2) 3号墳玄室奥壁	28
図 版 38	(1) 3号墳玄室石棚	28
	(2) 3号墳奥壁断割り状況	28
	(3) 3号墳前室楣石穿孔状況	28
図 版 39	(1) 3号墳前室出土土器	30
	(2) 3号墳墓道出土土器	32
図 版 40	(1) 3号墳外護列石前面出土土器	34
	(2) 3号墳周溝出土土器	35
	(3) 3号墳出土刀子・鑿	35
図 版 41	3号墳前室出土鉄鏃	35
図 版 42	(1) 4号墳全景（表土除去前、東から）	38
	(2) 4号墳全景（表土除去後、東から）	38
図 版 43	(1) 4号墳墳丘断割り状況（東から）	38
	(2) 4号墳墳丘断割り状況（北から）	38
図 版 44	(1) 5号墳全景（南から）	40
	(2) 5号墳全景（東から）	40
図 版 45	(1) 5号墳羨道部（北東から）	40
	(2) 5号墳玄室左壁（北東から）	40
	(3) 4号墳出土土器	39
	(4) 5号墳他出土鉄器	41

図 版 46 (1) 石切場遺構 (南から)	41
(2) 石切場遺構 (東から)	41
図 版 47 (1) 石切場遺構北端 (南東から)	41
(2) 切り出された石材 (北東から)	41
(3) 工具痕.....	41
図 版 48 (1) 1号近世墓 (東から)	43
(2) 2号近世墓 (南から)	44
(3) 2号近世墓墓壙 (南から)	44
図 版 49 (1) 3号近世墓 (東から)	45
(2) 3号近世墓下部 (東から)	45
図 版 50 (1) 1号胞衣壺 (北から)	46
(2) 3号胞衣壺 (東から)	46
(3) 1号集石遺構 (北から)	53
図 版 51 (1) 1号墓墓石.....	44
(2) 2号墓墓石.....	44
(3) 1号甕棺.....	45
(4) 2号甕棺.....	45
(5) 1～3号胞衣壺.....	46
図 版 52 古墳他出土近世陶磁器①.....	48
図 版 53 古墳他出土近世陶磁器②.....	48
図 版 54 古墳他出土近世陶磁器③.....	48
図 版 55 (1) 古墳他出土近世陶磁器④.....	48
(2) 2号墳周辺出土銅製品.....	52
図 版 56 (1) 2号墳玄室出土古銭.....	52
(2) 3号墳周溝他出土古銭・銅製品.....	52
(3) 4号墳玄室出土古銭・鉄釘.....	52
(4) 3号墳周溝他出土硯.....	53
(5) 出土土錘.....	53
(6) 出土砥石.....	53
図 版 57 (1) 1号埋甕.....	55
(2) 包含層他出土縄文土器.....	55
(3) 出土石器類.....	53

挿 図 目 次

第 1 図	長野古墳群周辺遺跡分布図 (1/50,000)	4
第 2 図	長野古墳群周辺古墳分布図 (1/10,000)	6
第 3 図	長野古墳群周辺地形図 (1/1,500)	7
第 4 図	長野古墳群地形図 (表土除去前、1/300)	8
第 5 図	1号墳墳丘測量図 (1/200)	10
第 6 図	1号墳外護列石実測図 (1/60)	折込
第 7 図	1号墳墳丘盛土・周溝土層実測図 (1/60)	11
第 8 図	1号墳石室実測図 (1/60)	12
第 9 図	1号墳出土土器実測図① (1/3)	14
第 10 図	1号墳出土土器実測図② (1/3)	15
第 11 図	1号墳玄室出土装身具実測図 (2/3)	17
第 12 図	1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	18
第 13 図	2号墳墳丘測量図 (1/200)	19
第 14 図	2号墳石室実測図 (1/60)	折込
第 15 図	2号墳左外護列石前面土層図・1～5Tr 土層実測図 (1/60)	21
第 16 図	2号墳出土土器実測図① (1/3)	23
第 17 図	2号墳出土土器実測図② (1/6)	24
第 18 図	2号墳出土装身具・鉄器実測図 (1/2)	25
第 19 図	2号墳出土鉄釘実測図 (1/2)	25
第 20 図	3～5号墳墳丘測量図 (1/200)	26
第 21 図	3号墳周溝土層実測図 (1/60)	27
第 22 図	3号墳羨道部閉塞状況実測図 (1/60)	28
第 23 図	3号墳石室実測図 (1/60)	折込
第 24 図	3号墳墳丘盛土実測図 (1/60)	29
第 25 図	3号墳前室遺物出土状況実測図 (1/30)	30
第 26 図	3号墳前室出土土器実測図 (1/3)	31
第 27 図	3号墳墓道出土土器実測図 (1/3)	32
第 28 図	3号墳周溝出土土器実測図 (1/3)	33
第 29 図	3号墳左外護列石前面出土土器実測図 (1/3)	34
第 30 図	3号墳出土装身具実測図 (1/2)	35
第 31 図	3号墳出土鉄器実測図 (1/2)	36
第 32 図	3号墳出土鉄鏃実測図 (1/2)	36
第 33 図	4号墳墳丘盛土実測図 (1/60)	37
第 34 図	4号墳石室実測図 (1/60)	38
第 35 図	4号墳出土土器実測図 (1/3)	39

第 36 図	4号墳出土鉄釘実測図 (1/2)	40
第 37 図	5号墳石室実測図 (1/60)	40
第 38 図	5号墳出土土器実測図 (1/3)	40
第 39 図	5号墳他出土鉄器実測図 (1/2)	41
第 40 図	石切場遺構実測図 (1/60)	42
第 41 図	1~3号墓実測図 (1/30)	43
第 42 図	1・2号墓墓石実測図 (1/10)	44
第 43 図	1・2号甕棺実測図 (1/6)	46
第 44 図	1~3号胞衣壺実測図 (1/10)	47
第 45 図	1~3号胞衣壺実測図 (1/3)	48
第 46 図	古墳他出土陶磁器実測図① (1/3)	49
第 47 図	古墳他出土陶磁器実測図② (1/3)	50
第 48 図	古墳他出土陶磁器実測図③ (1/3)	51
第 49 図	銅製品・古錢実測図 (1/2)	52
第 50 図	土製品・石製品実測図 (1/2)	53
第 51 図	1号集石、1号埋甕実測図 (1/20)	54
第 52 図	埋甕実測図 (1/4)	55
第 53 図	縄文土器実測図 (1/3)	56
第 54 図	石器・石製品実測図 (1/2)	57
第 55 図	石室床面プラン比較図 (1/160)	59

表 目 次

表 1	耳環法量表	16
表 2	玉類計測表	17
表 3	鉄釘計測表	24

I 調査組織と調査経過

1. 調査に至る経過

八女香春線は、八女市から耳納山地を越えて田川郡の香春町とを結ぶ主要地方道である。八女市長野の国道442号線と県道との分岐箇所は通勤・帰宅時間帯には交通渋滞が著しく、地元から渋滞緩和の声が挙がっていた。こうした道路事情を解消するため、旧矢部線の線路を利用して現路線の北側に道路が新設されることとなった。計画路線内には、周知の遺跡である長野古墳群が存在していたため事業部局である八女土木事務所と幾度となく路線変更の協議を重ねてきたが、星野川に架ける橋梁の設置場所の関係上、路線変更は不可避との結論に至り、工事によって破壊される古墳の発掘調査を実施することとなった。

本調査は、八女市長野174-1・174-2・192-1番地の長さ約80m、幅員約12mの道路建設部分を発掘調査対象地とした。調査地内にはスギの木が植林されていたが、現況で4基の円墳が確認でき、南側から1・2・3・4号墳と番号を付した。大木の伐採・搬出は上陽町森林組合に委託し、平成10年6月16日から作業員を投入し、雑木の伐採・搬出作業に取りかかった。伐採が一段落した7月10日から現況地形の平板測量を開始した。先ず、墳丘測量が終了した2号墳の前面から表土除去を行ったが、発掘作業はスギの根っこ掘り起こしに等しく、大変骨の折れる作業であった。そのため平成10年度の発掘調査は、墳丘表土の除去と周溝の掘削と言った古墳外部の調査で終わってしまった。

平成11年度の発掘調査は連休明けの5月10日から再開した。前年度に引き続き古墳の周溝を掘削していた所、3号墳と4号墳との間で横穴式の小石室を検出し、5号墳とした。10月12日には古墳群の気球写真を撮影した。11月に入り、4号墳の北側で検出していた石切遺構を掘り下げた。なお、4号墳の墳丘を断ち割った所、石材を切り出した後に4号墳の墳丘を構築していることが判明した。

11月14日の日曜日には長野古墳群の現地説明会を開催し、約100名の見学者があった。掘削作業自体は11月30日で終了したが、平板測量及び石室実測が他業務との合間での作業となり、結局、翌年のゴールデンウイークまで持ち越すこととなった。

2. 調査組織

主要地方道八女香春線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の対応は、福岡県教育庁南筑後教育事務所の文化財担当者が行っている。長野古墳群における平成10・11年度の本調査及び平成12年度の報告書作成に関係した者は、下記のとおりである。

	平成10年度	平成11年度	平成12年度
福岡県土木部八女土木事務所			
所長	森光 誠	中尾 信男	大坪 千秋
建設課長	古川 勝次	古川 勝次	永田 和彦
建設課第一係長	堤 忠彦	堤 忠彦	城戸 信行
同主任技師	荒巻 政治	山下 徳一	吉丸 義人
福岡県教育委員会			

[総括]	教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
	文化財保護課長	石松 好雄	柳田 康雄	柳田 康雄
	同 参事	柳田 康雄	井上 裕弘	井上 裕弘
	同 参事（課長技術補佐）	井上 裕弘	橋口 達也	橋口 達也
	同 参事補佐（調査第一係長）	橋口 達也	児玉 真一	佐々木隆彦
	同 課長補佐（管理係長）	角 信幸	角 信幸	平野 義峰
[庶務]	同 管理係事務主査	鶴我 哲夫	佐藤 雅二	鎮守 俊明
	同 管理係主任主事			

[調査・報告書作成]

福岡県教育庁南筑後教育事務所

生涯学習課技術主査 小田 和利 小田 和利 小田 和利

[発掘作業]

石井 勇 井上貞夫 牛島茂雄 鶴賀久博 井上カツエ 小田広美 田辺げん 野田ツギエ
中川原みさ代 中島美智子 中村睦美 原 富子 馬場小百合 馬場房子 姫野秀子 山下智恵美

[遺構実測]

田辺 げん 田辺 かな
中川寿賀子 大塚 恵治（八女市教育委員会）、森井 啓次 岡寺 良（福岡県文化財保護課）

[地形測量]

山田元樹・坂井義哉（大牟田市教育委員会）、永見秀徳・小林勇作・上村英士（筑後市教育委員会）
中川寿賀子・大塚恵治・山田朗子（八女市教育委員会）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、
大島真一郎（黒木町教育委員会）、塚本映子（三瀬町教育委員会）、東竜雄（山川町教育委員会）、
猿渡真弓（高田町教育委員会）

[整理作業]

（復原作業） 岩瀬正信 古賀洋子 坂口好子 竹田まち子 辻 光子 武藤睦子
（遺物実測） 平田春美 棚町陽子 久富美智子 田中典子 堀江圭子 坂田順子 中川真理子
（製図作業） 豊福弥生 原カヨ子 土山真弓美 安永啓子 山田智子 辻 清子 福山美樹
（写真撮影） 北岡伸一

なお、発掘調査及び報告書作成に関して、八女土木事務所、八女市建設課・八女市教育委員会、
南筑後教育事務所をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得た。特に、八女市教育委員会生涯
学習課には、文化財担当職員の派遣に御協力を頂き、調査を終了することができました。心より感謝
申し上げます。

II 遺跡の位置と歴史的環境

八女市は福岡県の南部で、日本有数の穀倉地帯である筑紫平野の南東部に位置する。市域の東縁は八女郡上陽町・黒木町と接し、北縁は八女郡広川町と接し、南縁は矢部川を境として八女郡立花町と対峙し、西縁は筑後市と接する。人口約40,000人、面積約39.3km²の農業と伝統工芸が盛んな八女地方の中核都市であり、市街地にみられる土蔵と白壁の町並みは、城下町として栄えた往時の姿を物語っている。また、お茶・電照菊・フルーツなどの農産物と仏壇・提灯・人形・石灯籠・手漉き和紙などの工芸品は、全国に八女市の名を馳せている。

主な交通網としては、市域の西縁を九州の大動脈である九州縦貫自動車道が南北に走り、それと交差する形で、福岡県大川市と大分県中津江村とを結ぶ国道442号線が東西に走る。また、北九州市と鹿児島市とを結ぶ物流の幹線である国道3号線が市域の中心部を通過している。

遺跡の位置

長野古墳群は、福岡県八女市長野174-1・174-2・192-1番地他に所在する。遺跡は標高63~67mの丘陵緩斜面に立地し、発掘調査以前の地目は山林である。当古墳群は、八女古墳群の最東端に位置し、約1km西側には巨石古墳として著名な童男山古墳が築造されている。

地理的跡環境

福岡・熊本・大分三県の県境として聳える三国山（標高993.8m）は、北側に耳納山地、南側に筑肥山地を擁し、耳納山地からは八女山地が西側に向かって派生している。八女地方はこれらの山地によって「コ」形に囲まれており、その中央を矢部川が西流し、有明海に注いでいる。

三国山・釈迦ヶ岳山地に源を発する矢部川本流は、笠原川・星野川・辺春川・白木川・飯江川などの支流を従え、矢部川水系は県下で第三位の流域面積を持つ河川域である。上流域では黒木盆地が開け、中流域の八女市で星野川と合流し、沖積平野を形成している。

八女市は地形的に変成岩で構成される広川丘陵と阿蘇溶結凝灰岩で構成される豊岡台地及び八女台地の高地と市域の中央部を占める矢部川中流平野（扇状地）の低地に分類できる。

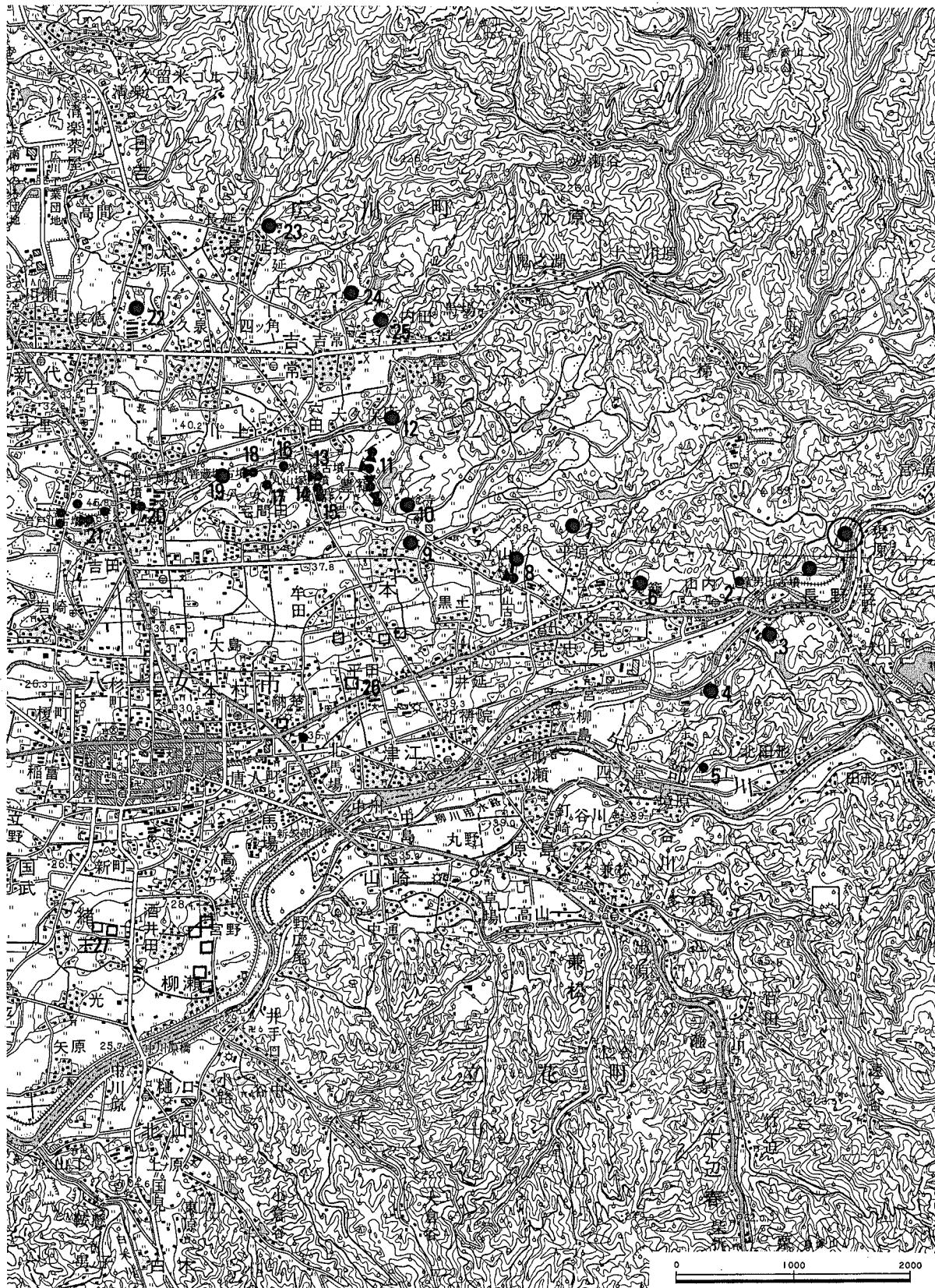
また、阿蘇溶結凝灰岩は岩質が脆弱で、加工が容易であることから古代では石人・石馬の材料に用いられ、近世では墓石・石橋などの石材に用いられ、現在では長野石として石灯籠・置物などの石材工業の材料として用いられている。

歴史的環境

先に述べた八女台地は、別名「長峰台地」・「人形原台地」とも呼ばれ、八女市豊福から三瀬町西牟田まで約9kmに渡って連なる洪積台地で、台地上には石人山古墳・岩戸山古墳・乗場古墳・善蔵塚古墳・鶴見山古墳・釘崎古墳群などの前方後円墳が築造され、筑紫君一族の奥津城となっている。また、地形的には連続しないが、市域東側の立山山古墳群・童男山古墳群・長野古墳群までを含めて八女丘陵古墳群と呼称しており、約300基の古墳が存在するものと考えられている。

八女丘陵古墳群には11基の前方後円墳が存在するが、西側の石人山古墳から紹介してゆこう。

石人山古墳は、全長約110mの三段築成の前方後円墳で、後円部には初期横穴式石室を埋葬主体部とし、直弧文・同心円文を浮き彫りにした横口式家形石棺が埋葬されている。出土遺物としては、武装石人・円筒形埴輪・形象埴輪（家・人物・馬・犬・短甲等）・陶質土器があり、陶質土器の年代から5世紀前半代に比定されており（註1）、筑紫君磐井の祖父の墳墓とされている。



- | | | | | | | |
|----------|----------|------------|----------|------------|----------|-----------|
| 1 長野古墳群 | 2 童男山古墳 | 3 帰路女喜古墳群 | 4 柳島古墳群 | 5 城の谷古墳 | 6 日迫山古墳群 | 7 平原古墳群 |
| 8 立山丸山古墳 | 9 本古墳群 | 10 鹿子島山古墳群 | 11 釘崎古墳群 | 12 堂願山古墳群 | 13 鶴見山古墳 | 14 鶴見山南古墳 |
| 15 大神宮古墳 | 16 茶臼塚古墳 | 17 丸山塚古墳 | 18 善藏塚古墳 | 19 辻の西遺跡 | 20 乗場古墳 | 21 岩戸山古墳 |
| 22 久泉古墳群 | 23 長延古墳群 | 24 吉常古墳群 | 25 内田古墳群 | 26 平田六反田遺跡 | 27 深田遺跡 | |

第1図 長野古墳群周辺遺跡分布図 (1/50,000)

岩戸山古墳は、周堤を含めた全長152m、墳丘長135m の二段築成の前方後円墳で、後円部北東側に一辺43m の別区を付設する。出土遺物として、円筒形埴輪・形象埴輪（人物・馬・鶴・琴等）及び阿蘇溶結凝灰岩製の人・馬・鞍・刀・壺・猪・鶴などがあり、繼体天皇二一（527）年に大和朝廷に対して反乱を起こした筑紫国造磐井の墳墓とされ（註2）、被葬者・築造年代の判る貴重な古墳。

乗場古墳は、全長70m の前方後円墳で、後円部に複室の横穴式石室が構築される。前室の袖石から玄室鏡石にかけて三角文・同心円文・蕨手文・鞍？などが描かれている装飾古墳で（註3）、年代的に6世紀中～後半に比定されることから磐井の子である葛子の墳墓と推測されている。

善蔵塚古墳は、墳丘全長約90m の二段築成の前方後円墳で、6世紀後半頃と推定されている。現在、史跡整備のための調査が広川町教育委員会により進められており、その調査成果が期待される。

鶴見山古墳は、全長約110m、墳丘長約85m の前方後円墳で、後円部に横穴式石室を構築している。円筒形埴輪・形象埴輪（人物）が出土しており、6世紀中～後半の築造とされている（註4）。

釘崎古墳群は、前方後円墳4基（1～4号墳）、円墳8基からなる古墳群で、現在、釘崎1号墳で重要遺跡確認調査が行われており、調査成果に期待される（註5）。

その他の主要古墳として、弘化谷古墳・丸山塚古墳・茶臼塚古墳・立山丸山古墳・童男山古墳などがある。弘化谷古墳は全長約59m、墳丘径約39m の二段築成の円墳である。横穴式石室を埋葬主体部とし、石屋形には鞍・双脚輪状文・円文・三角文が描かれる装飾古墳で、6世紀中頃の築造とされる（註6）。丸山塚古墳は墳丘径約33m の円墳で、複室の横穴式石室を内部主体とする。玄室奥壁と前門・玄門立石に円文・三角文・蕨手文などが描かれた装飾古墳で、6世紀後半代に比定されている。茶臼塚古墳は墳丘径約24m の円墳で、主体部は不明。立山丸山古墳は全長46m の前方後円墳で、八女古墳群中最東端の前方後円墳である。石室形態は明らかではないが、墳丘からは円筒形埴輪が採集されている。童男山古墳は墳丘径約20m の円墳で、巨石を使用した複室の横穴式石室を内部主体とし、奥壁に接して石屋形があり、左壁沿いには削り抜きの棺床が設けられており、石室構造から6世紀中～後半頃と推測されている（註7）。

集落遺跡については、近年、豪族居館とみられる遺跡が発見されており、二三紹介しよう。

深田遺跡の環濠は東西81m、南北61m、溝幅2～4m で、6箇所に突出部を有する。削平により1軒の住居しか確認されていないが、環濠内出土の土師器は4世紀前半に比定されている。

平田六反田遺跡の環濠は東西約30m、南北約20m の検出に留まるため全体の規模は明らかでないが、溝内出土の土師器は4世紀前半に比定されている（註8）。

以上、八女市域の遺跡を中心に概観してきた。八女古墳群の調査研究は伸展しているものの集落・生産遺構の調査研究は遅ればせの感がある。今後の調査研究に期待したい。

註1 筑後市教育委員会 1984 「瑞玉寺古墳」（筑後市文化財調査報告書第3集）

註2 八女市教育委員会 1972 「岩戸山古墳」

森 貞次郎「筑後国風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」『九州の古代文化』（1983）所収

註3 八女市教育委員会 1972 「立山山窯跡群」

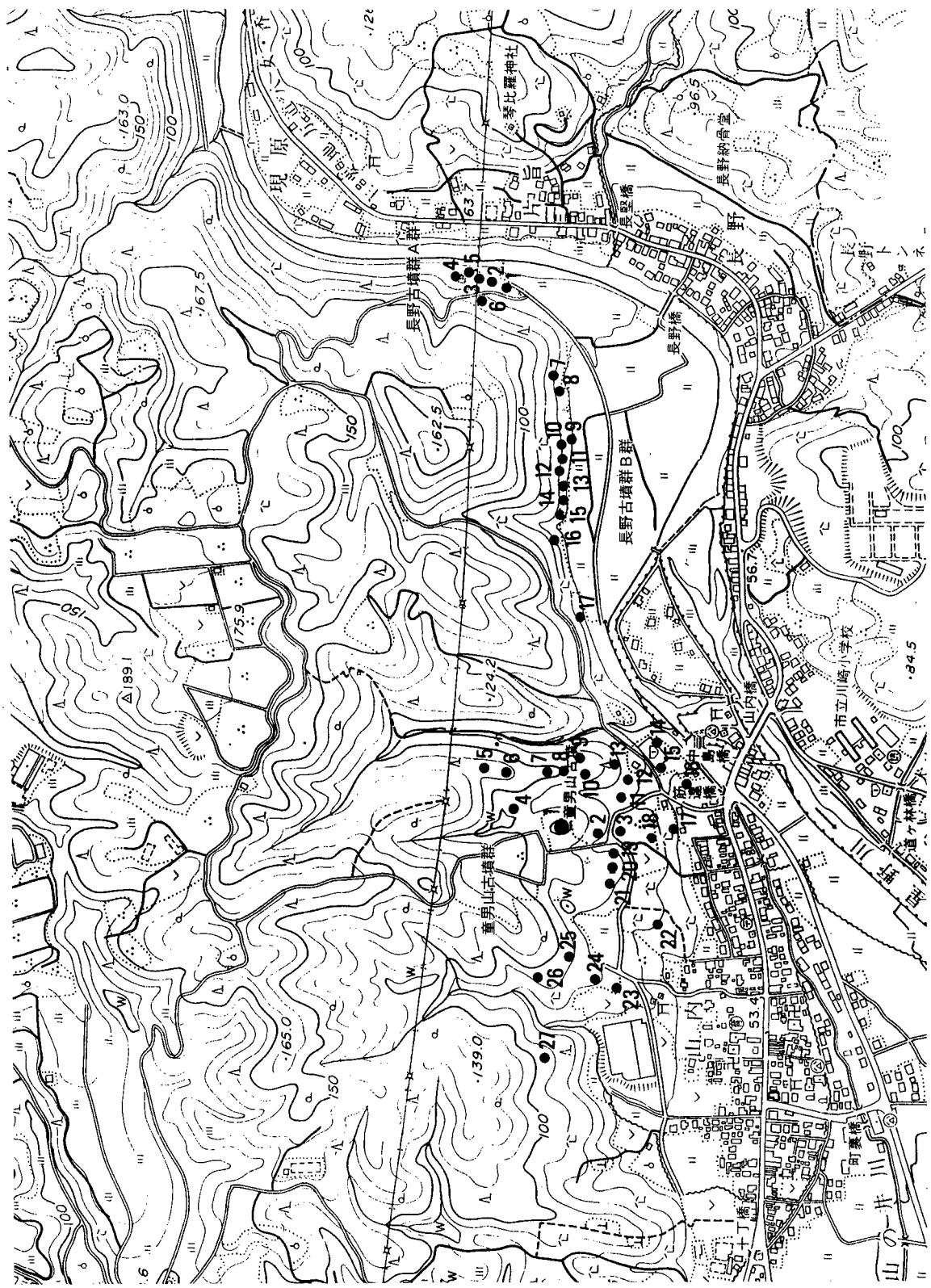
註4 八女市教育委員会 1986 「鶴見山古墳」（八女市文化財調査報告書第14集）

註5 八女市教育委員会 1992 「釘崎古墳群」（八女市文化財調査報告書第24集）

註6 広川町教育委員会 1991 「弘化谷古墳」（広川町文化財調査報告書第8集）

註7 八女市教育委員会 1983 「立山山古墳群」（八女市文化財調査報告書第10集）

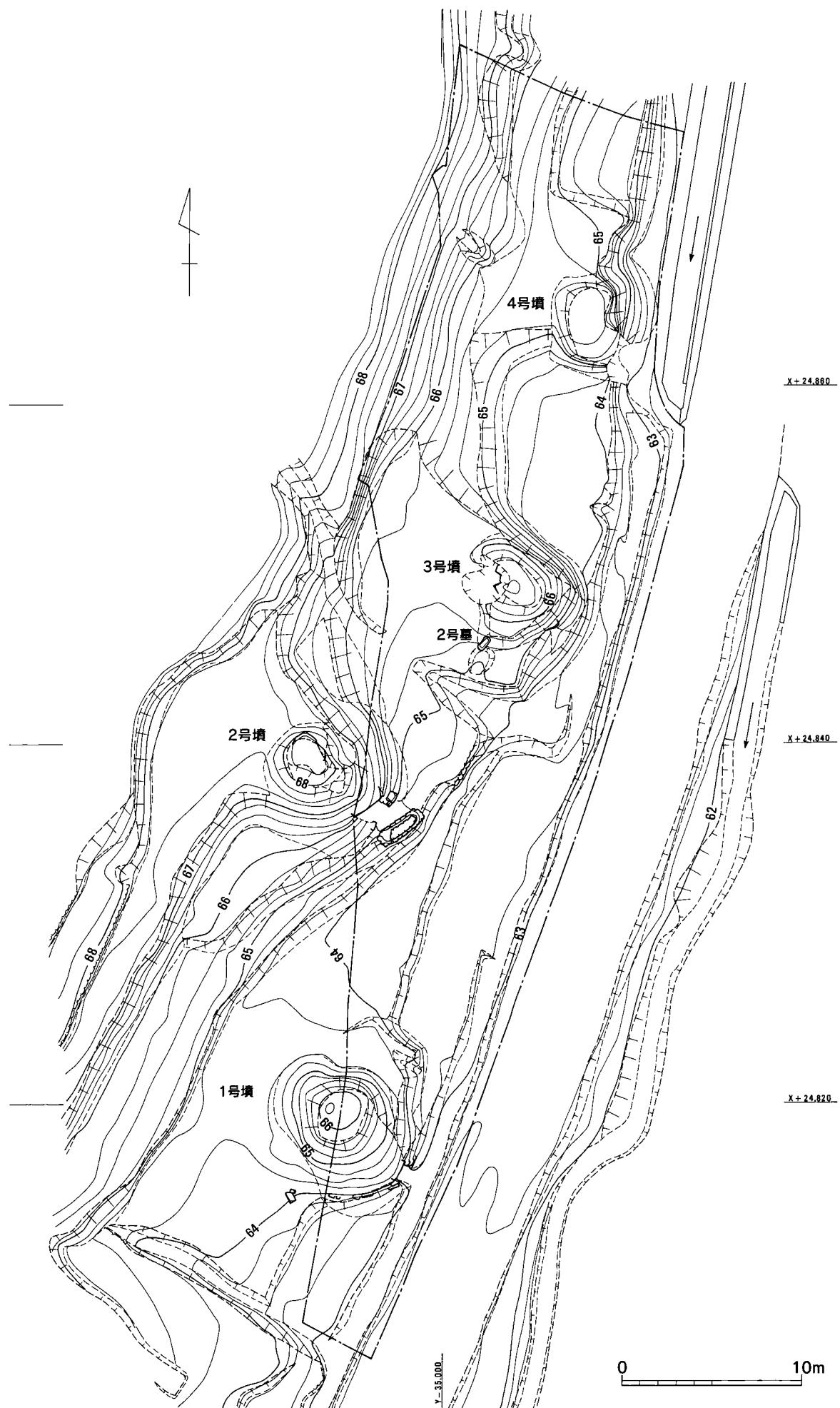
註8 大塚恵治「八女市域の古墳時代前期集落」『第1回九州前方後円墳研究会シンポジウム発表要旨』
1998



第2図 長野古墳群周辺古墳分布図 (1/10,000)



第3図 長野古墳群周辺地形図(1/1,500)



第4図 長野古墳群地形図（表土除去前、1/300）

III 検出遺構と出土遺物

1. 遺構の概要

本調査は長さ約80m、幅員約12mの道路拡幅部分を調査対象としたが、実質的な調査面積は520m²である。長野古墳群は丘陵斜面から裾部平坦面にかけて築造されており、調査対象地に含まれている南側の古墳から1・2・3・4号墳と番号を付した。

検出した遺構には、縄文時代の遺構として集石遺構1基、埋甕1基、包含層がある。古墳時代の遺構には横穴式石室古墳5基、落込1基、石切場遺構がある。江戸時代～近代の遺構には近世墓5基、胞衣壺3基がある。出土遺物としては、縄文土器・須恵器・土師器・陶磁器・装身具・鉄器・銅製品・古錢・石器・土製品などが出土している。

なお、1号墳北側での基本層序は、表土（7～12cm）、褐色土（20cm）で、その下が円礫混じりの赤褐色土の地山となるが、2号墳の東側平坦面には暗褐色土の縄文時代包含層が存在していた。

2. 古墳時代の遺構と出土遺物

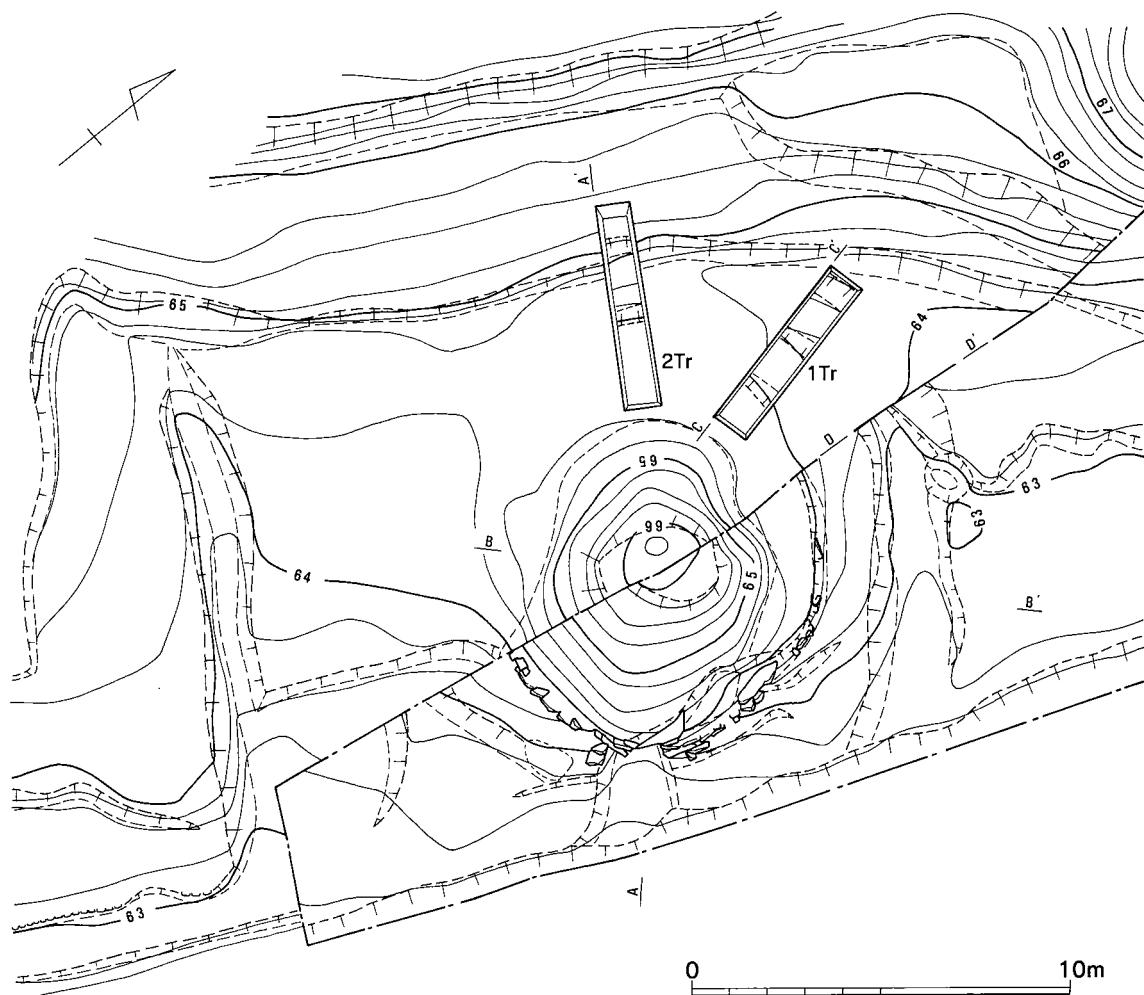
（1）横穴式石室古墳

1号墳（図版3～14、第4～12図）

調査区の南端に位置する。標高63～64mの丘陵裾部平坦面に築造されている。墳丘の東半分が路線にかかる形となったが、道路工事の施工上、墳丘・石室とも掘削される恐れがあったので、主体部は完掘し、調査区外にもトレンチを設定し、墳丘規模の確認を行った。

墳丘（図版3～6、第4～7図） 表土除去前は6×9.5mの橢円形状を呈していた。墳丘の南側には近世墓があり、南西部が抉れているのはその事と関係があるものと思われる。周溝は墳丘の北側及び1・2Trで確認したが、南側では段落ち状を呈し、周溝と言える程明瞭なものではなかった。周溝は1Trで幅2.2m、深さ0.5m、2Trで幅2.4m、深さ0.5m、墳丘北側で幅2.2～2.5m、深さ0.6mを測り、北側の緩やかに曲がる形状からして馬蹄形に巡っていたものと考えられる。墓道側が線路の石垣で壊されているため正確な数値は測り得ないが、墳丘の規模は長径が15m、短径は12m程になろう。また、周溝を含めた墳丘外径は長径17m、短径15m程であろう。地山調整面からの墳丘の高さは羨道部側で3.2m、奥壁側で2.1mを測る。

墳丘裾部には羨道部から墳丘の1/4程度まで外護列石が確認されるが、奥壁側にも巡らせていたかは確認し得ていない。形状は周溝と同じ馬蹄形に巡らせており、南北径は8.0mを測る。外護列石は基底部に長さ60cm程の大きめの片岩を据え、その上に40cm程の片岩及び川原石を2～3段積んでいる。左側の石積みは上の石が迫り出しているものの密に積んでおり、まさに外護列石という感があるが、右側の石積みは1段ないしは粗く積んでおり、墳丘裾部の計画線的な印象を受ける。また、北側部分は一部二重に巡らせているが、墳丘築造時に盛土が崩壊したため積み直しを行ったものであろうか。外護列石から周溝肩部までの距離は1.5mを測ることから、その間が墳丘平坦面ということになる。

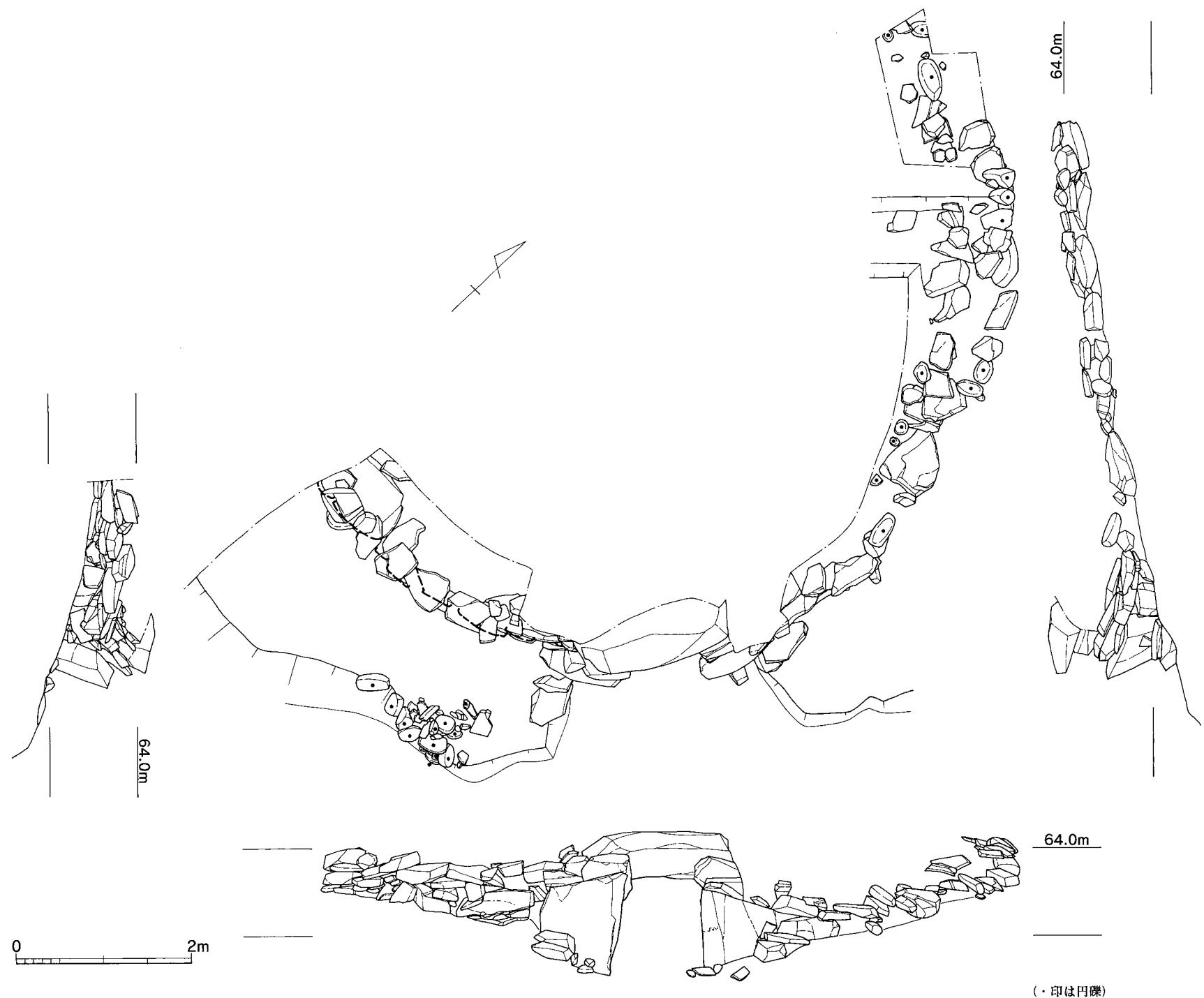


第5図 1号墳墳丘測量図 (1/200)

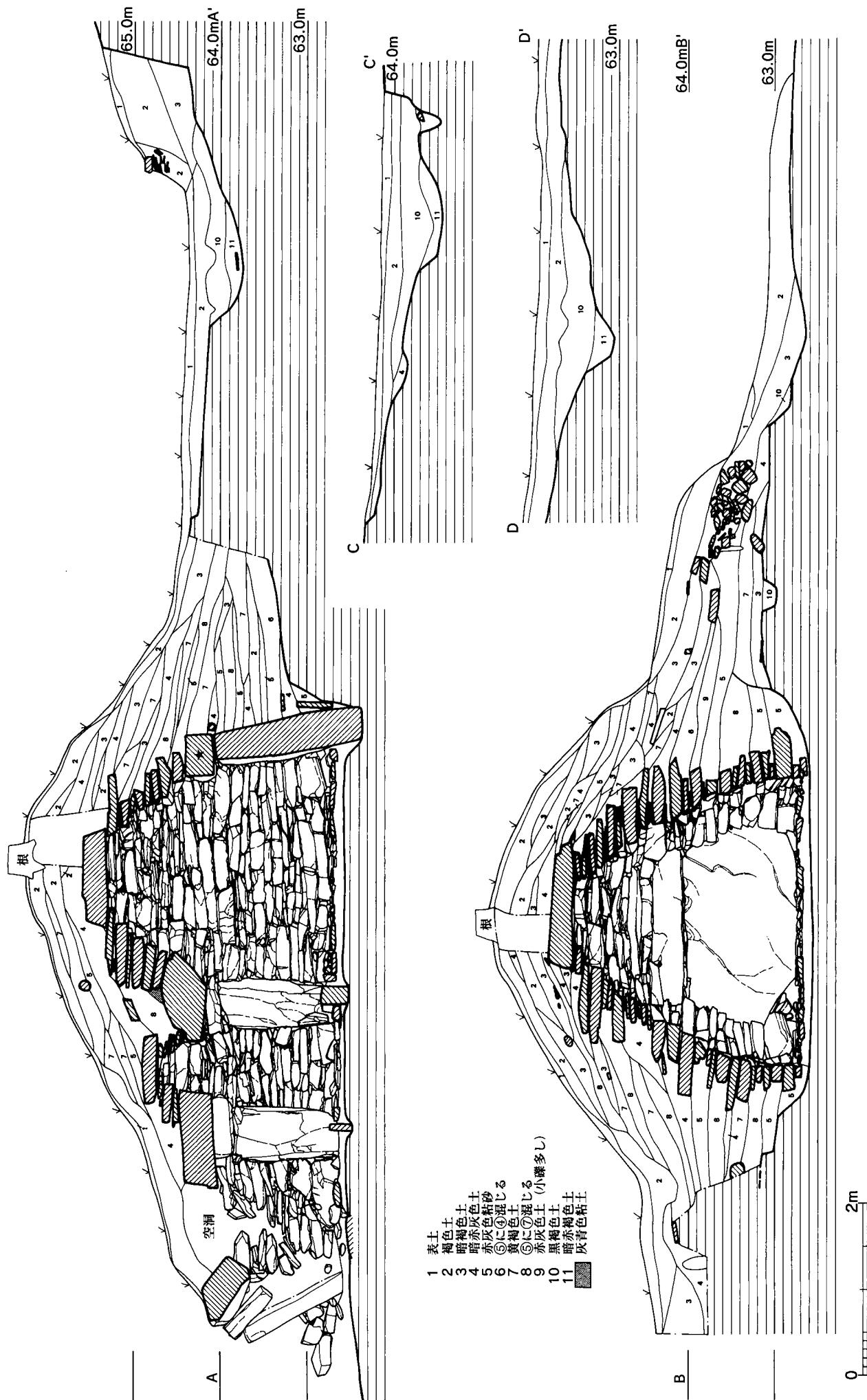
墳丘盛土は赤灰色粘砂を基調とし、暗褐色土・黄褐色土などが盛られている。土盛りの方法は、墳丘縦断面及び横断面の土層を観察すると、先ず石室掘形上面から1mの高さ（奥壁鏡石及び玄門立石・前門立石・羨道立石の高さ）まで水平に盛り上げる。この際、外護列石が土盛り範囲の明示と土止めの役割を担ったものと考えられる。次に、4~5段程（楣石の厚さ）石積みを行い、露出している部分を覆う様に盛る。そして、先に盛った部分に繋げて斜め方向に盛る。これを数回交互に繰り返して、墳丘を構築している。興味深い点は、石と石との隙間部分に灰青色粘土を目貼りとして詰めている点である。また、天井部付近の盛土は堅く締まっているのに対し、下位の部分はそれ程締まっていなかった。

埋葬主体部（図版7~11、第7・8図） 本墳の埋葬主体部は、南東方向に開口する複室構造の横穴式石室である。石室は地山調整面から深さ0.65m掘り下げて構築されている。石室は全長6.36mを測り、主軸をN45°Wに取る。石室の壁体には緑簾片岩の割石が用いられている。

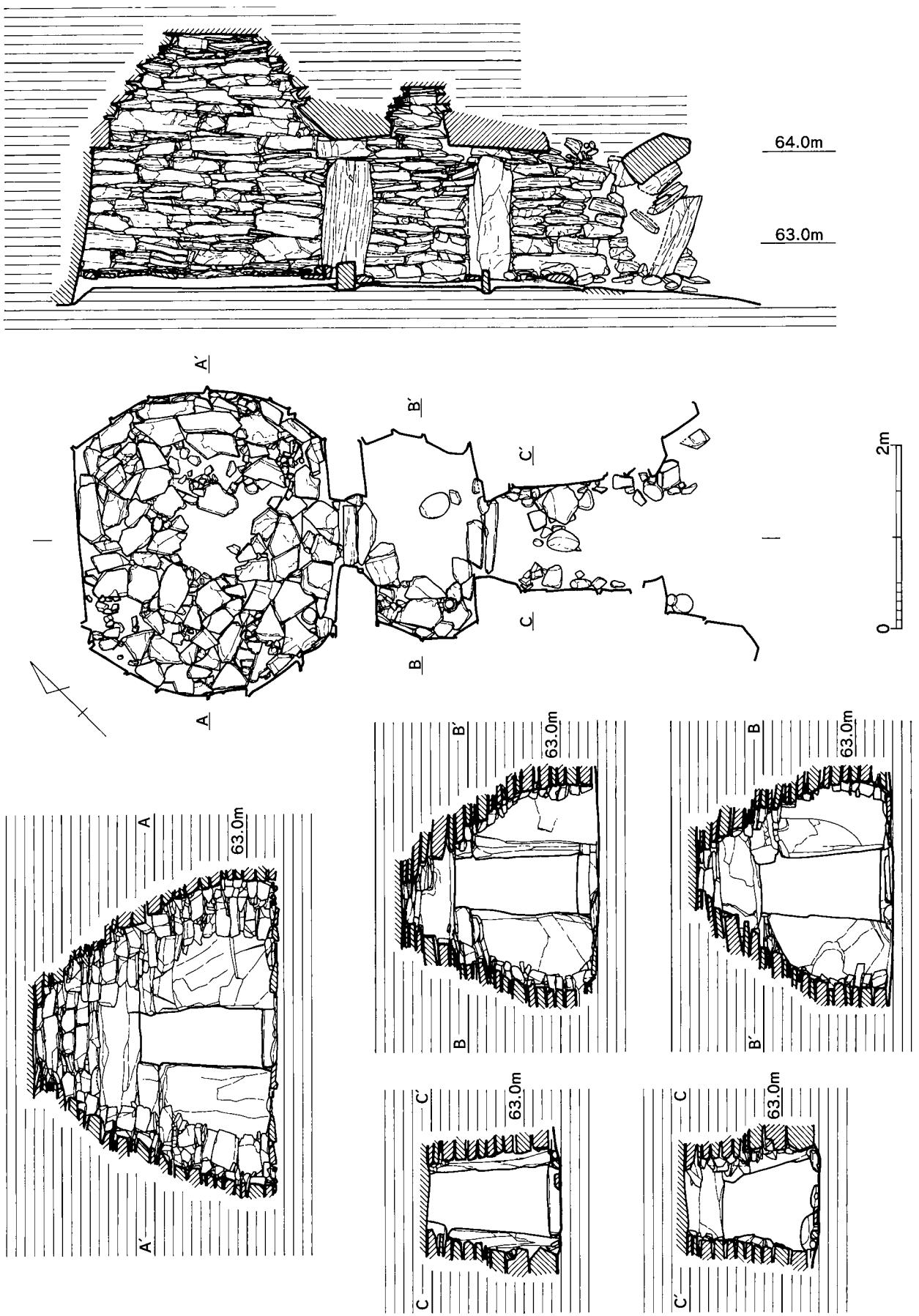
玄室の床面プランは三味線胴張り形を呈し、長さ2.8m、最大幅3.3mで、天井石までの高さ2.64mを測る。奥壁の基部には長さ2.3m、高さ1.7m、厚さ0.42mの鏡石を立て、その上に長さ1.8m、高さ0.4m、厚さ0.48mの大きめの石を乗せ、それから上は長さ50cm程の石を持ち送りで8段程積み上げている。側壁は40~70cm大の石を床面から60cmの高さまではほぼ垂直に積み上げ、次に鏡石の



第6図 1号墳外護列石実測図 (1/60)



第7図 1号填墳丘盛土・周溝土層実測図 (1/60)



第8図 1号墳石室実測図 (1/60)

高さまで65°の傾斜角で持ち送りしながら積み上げている。また、墳丘横断面の左壁側を観察すると★印の石から上2段は割に大きな石を積んでいるが、それから上は薄い板石と厚めの石を交互に積み上げ、天井石を架構している。これは、墳丘盛土とも対応しており、石を数段積んでは土盛りを繰り返すと言った石積みと土盛りの連続した作業工程が復原できる。

天井石は長さ1.50m、幅1.15m、厚さ0.28mの大きさで、比較的小型のものであった。床面には20~50cm大の片岩の割石が敷かれており、隙間には円礫を充填していた。玄室からは装身具が出土しているが、原位置を留めるものではなく、埋土を洗浄して発見したものである。前室との境には壁状に玄門立石があり、玄門部は幅0.63mで、櫛石から楣石までの高さは1.32mを測る。

前室の平面形は胴張りを呈し、長さ1.27m、最大幅2.20m、天井石までの高さは2.12mを測る。側壁は20~50cm大の石を床面から90cmの高さまでは垂直に積み、それから天井石までは52°の傾斜角で持ち送りしながら積み上げている。玄室の積み石と比較するとやや小振りの石材を使用している。前室の敷石は左壁側のみ遺存するが、敷石に密着して須恵器の坏身が口を下にした状態で出土した。また、埋土中からはこの身とセットになる蓋が出土している。前室との境には壁状に前門石を立てており、前門部は幅0.63m、楣石までの高さは1.34mを測る。

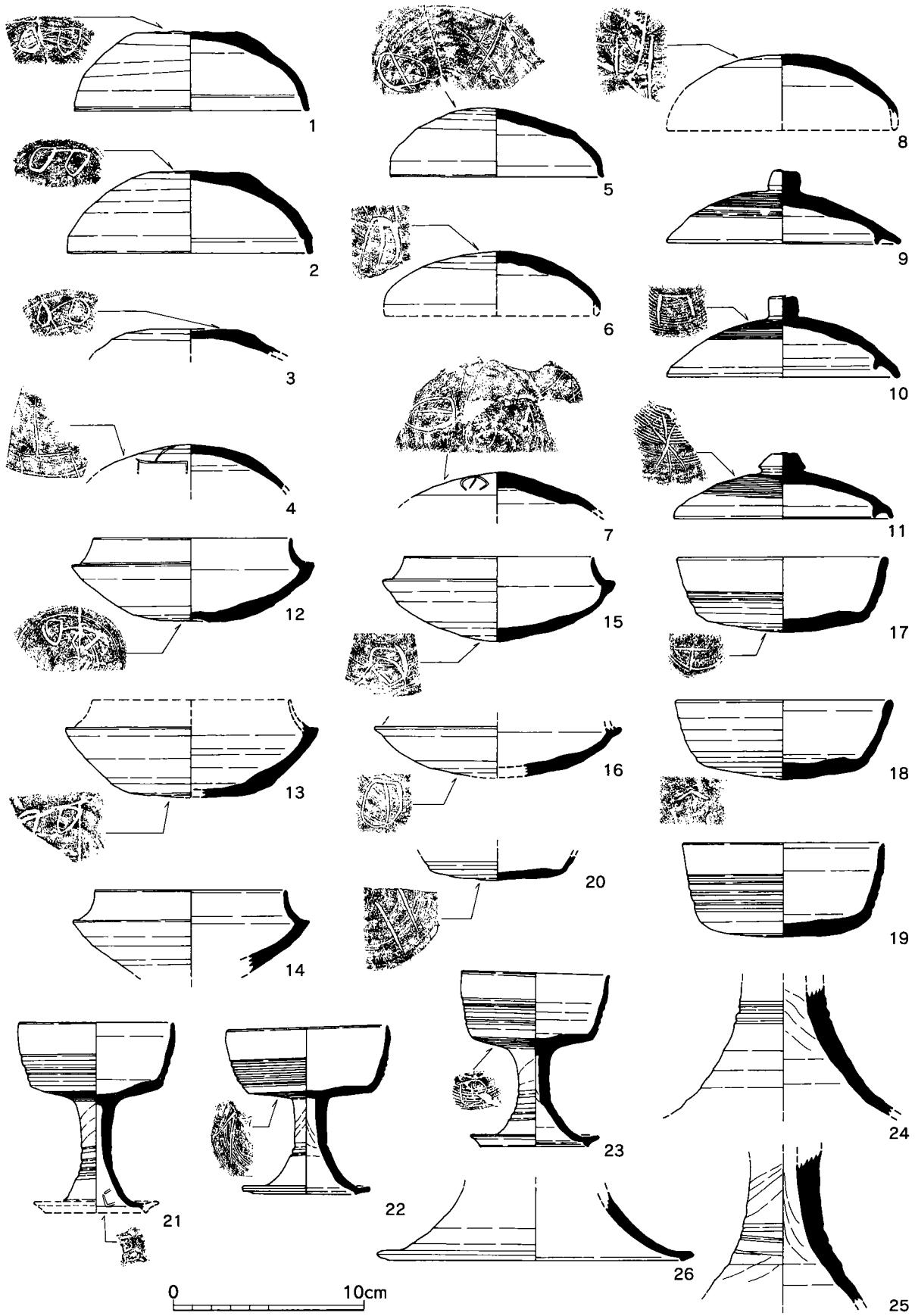
羨道部は長さ1.97m、前室側での幅1.12m、羨道立石での幅1.08mを測る。左右両壁とも基底部には大きめの石を据え、81°の傾斜角で上窄まりに10段程積み上げている。また、羨道部の先端は羨道立石が前方に傾いたため天井石及び壁面積み石が崩壊している。本来、羨道立石に架構した天井石の高さと前門立石及び玄門立石に架構した楣石のレベルはほぼ同じ高さのものと構築されたものであろう。なお、羨道部入口は戦後には既に開口していたとのことであり、床面に存在する川原石は閉塞石であった可能性を有する。

墓道は先端が線路の石垣に壊されているため長さは不明であるが、羨道部から「ハ」字形に開き、現状で2.6mの長さを有する。羨道立石に接して積み石があり、左側が2列2段の長さ1.0m、高さ0.35m、右側は1列2段の長さ0.52m、高さ0.36m残存している。左側積み石の埋土中から鉄鏃が2点、墓道埋土から多量の須恵器が出土しているが、石室内部の掻き出しによるものと考えられる。

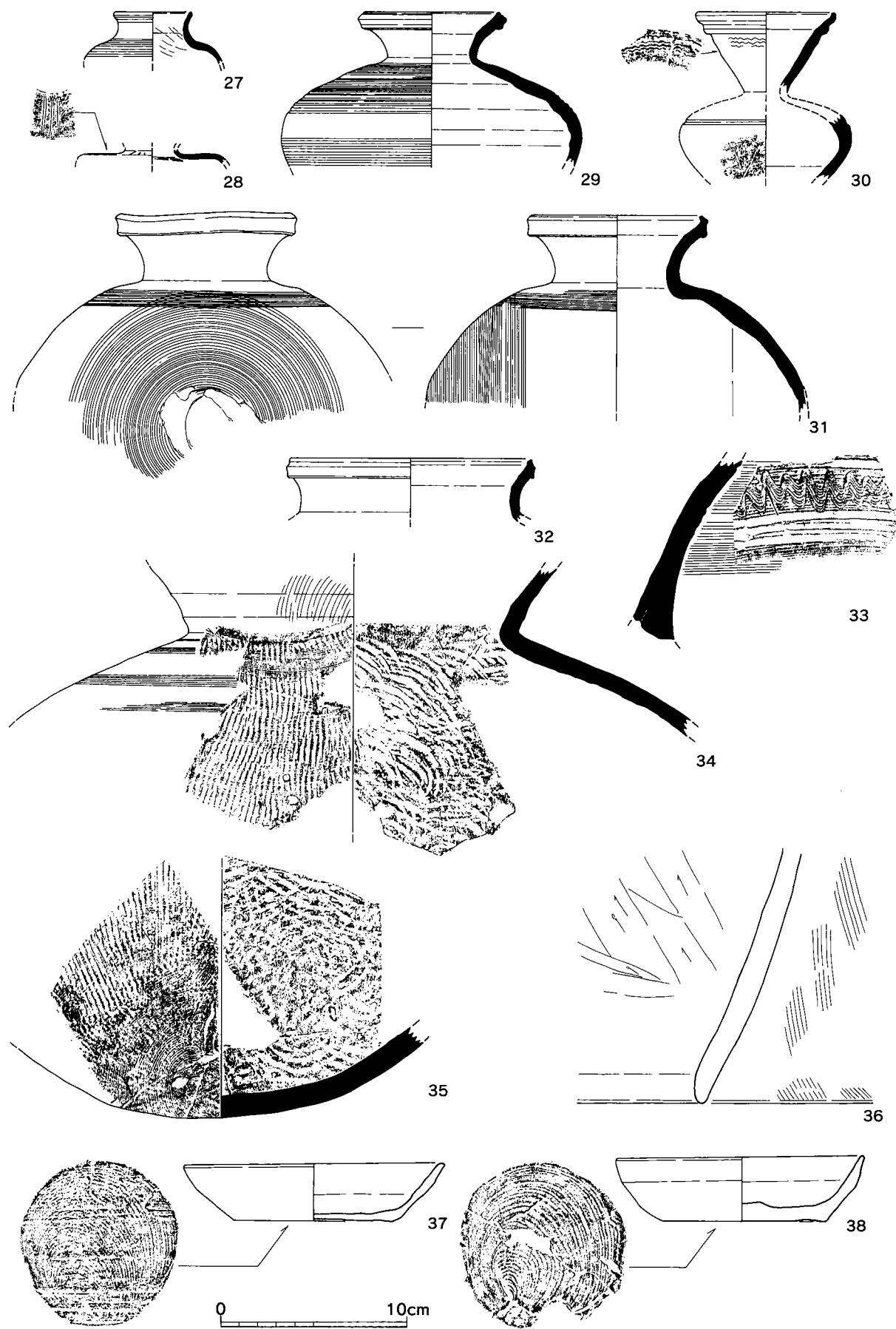
出土遺物（図版12~14、第9~12図）

須恵器（1~35） 1~11は坏蓋で、1~7の天井部はドーム形を呈する。1・2は口縁部内面に僅かな段を有する。1は器高4.2cm、口径12.4cmで、2は器高4.3cm、口径12.9cmを測る。3・4・7は口縁部を欠く。一応、蓋として実測したが、身になるかも知れない。5は1・2に比して小振りの器形で、器高3.6cm、復原口径11.2cmを測る。6は口唇部を欠くが、小振りの器形。8も口縁部を欠く。9~11は口縁部内面に身受けのかえりを有し、天井部には断面台形の摘みを付している。9・10は完形品で、器高は9が3.9cm、10は4.2cm、11は4.5cmで、口径は9が12.3cm、10は12.2cm、11は11.5cmを測る。何れも外天井部にカキ目を施している。1~3・8の焼成はやや軟質で、灰色を呈する。9・10の焼成は悪く、灰白色を呈する。他は堅緻で、灰青色を呈する。天井部外面には1・2・3が丸眼鏡形、4は「凸」、5~7は「中」と「#」、8は「II」、10は「□」、11は「×」の範記号を付している。1~8・11は墓道埋土中の出土で、9・10は前室埋土から出土した。また、10が17の身とセットで、11は18の身とセットになるものと思われる。

12~18・20は坏身。12・14・15は受部を有し、口縁部は外反気味に立ち上がる。13・16は口縁部を欠く。12は器高4.4cm、復原口径9.8cmを測る。17・18・20は無高台の身。17は体部外面下位に2



第9図 1号墳出土土器実測図① (1/3)



第10図 1号墳出土土器実測図② (1/3)

条の沈線を巡らせている。18は底部との境に段を有する。17・18は完形品で、器高は17が3.9cm、18は4.2cmで、口径は17が11.1cmで、18は11.4cmを測る。12～14の焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。17・18の焼成は悪く、灰白色を呈する。他は堅緻で、灰青色を呈する。外面には12・13が丸眼鏡形、15・16は「中」と「井」、17は「丁」、18は「ヘ」、20は「ノ」の範記号を付している。12～16・20は墓道埋土中の出土で、17は前室埋土、18は前室左壁側の床面から出土した。

19は深めであることから椀とした。器高4.9cm、復原口径10.5cmを測る。外面には5条の範描沈線を施している。焼成は堅緻で、内外面には灰が厚く被っている。

21～26は高坏。21～23は小型の無蓋高坏で、何れも坏部と脚部外面に範描沈線を数条施している。器高は22が8.9cm、23は9.3cm、口径は22が8.7cm、23は7.2cmに復原した。21の焼成は悪く、灰褐色を呈する。何れも墓道埋土黒褐色土中の出土。また、21は脚部内面に「口」、22は坏部外底面に「ヘ」、23は「中」の範記号を付している。24～26は脚部の破片であるが、有蓋高坏になろう。24・25は脚柱部の破片であるが、残存部位にスカシ窓はみられない。26は裾部の破片。24・25とも脚部の中程に3条の範描沈線を巡らせている。何れも焼成は堅緻で、暗灰青色を呈する。24がIV区周溝上層、25はIV区墳裾テラス、26は1号墳周辺の採集品。

27～29は壺で、27・28は小型品。27の口径は4.1cm。28は肩部の破片であるが、外面には「川」の範記号を付している。29の頸部はよく締まり、胴部に5条の範描沈線を巡らせている。口径は7.2cm。何れも墓道埋土の出土。30は頸の破片で、口縁部と体部は接合しないが、同一個体になろう。口唇部の直下に突帯を貼付し、その下に4条の雑な櫛描き波状文を施している。体部には沈線と「下」の範記号を付している。焼成は軟質で、灰黄色を呈する。墓道埋土中の出土。

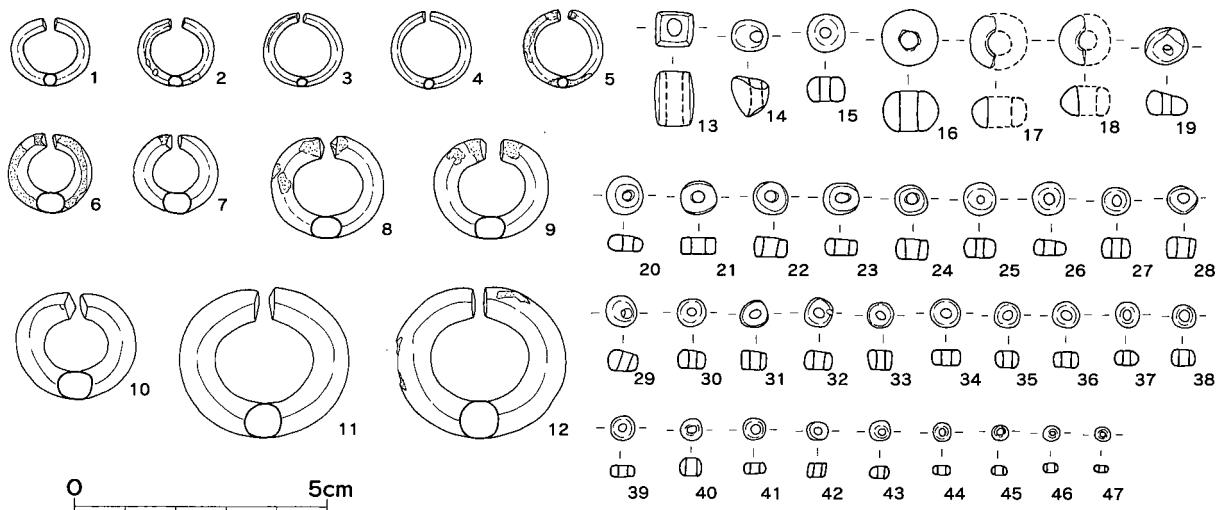
31は横瓶の口縁～胴部にかけての破片。体部外面はカキ目調整により、4条の範描沈線を施している。墓道埋土中の出土。32は口縁部の破片であるが、頸部の締まりは悪い。IV区墳裾と落込出土品が接合した。33～35は甕で、33は頸部、34は頸部～肩部、35は底部の破片。33は沈線間を波状文で充填している。34の外面は平行タタキの後雑なカキ目を施し、内面は円弧タタキによる。35は外側が擬格子タタキで、内面は円弧タタキの後一部ナデ消している。33がIV区墳裾テラス上面の出土で、34・35は墓道から出土した。

土師器 (36～38) 36は甕の底部破片で、II区周溝黒色土の出土。外面ハケ目、内面範ケズリによる。37・38は羨道部奥側埋土中出土の坏で、底部切離しは糸切りによる。37は完形品で、器高3.2cm、口径14.0cm、底径8.5cmを測る。38は器高3.5cm、口径13.4cm、底径8.9cmを測る。また、37の外底面には「一」文字の墨書がある。

装身具 (1～47) 1～12は玄室埋土出土の耳環で、何れも胴胎金箔張り。法量からして1・2、3・4、6・7、8・9、11・12が一对になろう。腐食が進む中、10は鮮やかな光沢を放っている。

表1 耳環法量表 (単位: cm, g)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径	1.54	1.50	1.56	1.60	1.58	1.65	1.65	2.20	2.20	2.35	3.30	3.30
短幅	1.35	1.35	1.50	1.55	1.55	1.65	1.55	2.00	1.95	2.10	2.95	3.00
厚さ	0.25	0.25	0.20	0.20	0.20	0.40	0.40	0.60	0.60	0.75	0.70	0.75
重さ	1.1	1.0	1.4	1.5	1.0	4.2	4.7	8.2	7.8	12.6	25.4	24.1



第11図 1号墳玄室出土装身具実測図 (2/3)

13~47は玄室埋土の玉類。13は水晶の角玉、14は翡翠製の小玉、15は瑪瑙製の小玉、16~18はガラス製の玉で、19~47は小玉。法量は計測表を参照されたい。

表2 玉類計測表 (単位: mm, mg)

	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
径	11.0	8.0	7.5	11.0	11?	10.0	8.5	7.5	7.0	7.0	7.0	6.5
厚さ	7.5	7.5	5.0	8.5	6.0	6.0	5.0	3.5	3.5	4.5	3.5	4.5
重さ	880	550	450	2570	—	—	420	270	300	300	250	220
色調	透明	灰色	琥珀色	灰白色	白色	淡緑色	コバルトブルー	〃	ブルー	コバルトブルー	〃	〃
	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
径	6.5	6.5	6.0	5.5	6.5	6.0	5.5	6.0	5.0	6.0	5.5	5.5
厚さ	4.0	3.5	4.0	4.5	4.5	4.0	3.5	4.0	4.0	3.0	3.5	3.5
重さ	300	230	250	250	250	210	200	200	190	190	150	150
色調	ライトブルー	〃	コバルトブルー	ブルー	コバルトブルー	〃	〃	〃	ライトブルー	コバルトブルー	〃	ブルー
	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	
径	5.0	5.0	5.0	4.0	4.5	4.0	4.0	3.5	3.5	3.0	3.0	
厚さ	3.0	3.0	2.5	4.5	2.4	3.0	2.8	2.0	2.0	2.0	1.5	
重さ	150	150	130	140	110	110	100	50	50	50	50	
色調	ブルー	グリーン	ブルー	コバルトブルー	ブルー	グリーン	ライトブルー	ダークグリーン	グリーン	〃	〃	

鉄器 (1~27) 1~13は鉄鎌で、1・2は鎌身の完形品。1は方頭斧箭式鎌で、長さ16.0cm、頭部幅1.9cmで、身の中央部での幅1.0cm・厚さ0.4cmで、重さは19.7gを量る。2は圭頭斧箭式鎌で、長さ13.1cm、頭部幅2.65cm、茎側での幅0.95cm・厚さ0.45cmで、重さは14.8gを量る。3・4は方頭

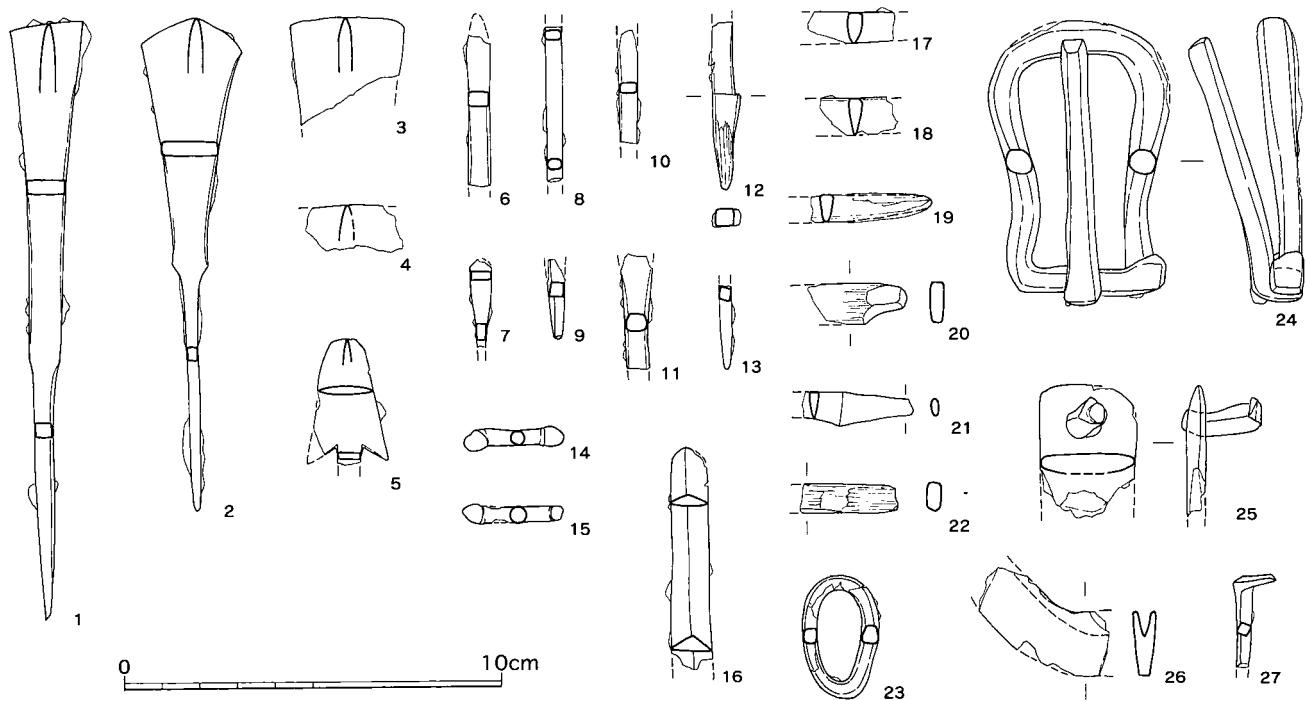
斧箭式鎌の頭部破片で、5は両丸造腸挟三角形式鎌の身部破片で、先端は丸くなっている。6・7は鎌身部分の破片であろう。8～13は茎部の破片で、9・12・13は茎先端部の破片。1・2が墓道埋土、3・4・6～9が玄室埋土、5・10～13は前室埋土の出土。

14・15は所謂、弓付金具で、両端部が丸くなっている。14は長さ2.6cm、径0.4cmで、重さは1.3gを量り、玄室埋土の出土。15は長さ2.6cm、径0.5cmで、重さは1.3gを量り、前室埋土の出土。16は鉈の先端部分破片で、断面三角形を呈する。残存長5.95cm、幅1.1cm、厚さ0.45cm。玄室埋土中から出土した。

17～22は刀子。17・18は刃部破片で、よく使い込まれており、刃部は細くなっている。19～22は茎部分の破片で、木質が遺存している。17～20・22が玄室埋土出土で、21は前室埋土の出土。

23はリング形を呈し、繋ぎ目が見当たらないことから鋳造品であろう。長径3.25cm、短径2.0cm、厚さ0.35cm、重さ2.2gを量る。表面には銀箔を巻いており、刀などの足金具になろう。玄室埋土中から出土した。

24は鉸具で、径0.7cmの鉄棒を折り曲げて輪金を造り、基部に鉄棒を巻き付けて刺金を取り付けている。輪金の長さは7.2cmで、刺金の長さは7.1cm。重さは48.5gを量る。墓道部埋土上層の出土である。25は板状の金具に鉈が打たれた金具で、上端部は丸くなっている。上部幅2.6cmを測る。用途は不明。前室埋土の出土。26は鋤先の先端部破片で、幅1.7cmを測る。断面はV字形を呈する。墳丘南側掘下げ時に出土した。27は鉄釘でL形を呈する。先端を欠き、残存長2.4cm、頭部幅0.4cm。前室埋土中の出土。



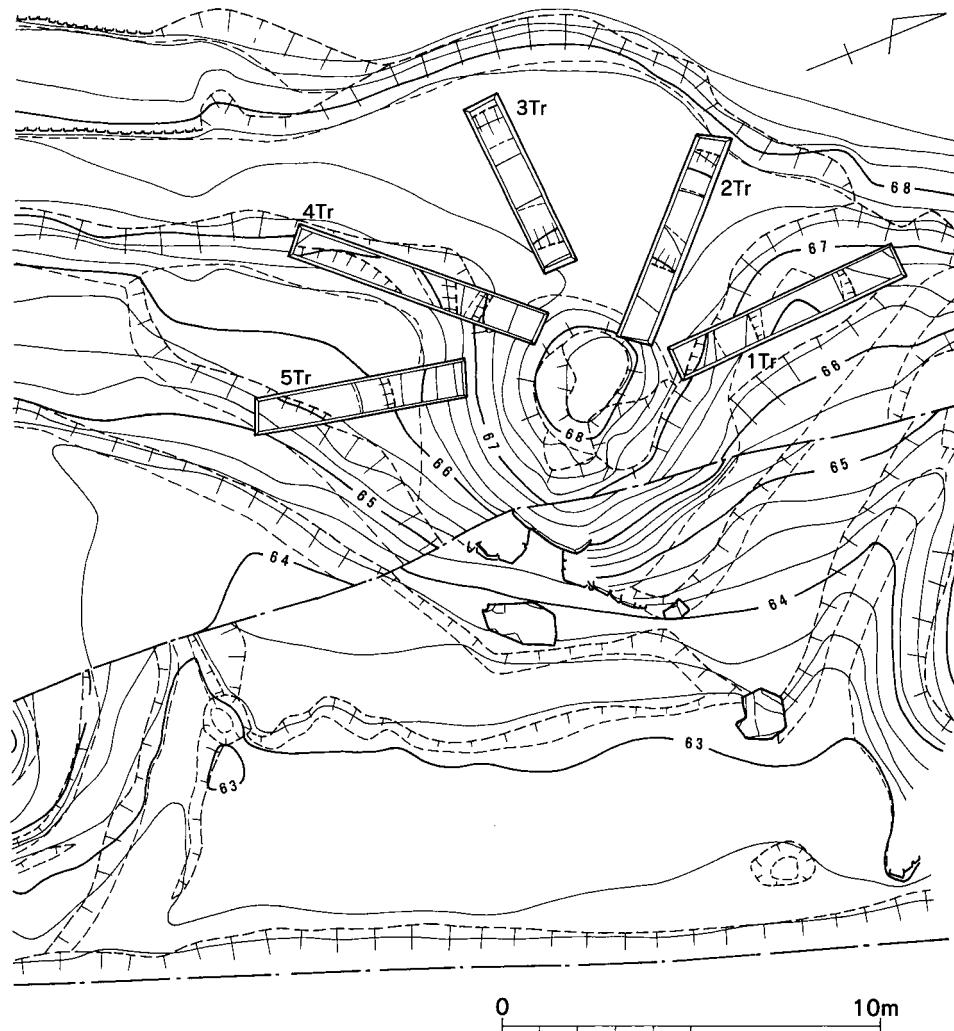
第12図 1号墳出土鉄器実測図 (1/2)

2号墳（図版15～25、第4・13～19図）

調査区の中央西側に位置する。標高65～67mの丘陵緩斜面に築造されている。墳丘先端部が若干路線にかかる形となつたが、墳丘自体は調査区外に存在するため墳丘の断割りは行わず、トレンチ調査のみで墳丘規模を把握する程度に留めた。

墳丘（図版15～18、第13・15図） 表土除去前は9m程の円墳であったが、墳丘の西側に平坦面があるためそれ程大きいとは感じられなかつた。また、羨道部の前面には古墳の入口を隠すかの様に長さ3m、幅1mの石垣が積み上げられており、2号墳の発掘は石垣を除去することから始めた。石垣を除去するとその下から長さ1.8m、幅1.3m、厚さ0.3m程の板石が出てきた。板石の下には周溝の埋土と同じ黒色土が堆積していたため板石は除去した。石の下からは須恵器の甕片なども出土したが、近世の遺物も含まれていた。黒色土を除去すると前室床面から旧地形が急に下がつてゐる。

墳丘の西側にトレンチを5箇所設定し、周溝の有無、墳丘規模の確認を行つた。周溝幅は1Trで2.8m、2Trで3.3m、3Trで3.9mを測り、4・5Trでも周溝の存在を確認してはいるものの周溝の立上りは明確ではない。深さは2Trで0.6m、3Trで0.55mを測る。墓道部分を欠くため墳丘の正確な規模は測り得ないが、2Trの周溝方部から羨道部先端までは8.6mの墳丘規模で、周溝の立上りから羨道部先端までは12m余りの墳丘規模を有する。また、羨道部先端部分と西側周溝底面との比



第13図 2号墳墳丘測量図（1/200）

高差は3.4mで、羨道部先端からの墳丘の高さは4.0mを測る。

外護列石は羨道部先端立石から左右に直線的に派生しており、右側では2.4mまで確認された。左側は1.1mの確認に留まる。右側の外護列石は基底部に長さ60cm程の長方形の割石を据え、その上に垂直に割石を3段積み上げている。左側の外護列石の石積みは、上の石がずり落ちた状態であった。1・3号墳は外護列石に接続して墓道を兼ねた突堤部を設けているが、後述する如く、本墳にも突堤部が存在した可能性は大きい。

埋葬主体部（図版19～23、第14図） 本墳の埋葬主体部は、南東方向に開口する複室構造の横穴式石室である。石室は全長7.04mを測り、主軸をN48°Wに取る。石室の壁体には緑簾片岩の割石が用いられている。

玄室の床面プランは胴張り形で、長さ2.9m、最大幅3.0m、天井石までの高さ2.95mを測る。奥壁の基部には長さ2.1m、高さ1.4mの鏡石を立て、その上に長さ1.25m、高さ0.5mと大きめの石を乗せ、それから上も比較的大きめの石を持ち送りで5段積み上げている。

側壁は基底部に60～80cm大の石を据え、床面から1mの高さまではほぼ垂直に積み上げ、それから上は56°の傾斜角で持ち送りしながら積み上げている。石室縦断面図を観察すると積み石のレベルが玄門立石・前門立石・羨道立石の頂部で揃っているのが判る。羨道部先端立石が最も下がっているので、三者を結ぶ線は右下がりになっている。次に、奥壁鏡石上場と玄室楣石の下場とを線で結ぶと奥壁側では斜めだった積み石が水平になっているのに気付く。それから上は水平を意識しながら積み上げている。

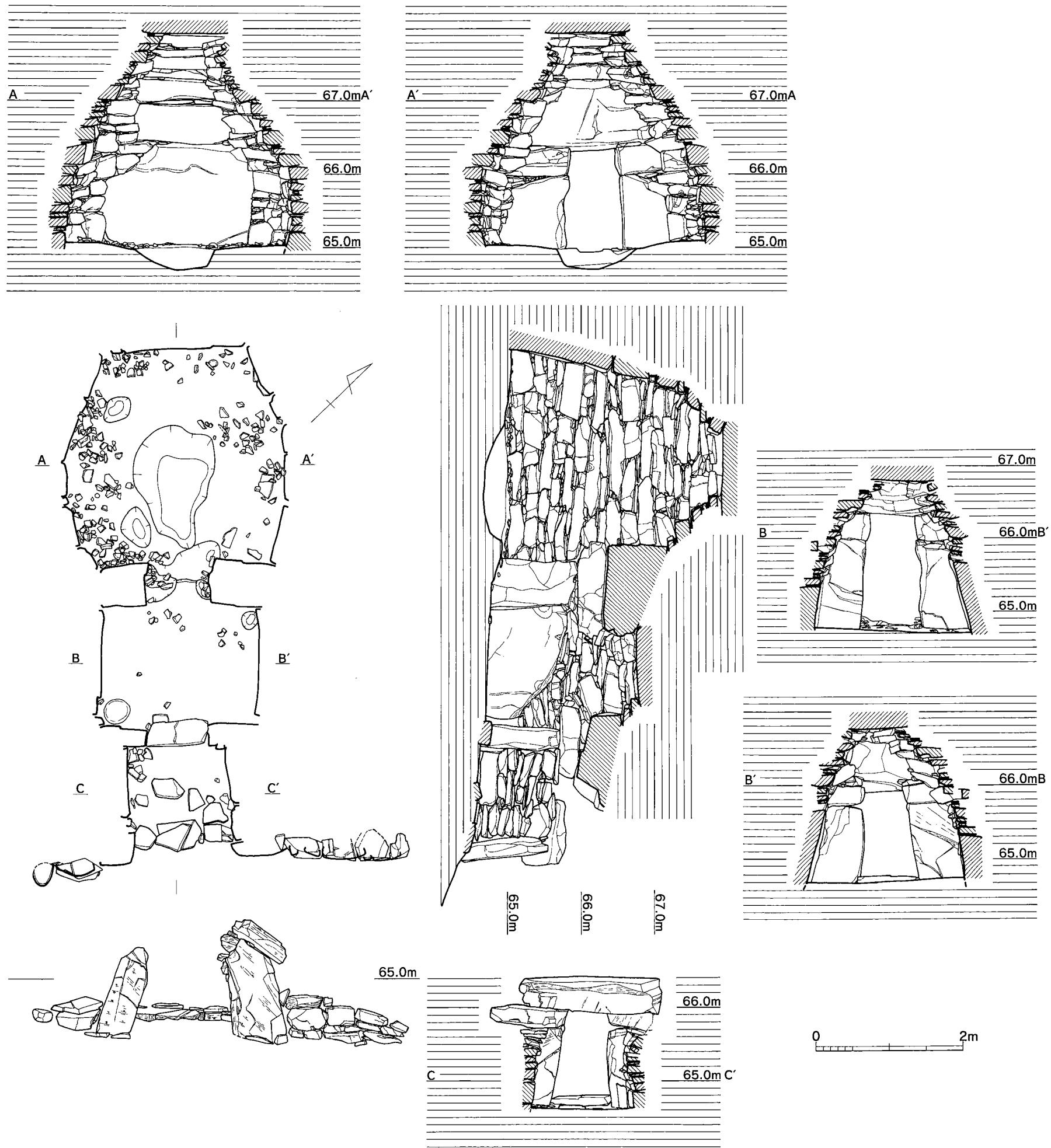
玄室床面中央には1.1×1.7mの攪乱坑があり、埋土中からは古銭・鉄釘などが出土した。また、側壁寄りには石敷が存在するが、大きさは10cm程度でまばらであるため、敷石と言うよりは敷石間を埋めた裏込め石の印象を受ける。また、玄門部の框石は抜き取られて存在しない。前室との境には柱状に玄門立石があり、玄門部は幅0.85mで、床面から楣石までの高さは1.55mを測る。

前室の平面形は方形を呈し、長さ1.75m、幅2.15m、天井石までの高さは2.05mを測る。側壁は基部に板石を1枚立て、前門立石との隙間を割石で塞いでいる。前室の石積みは70°程の傾斜角で持ち送りしながら天井石まで積み上げている。また、前室との境には柱状に前門立石を据えており、前門部は幅0.81m、楣石までの高さは1.36mを測る。

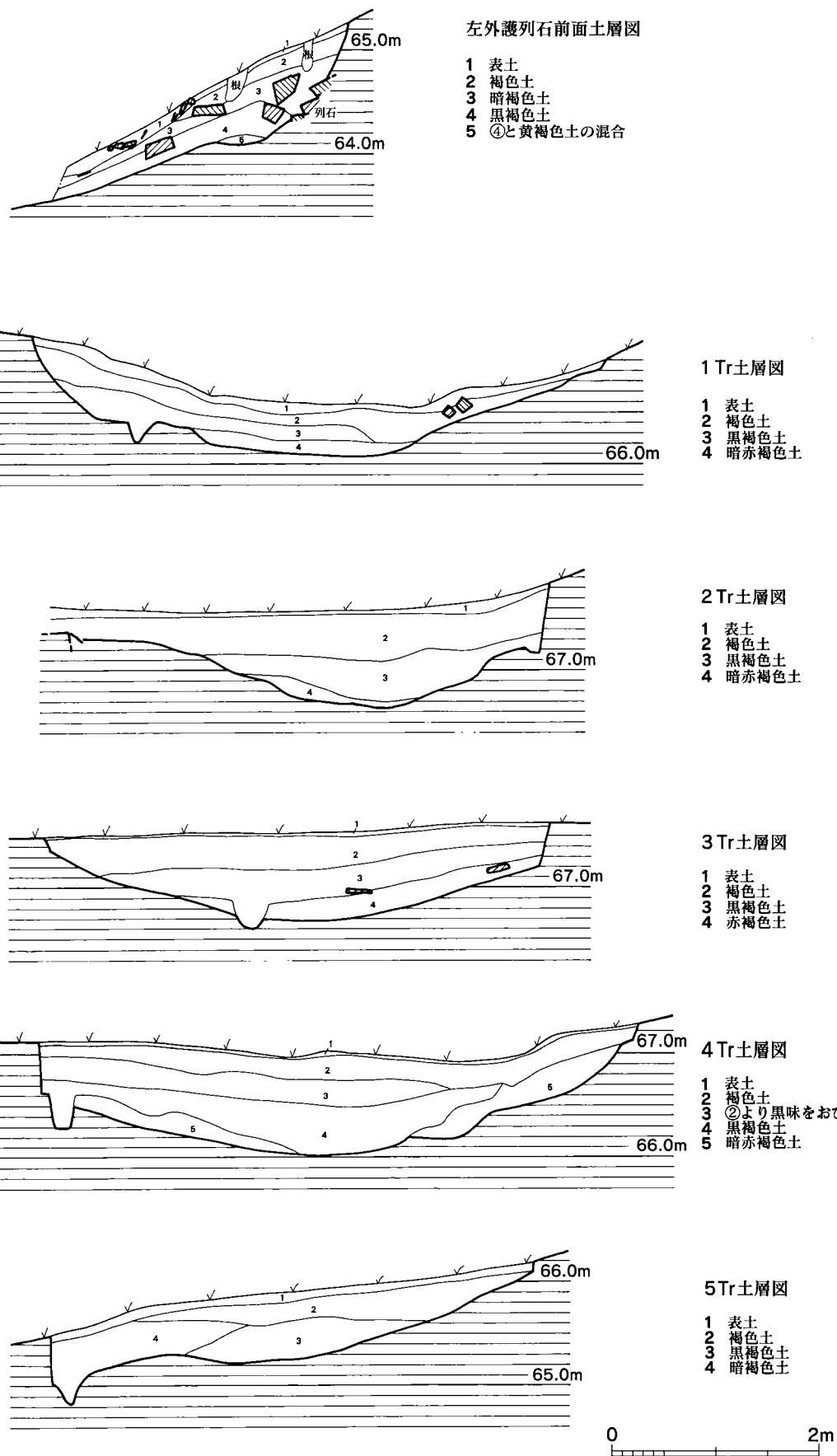
羨道部は長さ1.62m、前室側での幅1.32m、羨道部先端での幅1.48mとほぼ長方形をなす。左右両壁とも基底部には大きめの石を据え、85°の傾斜角で上窄まりに10段程積み上げている。羨道部の先端には立石があり、右側立石は高さ1.35m、基部幅0.57mで、左側立石は高さ1.17m、基部幅0.45mで、上部が「ハ」形に狭まる。また、羨道部の楣石には入口側に30cm程の段を有し、羨道部前面に存在した板石は長さ1.8m、幅1.3m、厚さ0.3m程であることから羨道部先端立石に乗る天井石であった可能性が高い。閉塞石は存在せず、大正頃には既に開口していたことである。

前述した如く、墓道を兼ねた突堤部の存在は確認できないが、墓道が存在したとすると地形的には前室床面のレベルと連続し、緩やかな傾斜を呈するのであろうが、羨道部先端立石から急傾斜で下がり、旧地形に至っている。この事は、突堤部の存在を十分裏付けるものである。

また、左側外護列石の前面で須恵器横瓶（第16図9）を甕の胴部で覆った祭祀土坑を検出したが、突堤部が存在したと仮定すると、祭祀土坑はその中に位置することになる。



第14図 2号墳石室実測図 (1/60)



第15図 2号墳左外護列石前面土層図・1~5Tr 土層実測図 (1/60)

出土遺物（図版24・25、第16～19図）

須恵器（1～13） 1～3は前室出土の坏蓋。1の天井部は低平な形態。2は口縁部内面に僅かな段を残す。1は器高2.4cm、復原口径10.6cm。2は完形品で、器高3.5cm、口径11.2cmを測る。ともに焼成は堅緻で、小豆色を呈する。また、1の外天井部には波形の範記号を付している。

3は天井部がドーム形を呈する坏蓋の半欠品で、口径は13.4cmに復原した。外天井部は回転範ケズリによる。焼成はやや軟質で、橙褐色を呈する。

4・5は坏身で、口縁部は緩やかに立ち上がる。4の外底面には波形の範記号があるので1の坏蓋とセットになるものと思われる。5は口縁～体部にかけての小片。4が前室、5は羨道部左側の出土。6は小型の椀で、器高3.7cm、口径8.4cmを測る。外面下部には沈線と言うよりは浅めの段を有している。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。玄室と前室出土品とが接合した。

7は頸部の小破片で、壺若しくは横瓶になろう。頸部外面に「∞」の範記号を付している。8は壺の頸部から胴部にかけての破片で、カキ目を施した後に肩部に4条の範描沈線を巡らせている。また、沈線と頸部との間に三本線の範記号を付す。7・8とも2号墳前面黒色土の出土。

9は提瓶で、口縁部を僅かに欠く。器高23.6cm、復原口径9.2cmを測る。口縁部は胴部に比し小さめで、胴部は樽形を呈する。頸部のやや下位に貼付した取手は用途をなさない程に懸垂孔が潰れている。器面調整はカキ目により、4箇所に縦方向の範描沈線を巡らせている。左側外護列石前面の祭祀土坑出土で、上に甕（11）の破片が被せてあった。

10は口縁部付近の小破片で、口唇部を欠く。内湾する形状からして器台になるものと思われる。範描沈線を現状で2段2列施しており、その間を波状文で充填している。

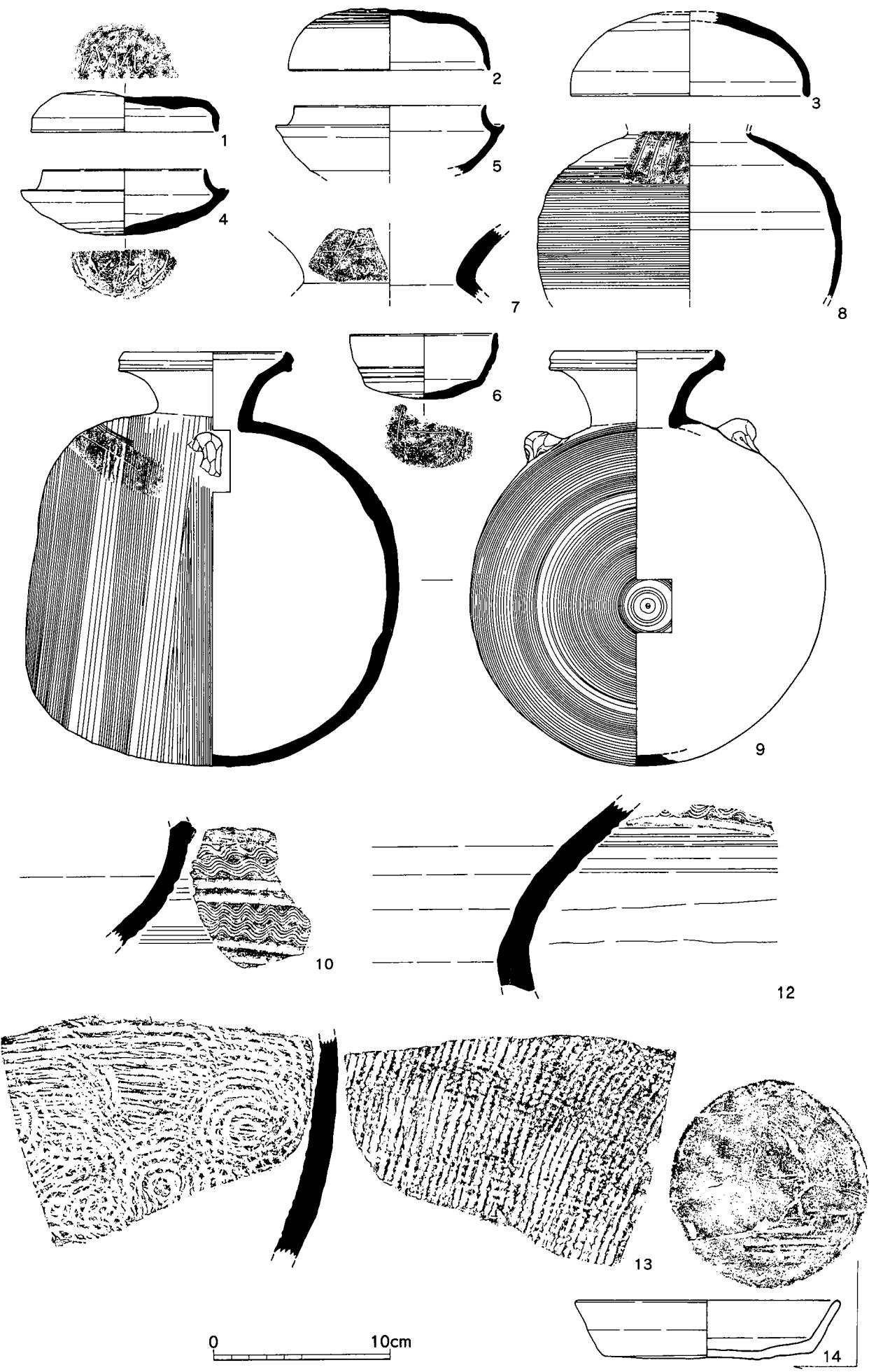
11は祭祀土坑とその周辺出土の大甕で、残存器高61.8cm、復原口径36.0cmを測る。口縁部は焼け歪みにより大きくゆがんでいる。口縁部外面には2条の削出しによる突帯を有し、頸部には2段に範描沈線を施し、沈線と口縁部間を櫛描き波状文で充填している。また、上方の沈線上には円形浮文が3箇所遺存するが、本来5箇所に貼付していたものと思われる。外面は格子タタキにより、内面は下半部が平行タタキ、上半部が同心円タタキによる。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。12は甕の頸部小破片。沈線と波状文がみられる。13は甕の胴部小片で、何れも羨道部前面の黒色土中の出土。

土師器（14） 14は浅めの坏で、器高3.2cm、口径15.2cm、底径12.4cmを測る。底部切離しは糸切りによる。完形品で、前室埋土中から出土した。

装身具（1） 1は前室埋土出土の耳環で、胴胎金箔張り。長径3.1cm、短径2.85cm、厚さ0.7cm、重さ20.2gを量る。腐食がかなり進んでいる。

銅製品（2） 2は「匁」形を呈する銅製品で、2号墳前面の表土出土。端部を内側に曲げており、残存長1.6cm、下部幅1.0cmで、厚さは0.5mmと非常に薄い。用途は不明。

鉄器（3～9） 3・4は墳裾右側出土の刀子茎部破片で、残存長は3が4.0cmで、4は2.4cm。5は刀子の口金で、径1.95cm、幅1.0cm、重さ2.1gを量る。前室床面直上の出土。6は二股の製品で、頭部はリング状になっており、垂下させるためのものであろう。馬具の一部か。残存長4.05cm、幅0.9cm。玄室埋土中の出土。7は石材を割るための矢で、先端部を欠く。残存長3.0cm、頭部幅1.0cm、厚さ0.7cmを測る。Ⅱ区周溝暗褐色土の出土。8は短冊状の製品で、下半部が「く」字形に折れ曲がる。両端部とも生きており、長さ5.1cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ15.4gを量る。前室の出土。9は手鎌形の板状製品で、墳裾右側の出土。先端部は欠損しているが、半月形を呈するようである。

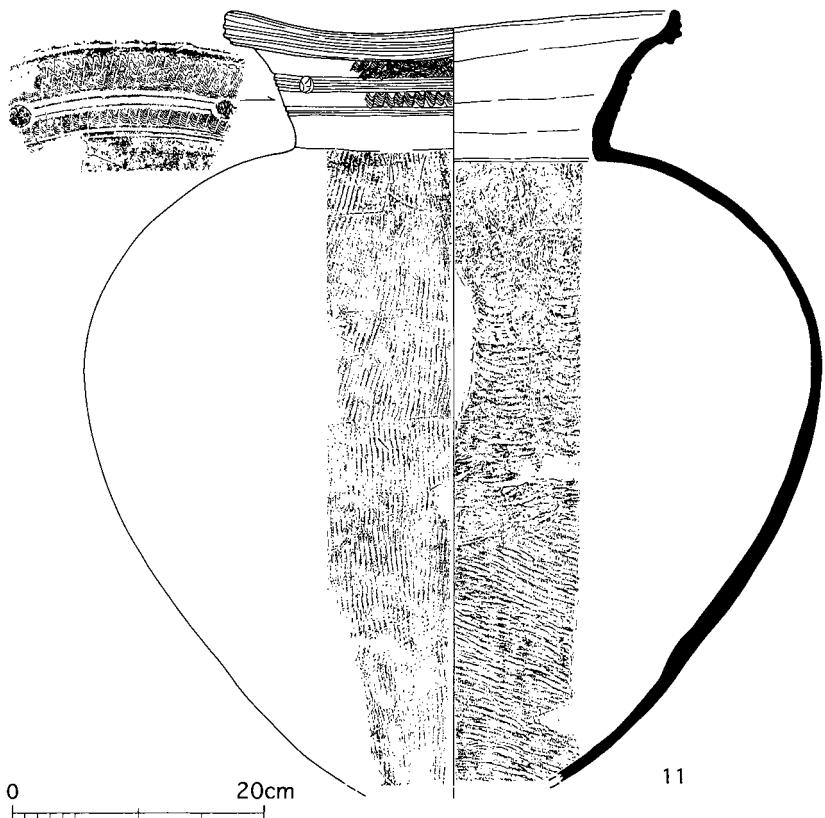


第16図 2号墳出土土器実測図① (1/3)

両端部を折り曲げ、木材を挟み込むようになっているが、木質はみられず。本来そこに木材がはめ込まれていたかは疑問である。

残存長5.2cm、残存幅2.8cm、厚さ0.2cmで、残存重量6.57gを量る。類例が福岡市西陣町遺跡・甘木市大願寺古墳から出土しており、本例も土器製作工具ではないかとの教示を得た（註1）。

鉄釘（1～35）1～25が玄室、26～35は前室出土。石室は攪乱され、寛永通寶など江戸期の陶磁器・古銭が出土しており、大半が古墳に伴うものではないと思われるが、何れが木棺に使用した鉄釘か判断できないので、一括して掲載した。鉄釘は長さから特大一二寸以上（1～3）、大一一寸五分（4～6・26）、中一一寸（8～19・27～31）、小一五分（20～23・25・33・35）、極小一三分（24）の5種類がある。

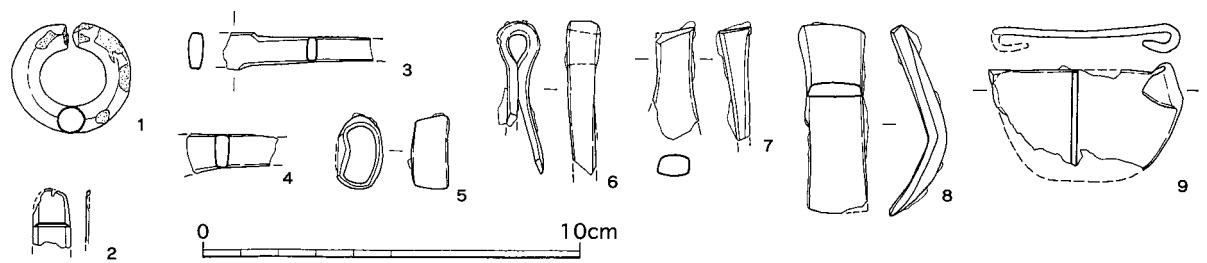


第17図 2号墳出土土器実測図② (1/6)

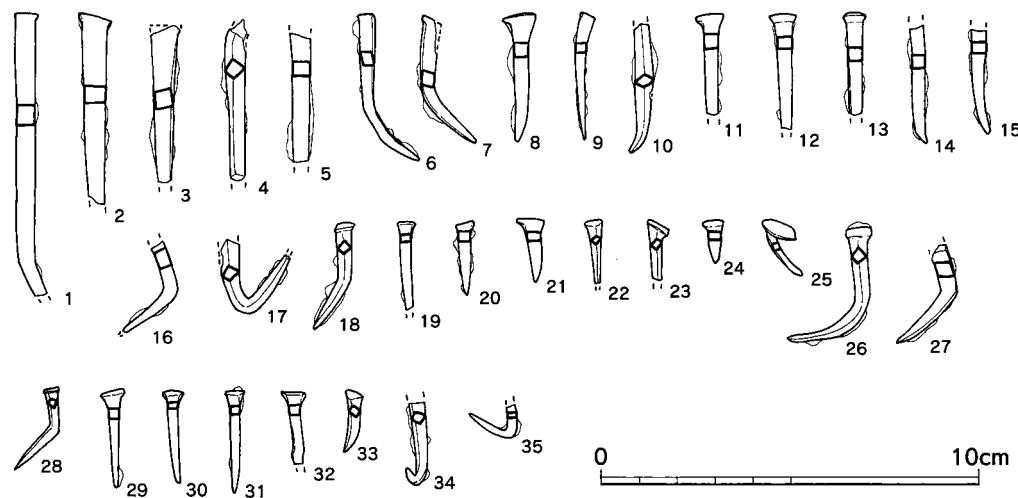
表3 鉄釘法量表 (単位: cm, g)

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長さ	(7.5)	(5.1)	(3.2)	(4.3)	(3.4)	4.1	3.7	3.5	3.3	(3.4)	2.7	3.1
頭部幅	0.6	0.9	0.65	—	—	0.55	0.6	0.4	0.5	—	0.7	0.7
重さ	(9.5)	(4.4)	(5.1)	(2.5)	—	2.1	1.5	1.9	1.0	(1.6)	—	—
番号	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
長さ	(2.7)	(3.1)	(2.7)	(2.7)	—	3.0	(2.3)	1.9	1.7	(1.7)	(1.6)	1.1
頭部幅	0.6	—	—	—	—	0.6	0.5	0.5	0.8	0.5	0.6	0.6
重さ	—	—	—	—	—	1.1	—	0.5	0.45	0.4	—	0.25
番号	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
長さ	1.8	3.7	2.9	2.4	2.6	2.4	2.7	(1.9)	1.7	(2.3)	(1.3)	
頭部幅	1.1	0.7	—	0.4	0.6	0.55	0.5	0.6	0.5	—	—	
重さ	0.35	2.15	—	0.5	0.5	0.75	0.85	—	0.4	—	—	

* () 内の数値は残存値



第18図 2号墳出土装身具・鉄器実測図 (1/2)



第19図 2号墳出土鉄釘実測図 (1/2)

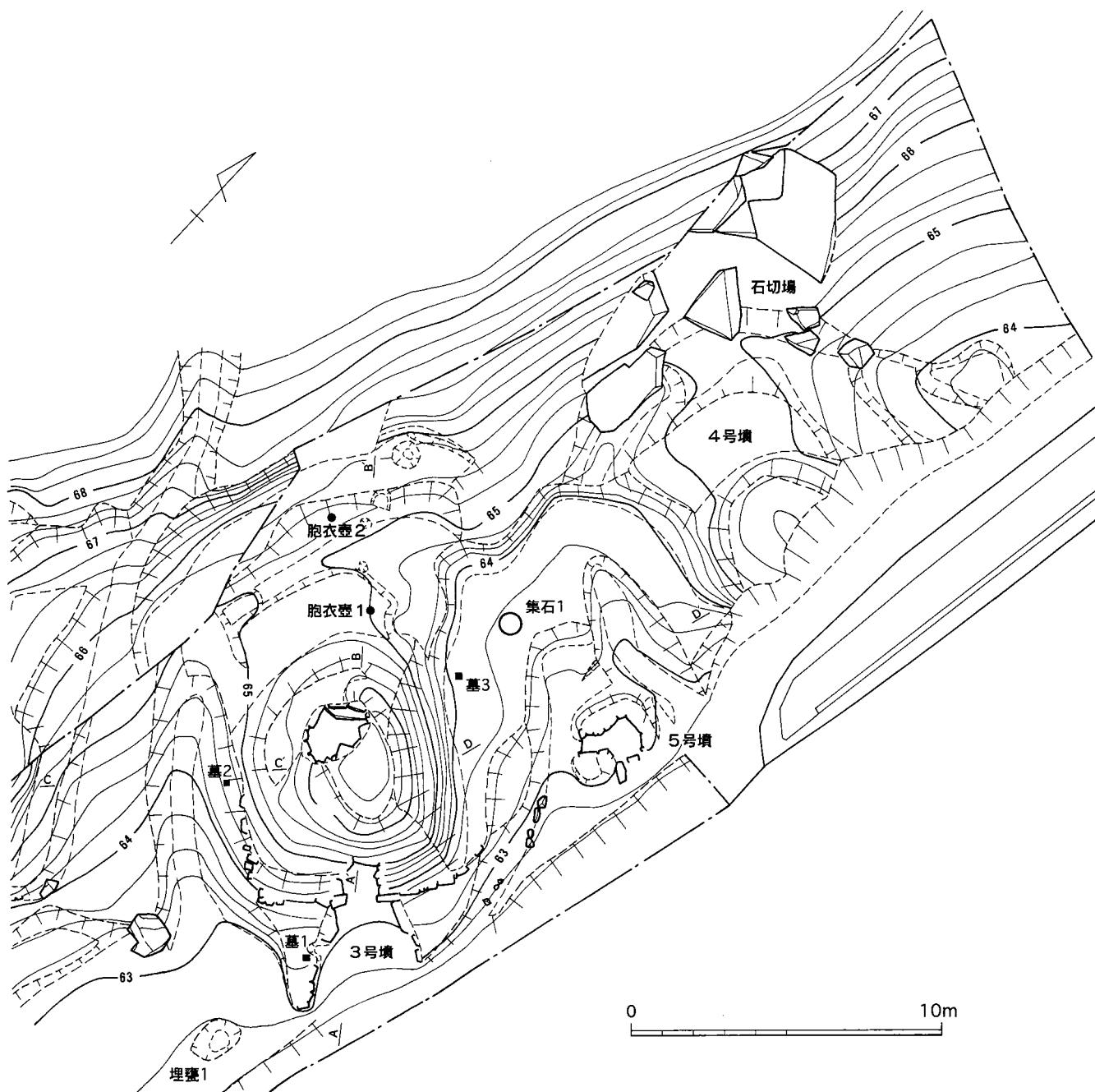
註1 九州歴史資料館学芸二課長横田義章氏のご教示による。

3号墳（図版26～41、第20～32図）

調査区の中央東側で、2号墳の8m北東側に位置する。標高63～65mの丘陵緩傾斜面から裾部平坦面にかけて築造されている。長野古墳群中、唯一完掘できた古墳である。

墳丘（図版26～29、第20～24図） 表土除去前は7×8mの小山状を呈していたが、墳丘北側は大きく掘削されていた。また、墳丘の南側には山道があるが、古墳の周溝を利用したものであろうと思われた。

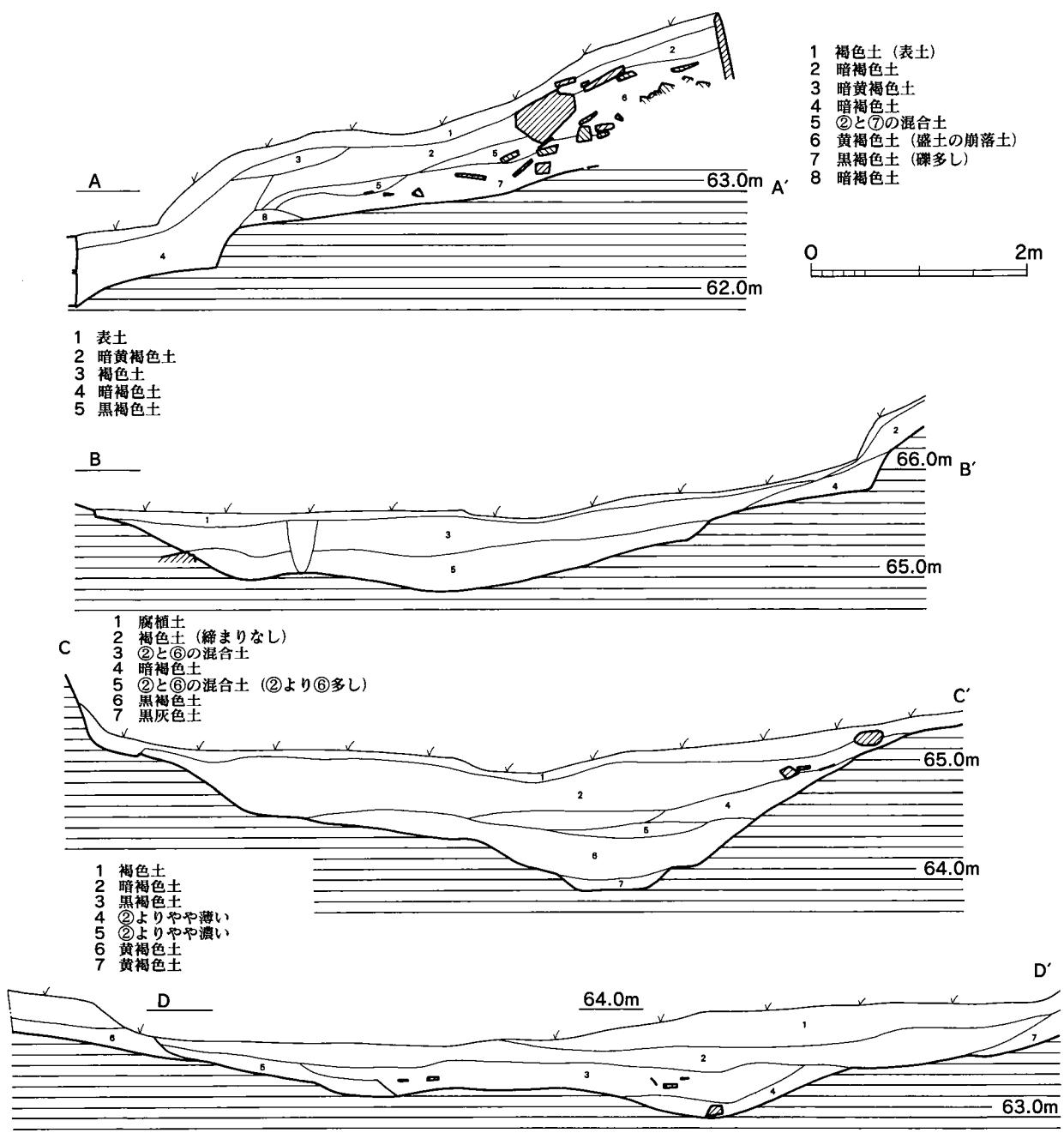
なお、3号墳は2号墳と4号墳との中間に位置することから三者の前後関係が問題となる。その判断材料の一つとして周溝の切合い関係－前後関係が存在するかを確認するため両者間に土層観察用



第20図 3～5号墳墳丘測量図 (1/200)

の畦を残して土層の堆積状況を観察した。先ず、2号墳と3号墳との前後関係であるが、3号墳の周溝立上りは明確に確認できるが、2号墳の周溝立上りは明瞭ではなく、2号墳の墳裾から3号墳の周溝へと連続して黒褐色土が堆積しており、結果的には両者間の前後関係はつかめなかった。次に、3号墳と4号墳の前後関係であるが、両者間に割り込むように5号墳が築造されているため、こちらも両者間の前後関係はつかめなかった。

3号墳の周溝は墳丘の南側で幅2.7m、墳丘の西側では5.0mを測ることから突堤部先端から周溝



第21図 3号墳周溝土層実測図 (1/60)

方部までは14mの墳丘規模で、突堤部先端から周溝立上りまでは16.8mの墳丘規模を有し、南北の外径は15m程となり、形状的には馬蹄形に巡る。また、墳丘北西側の丘陵斜面が抉れているのは墳丘構築時の地山成形によるものと考えられる。

墳丘裾部には羨道部床面から40cm程上の位置から外護列石が左右に派生しているが、右側で2.6m、左側で2.2mまで確認できる。右側は羨道部先端立石側では2段に積んでいる他は1段である。左側は羨道部先端立石付近では3段に積んでいるが、南側に行くに従い1段となるものの右側に比して密に積んでいる。

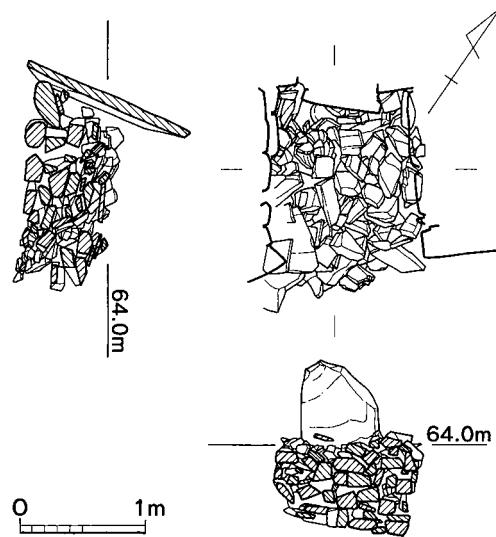
墳丘盛土は赤褐色土を基調とし、暗褐色土・黄褐色土などが盛られている。土盛りの方法は、基本的には1号墳の構築方法と同じで、玄室右壁側では地山調整面から70cmの高さまで水平に盛り、左壁側では105cmの高さ（奥壁鏡石及び玄門立石の高さ）まで水平に盛っている。次に、4~5段程石積みを行い、露出している部分を覆う様に盛る。続けて、先に盛った部分に繋げて全体を盛り上げる。これを数回交互に繰り返して、墳丘を構築している。なお、1号墳では石の隙間に灰青色粘土を目張りとして詰めていたが、3号墳では粘土目張りは確認されなかった。

埋葬主体部（図版30~38、第22~24図） 本墳の埋葬主体部は、南東方向に開口する複室構造の横穴式石室である。奥壁は地山調整面から深さ1m程掘り下げる構築されている。石室は全長6.53mを測り、主軸をN43°Wに取る。石室の壁体には緑簾片岩の割石が用いられている。墳丘の西側には盗掘坑が開き、天井石は存在しない。玄室内には石材・土砂が1m程堆積していた。

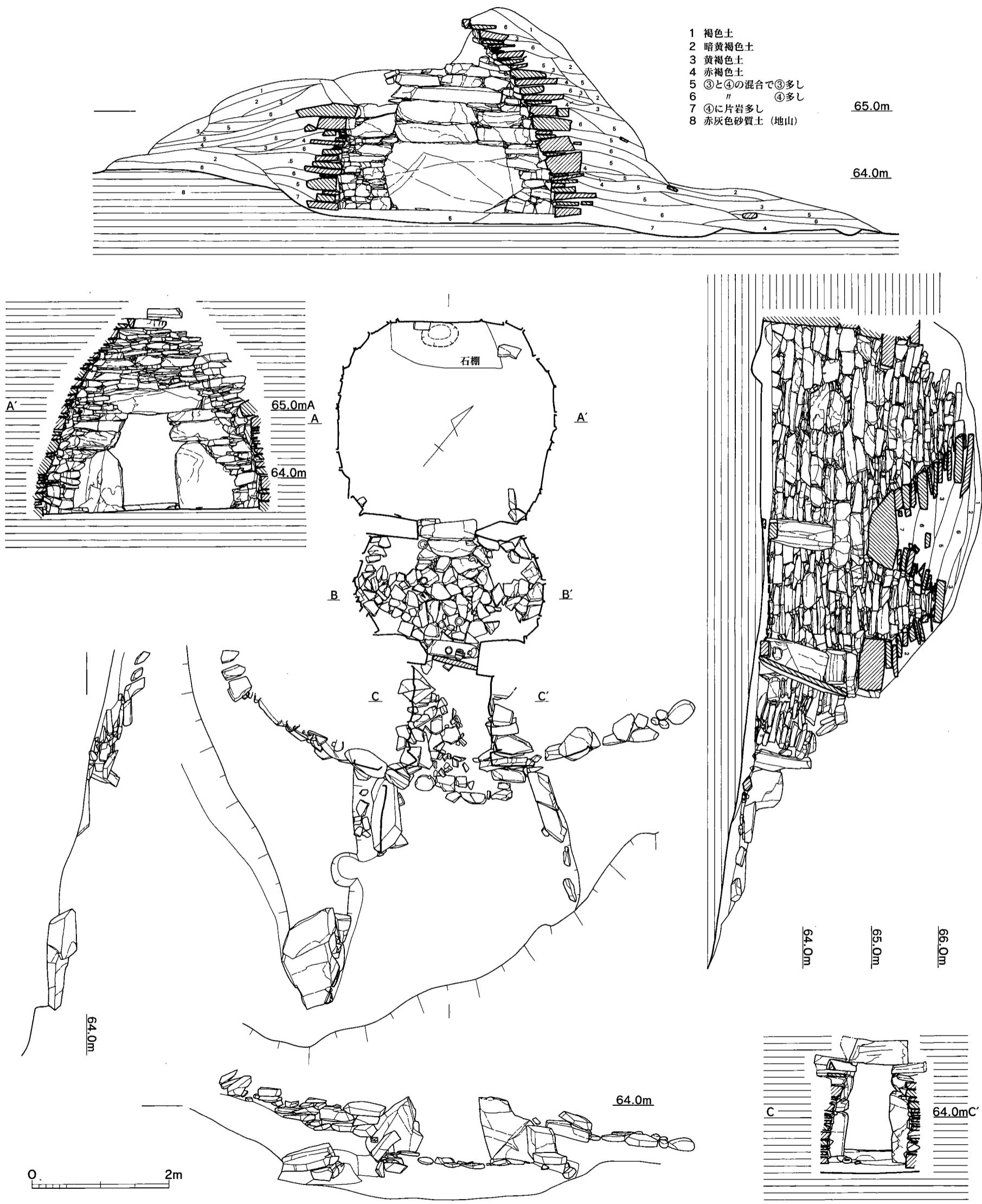
玄室の床面プランは隅丸方形を呈し、長さ2.92m、最大幅3.16mで、残存する天井までの高さは3.0mを測る。奥壁の基部には長さ2.0m、高さ1.13m、厚さ0.36mの鏡石を立て、その上に長さ1.2m、高さ0.3m、厚さ0.6m程の石を2段乗せ、その上に石棚を架構している。石棚は長さ1.62m、幅0.68m、厚さ0.18mを測り、玄室側に40cm突出している。石棚の上は石材が2段遺存しているが、本来6段程積んでいたものと思われる。左側壁は基底部に40~70cm大の石を据え、床面から1.3mの高さ（鏡石から一つ上の石の高さ）まではほぼ垂直に積み上げている。右側壁は床面から0.6mの高さまではほぼ垂直に積み上げ、1.6mの高さまでは約70°の傾斜角で持ち送りしながら積み上げているが、そこからは42°の急角度で天井に至っている。

本墳の玄室石材は1・2号墳に比してやや小振りであった。玄室床面には死床はおろか敷石さえも遺存しておらず、盗掘のすさまじさが判る。前室との境には壁状に玄門立石があり、玄門部は幅0.83mで、櫃石から楣石までの高さは1.33mを測る。

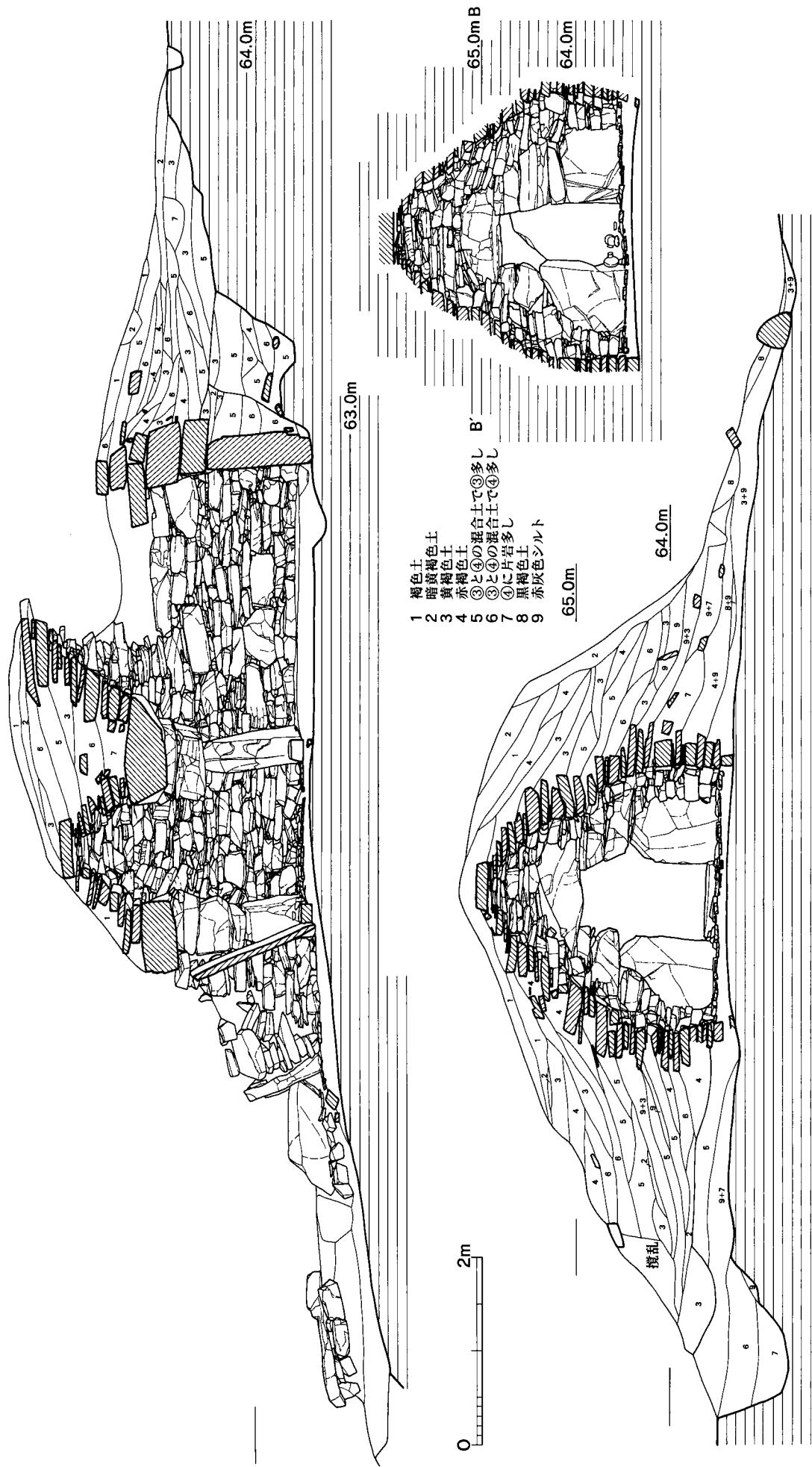
前室の平面形は胴張りを呈し、長さ1.52m、最大幅2.70m、天井石までの高さは2.45mを測る。側壁は長さ30~50cm大の割石を床面から1mの高さまでは垂直に積み、それから天井石までは57°の傾斜角で持ち送りしながら積み上げている。玄室の積み石と比較するとやや小振りの石材を使用している。前室の敷石は割と遺存しており、やや敷石から浮いた状態ではあるが多くの須恵器や鐵鏃が出土している。



第22図 3号墳羨道部閉塞状況実測図(1/60)



第23図 3号墳石室実測図 (1/60)



第24図 3号墳墳丘盛土実測図 (1/60)

前室との境には壁状に前門石を立てており、前門部は幅0.72m、楣石までの高さは1.34mを測る。框石の上には完形の壺身・横瓶・平瓶が置かれていた。

楣石の右側面上部には、石材を切り出す際の矢穴痕がみられ、墳丘奥側に向って大きくなっていることから、古墳築造時のものと考えられる。穴の大きさは縦1.5cm、横0.5~1.5cm程で、石切場遺構出土の矢の大きさに対応する。

また、框石に接して長さ142cm、幅67cm、厚さ8cmの板石を立てかけて閉塞しており、そこから羨道部先端まで20~30cm大の石を高さ80cm程充填して閉塞板の押さえとしていた。嚴重な閉塞であったがために盗掘者は玄室からの進入を企てたものと推察される。

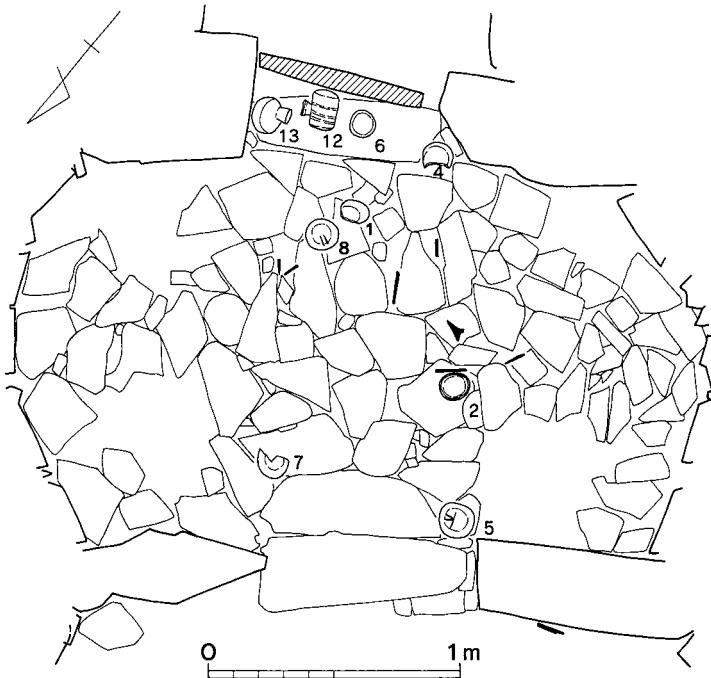
羨道部は先端までの長さ1.52m、前室側での幅1.13m、羨道部先端立石での幅1.1mを測る。右壁側は直立気味に石を積み上げているが、左壁側は75°の傾斜角で積み上げている。また、左壁側先端は壁面の積み石が崩れて、前方に傾いでいる。

羨道は羨道部から「ハ」字形に開き、左壁側は3.35mの長さを有するが、右壁側は線路の攪乱溝に切られるため長さ2m遺存する程度である。羨道側での幅は2.05m、墓道先端側での幅は4m程になるか。羨道部先端立石に接して積み石があり、左側先端は基部に長さ40cm程の石を4列並べ、その上に長さ1.4m、幅0.8m程の三角形の大きな石を据えている。また、羨道部側は長さ1m程の石を立てていたようであるが、墓道側に倒れている。右側には1段積み石が残っている状況であった。当初、墓道が三角石まで伸びていると考えていなかったので、南側周溝を若干掘り過ぎてしまった。この墓道先端から羨道部までの突出部が突堤部になる。墓道埋土の黒色土からは割合多くの須恵器が出土しているが、完形品は僅かで、追葬時の石室内部の掻き出しによるものと考えられる。

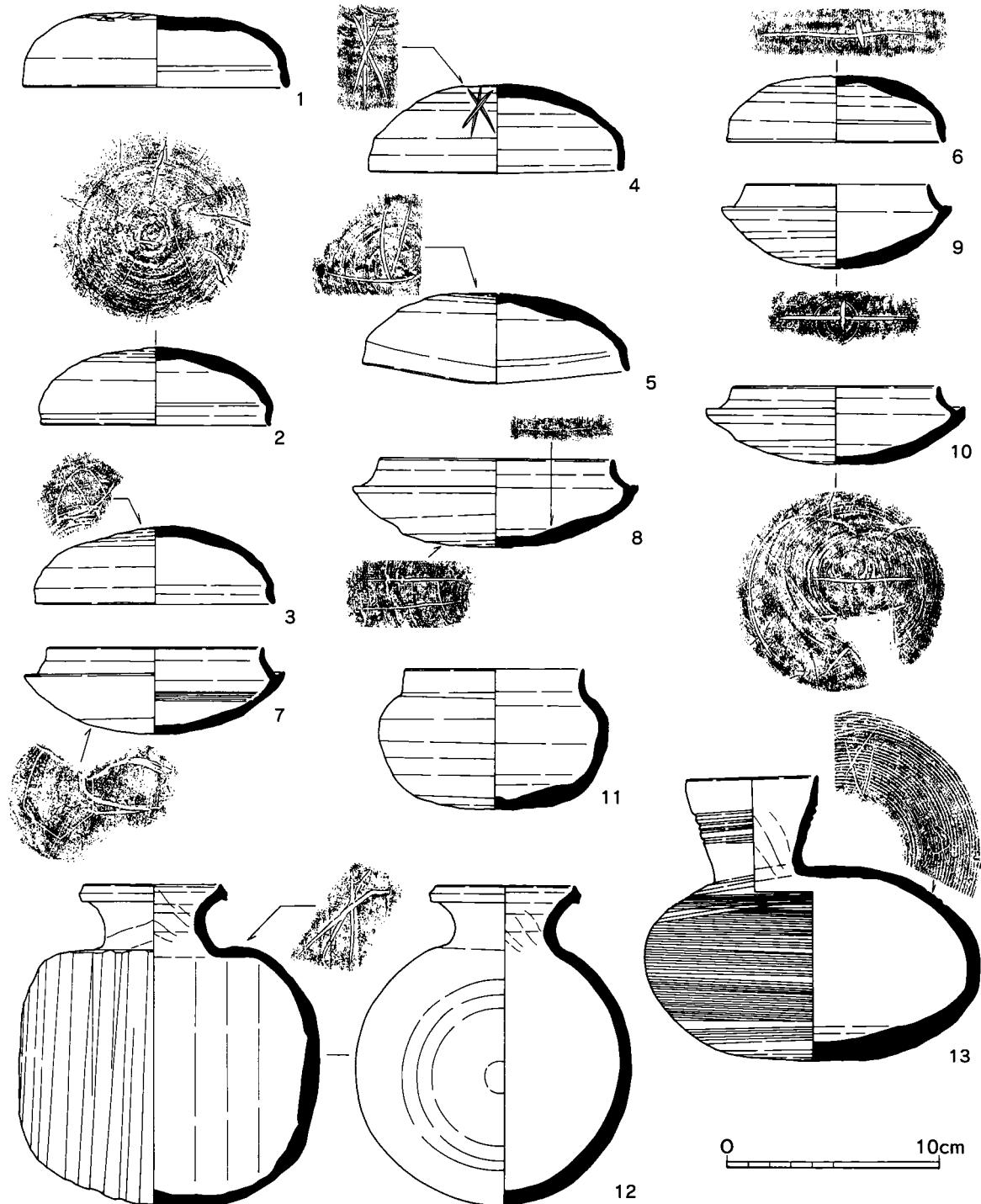
出土遺物（図版39~41、第26~32図）

須恵器（第26図1~13、第27図1~8・11~14、第28図1~8、第29図1~7） 第26図1~13は前室出土。1~6は壺蓋で、天井部はドーム形を呈する。何れも口縁部内面に段を有するが、1・4・5は不明瞭で、6のそれは沈線になっている。天井部外面の調整は1が手持ち竈ケズリで、それ以外は回転竈ケズリにより、6は竈ケズリをナデ消している。焼成は何れも堅緻で、色調は2が橙褐色を呈する以外は灰青色である。6は9の壺身とセット関係をなす。2・5・6は完形品で、2は器高3.7cm、口径10.8cmで、6は器高3.1cm、口径10.4cmを測る。また、2は放射状の竈記号、3は「中」、4は「X」、5は「大」、6は「+」の竈記号を付している。

7~10は壺身で、口縁部は斜め上方に立ち上がる。外底部の調整は7が手持ち竈ケズリで、他は回



第25図 3号墳前室遺物出土状況実測図 (1/30)



第26図 3号墳前室出土土器実測図 (1/3)

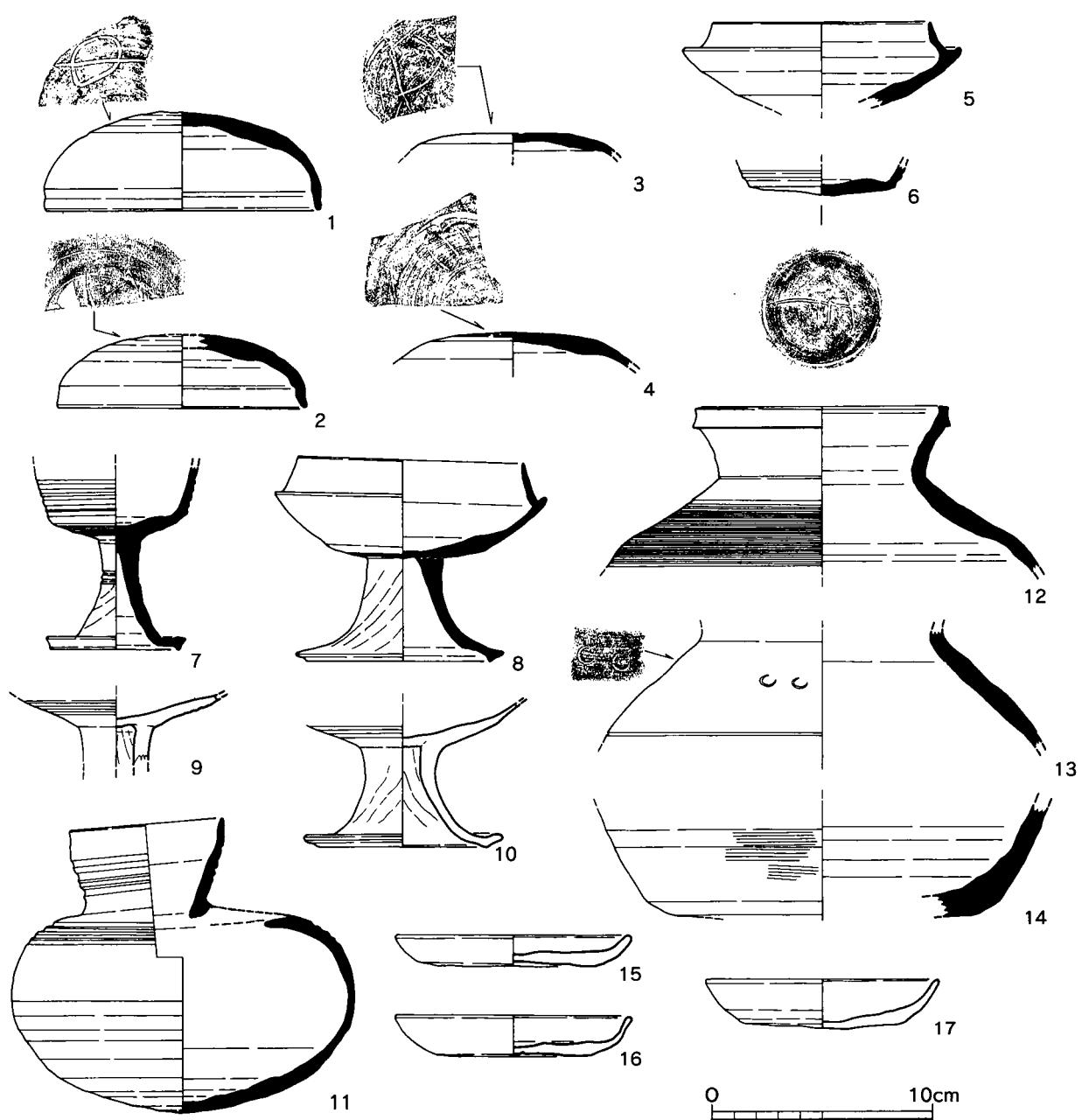
転籠ケズリであるが、9は籠ケズリを一部ナデ消している。焼成は何れも堅緻で、色調は灰青色を呈する。8・9は完形品で、8は器高4.2cm、口径11.1cmを測る。9は器高4.0cm、口径8.7cmを測る。また、外底部には7が五角形、8・10は「II」、9は「+」の籠記号を付している。

11は小型の短頸壺で、器高6.6cm、口径8.5cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がる。外底面に籠記号を付しているが、半欠品であるため記号は不明。12は小型の横瓶で、完形品。器高15.1cm、口径6.5cmを測る。樽形の胴部に比して大きめの口縁部を付している。体部には幅広の沈線を7条程

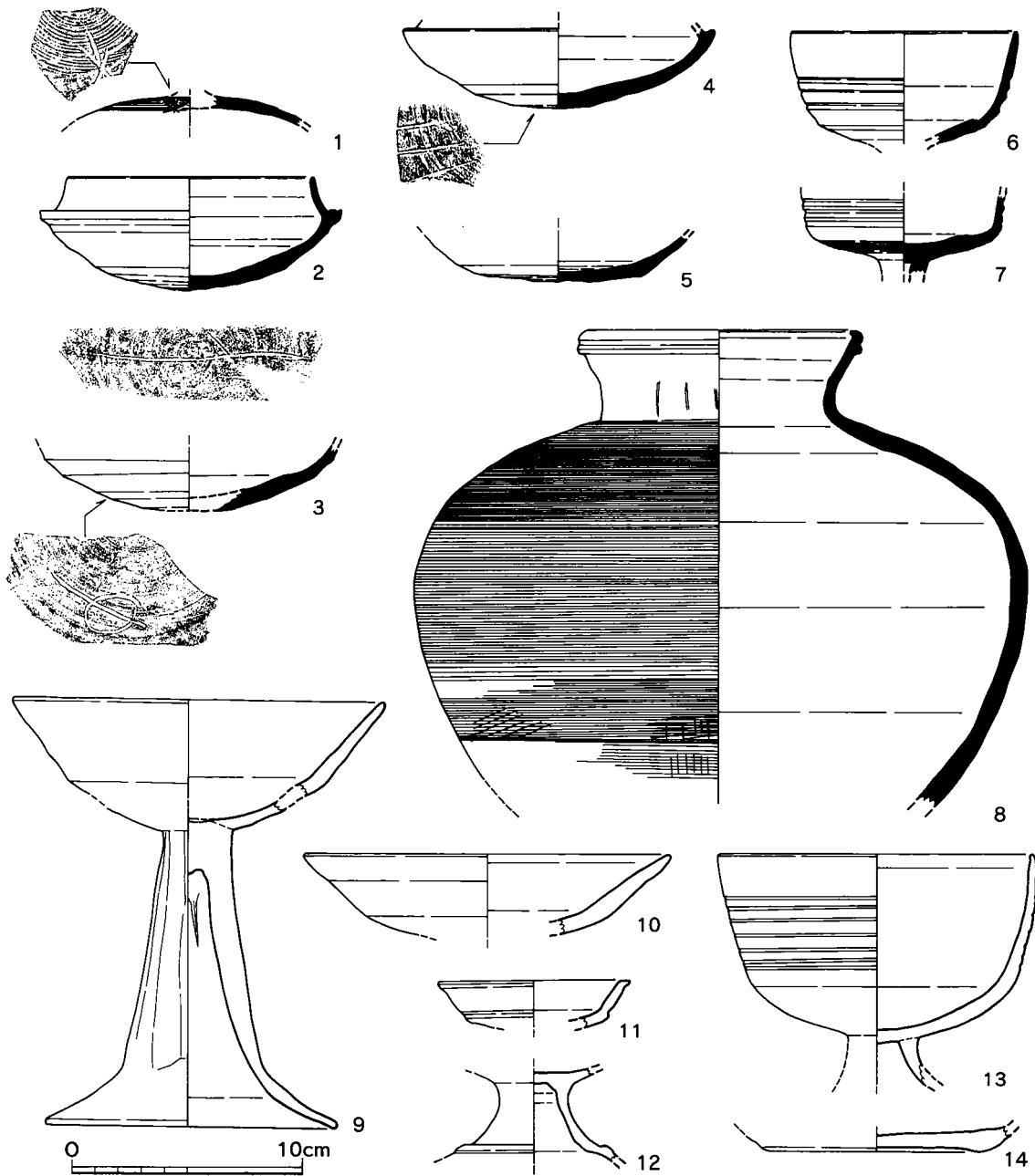
施しており、肩部には「×」形の範記号を付している。焼成は堅緻で、小豆色を呈する。13は完形の平瓶で、器高13.4cm、口径6.2cmを測る。頸部と肩部に4条の範描沈線を施し、「△」と「○」の範記号を付している。焼成は堅緻で、色調は暗灰青色を呈する。

第27図1~8・11~14は墓道出土。1・2はドーム形を呈する坏蓋で、口縁部内面に僅かな段を有する。外天井部には1が「中」、2は「入」の範記号を付している。3・4は小破片であるが、蓋として実測した。外天井部には3が「○」、4は「II」の範記号を付している。5は坏身の口縁部小片で、口縁部は直立気味に立ち上がる。6は椀の底部破片で、底径は6.7cm。底部下位に範描沈線を施しており、外底面には「ヰ」の範記号を付す。

7は無蓋高坏で、口縁部を欠く。体部と脚部に範描沈線を巡らせており。脚裾部は爪先立つ。8は



第27図 3号墳墓道出土土器実測図 (1/3)



第28図 3号墳周溝出土土器実測図 (1/3)

有蓋高壺で、壺身に高壺の脚部を貼付した形態を呈する。器高9.2cm、口径11.5cm、脚裾径9.4cmを測る。壺身の壺部に比してやや深めであり、口縁部の立ち上がりも長いようだ。色調は黄褐色を呈し、一見土師器かと思われるが、須恵器模倣の土師器高壺に比して胎土は精良で、形態もシャープであることから須恵器の生焼け品とした。

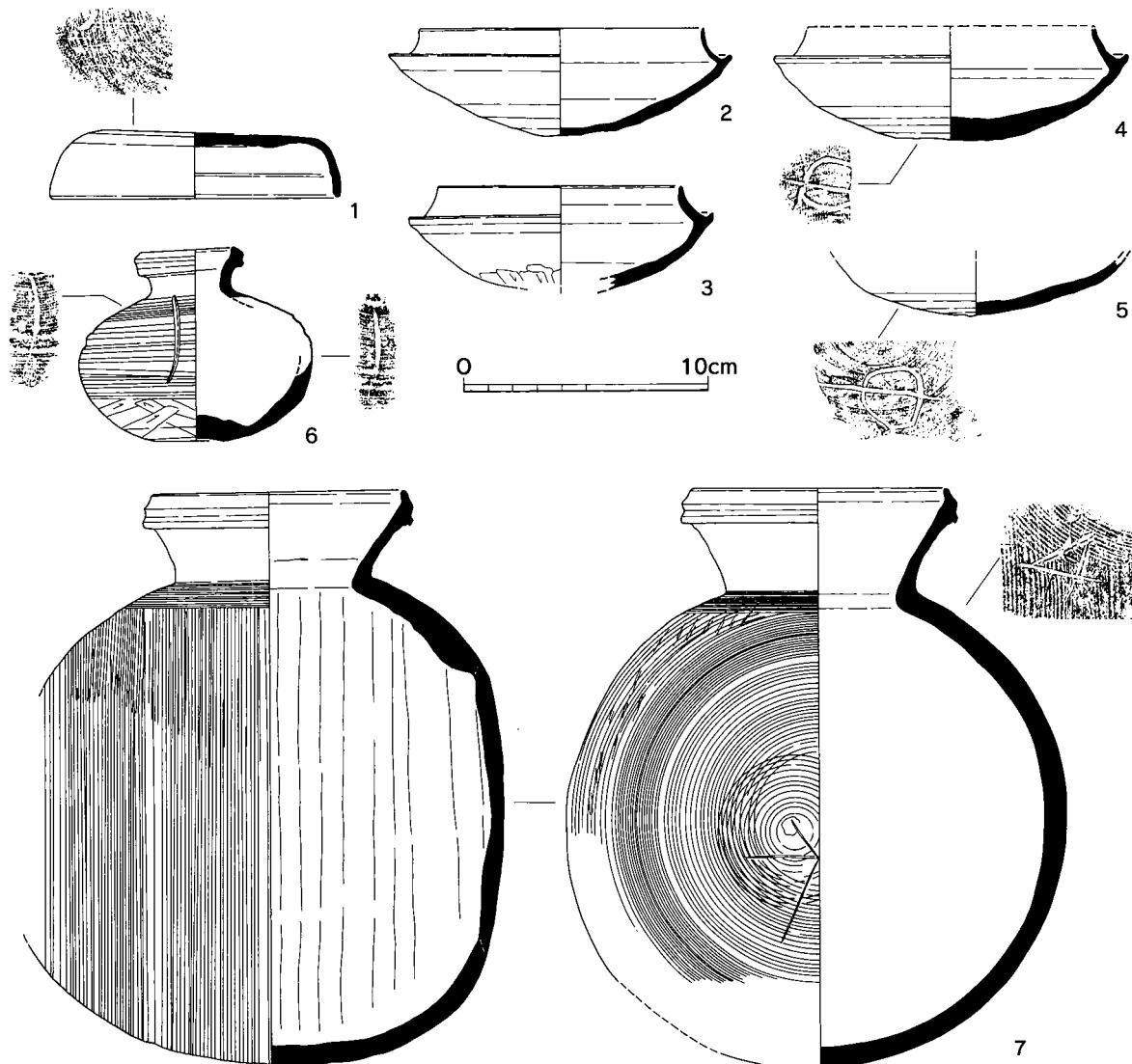
11は平瓶で、口縁部と体部は接合しないが、同一個体として図示した。頸部と体部に4条の籠描沈線を施す。焼成は堅緻で、色調は暗灰青色を呈する。12は壺で、締まった頸部から短い口縁部が開く。端部の稜はシャープである。口縁部ヨコナデ、体部外面カキ目、内面はナデによる。13は肩部破片で、肩部に竹管文を2個施している。色調は灰黄色を呈し、須恵器の生焼け品。14は平底の底部破片で、胎土・手法・色調が13に類似することから両者は同一個体と思われる。

第28図1～8は周溝出土。1は蓋として実測した。外天井部はカキ目を施しており、或いは摘みが付くか。外面には「×」の範記号を付している。2～5は壊身の破片で、3・5は立ち上がり部を欠くが身として図示した。3の体部は深めの器形で、口縁部の立ち上がりも大きい。口径は10.8cmに復原した。外底部は何れも範ケズリで、2は「|」、3は「中」、4は「III」の範記号を付している。焼成は何れも堅緻で、灰青色ないしは暗灰色を呈する。

6は底部を欠くが、概若しくは無蓋高壺の壊部になろう。体部外面に深めの範描沈線を3条巡らせている。7は無蓋高壺の壊部破片。外底部はカキ目により、外面には3条の範描沈線を施す。

8は壺で底部を欠く。残存器高20.8cm、口径11.6cmを測る。よく締まった頸部から短い口縁部が伸びる。調整は口縁部ヨコナデ、外面カキ目、内面ナデによる。頸部には工具による縦線を4本入れており、範記号であろう。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。

1・6はI区周溝下層、2はII区周溝黒色土、3はIV区周溝上層、4・7・8はIV区周溝黒色土、5はI区周溝集石部から出土した。



第29図 3号墳左外護列石前面出土土器実測図 (1/3)

第29図1～7は左外護列石前面の出土。1は蓋であるが、低平で、口縁部が直立気味立ち上がるところから短頸壺の蓋になろう。口径は11.7cmに復原した。外面は厚く灰を被り、暗紫色を呈する。外天井部には三本線の範記号を付す。2～4は壺身で、口縁部は直立気味に立ち上がる。5は立ち上がり部を欠くが、壺身とした。2・3の外底部は回転範ケズリの後ナデ消している。4・5は「中」の範記号を付している。

6は小型の壺で、頸部はよく締まっている。器高8.0cm、口径3.8cmを測る。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面カキ目で、胴下半部は手持ち範ケズリによる。口縁部に1条、体部中位に2条の範描沈線を巡らせている。また、肩部には「！」のヘラ記号を2箇所に付している。焼成は良好で、灰褐色を呈する。7は横瓶で、器高23.8cm、復原口径10.5cmを測る。体部に比して大きめの口縁部が付く。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面カキ目、内面ナデによる。体部には3箇所に縦方向の範描沈線を施している。また、肩部には「△」、胴部には「×」の範記号を付している。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

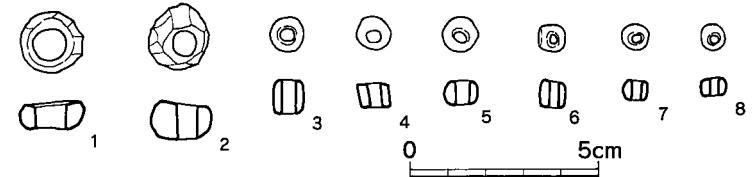
土師器（第27図9・10・15～17、第28図9～14、） 第27図9・10は墓道出土。15～17は羨道部閉塞石上部の出土。9・10は高壺で、9は壺部から脚部にかけての破片。10は口縁部を欠くが、有蓋高壺になるか。壺部外面には沈線条の粗いカキ目を施しており、手法的には須恵器であるが、胎土が粗く、色調は橙褐色を呈する。10の裾部径は9.0cmで、置付は須恵器高壺程爪先立たない。15～17は範切りの小皿で、何れも板压痕を留める。15の器高は1.4cm、口径10.8cmを測る。

第28図9～14は周溝の出土。9～12は高壺。9は口縁部と壺部が接合しないが同一個体として図示した。復原口径16.0cm、裾部径12.5cmで、器高は18cm程になろう。壺部は斜め上方に直線的に開く。脚部はラッパ形を呈し、脚柱部外面は範ケズリを施す。焼成は良好で、灰褐色を呈する。10は壺部の口縁部破片。11・12は小型の器形で、11が壺部で、12が脚部。同一個体ではないが、須恵器の模倣形態を呈する。11の口径は8.3cmに復原した。

13は大型の台付椀であるが、脚台部を欠く。口径は13.6cmに復原した。体部外面はカキ目状の細い範描沈線を施し、手法的には須恵器の製作技法による。色調は橙褐色を呈する。14は糸切りの皿で、口縁部を欠く。割れ面を磨いているが、何を意図したのか不明。9～12はI区周溝黒色土の出土。13はI区埋土とII区黒色土出土品が接合した。14はI区周溝集石部から出土した。

装身具（第30図1～8） 1～8は

玄室埋土出土のガラス玉で、1・2
はやや大振りであるが、質が悪い。
3～8は小玉で、色調は3～5がブル
ー、6はライトブルー、7・8はイ
エローを呈する。大きさは1が径8



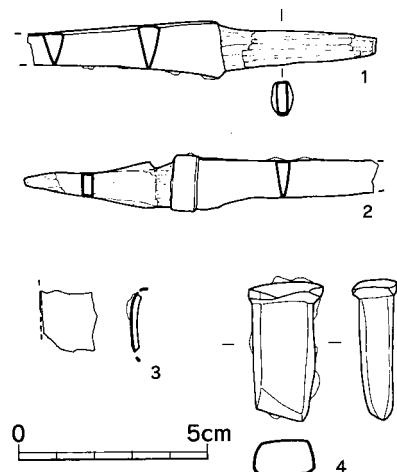
第30図 3号墳出土装身具実測図 (1/2)

mm、厚さ3mm、重さ370mg、3は径4.5mm、厚さ4.5mm、重さ150mg。

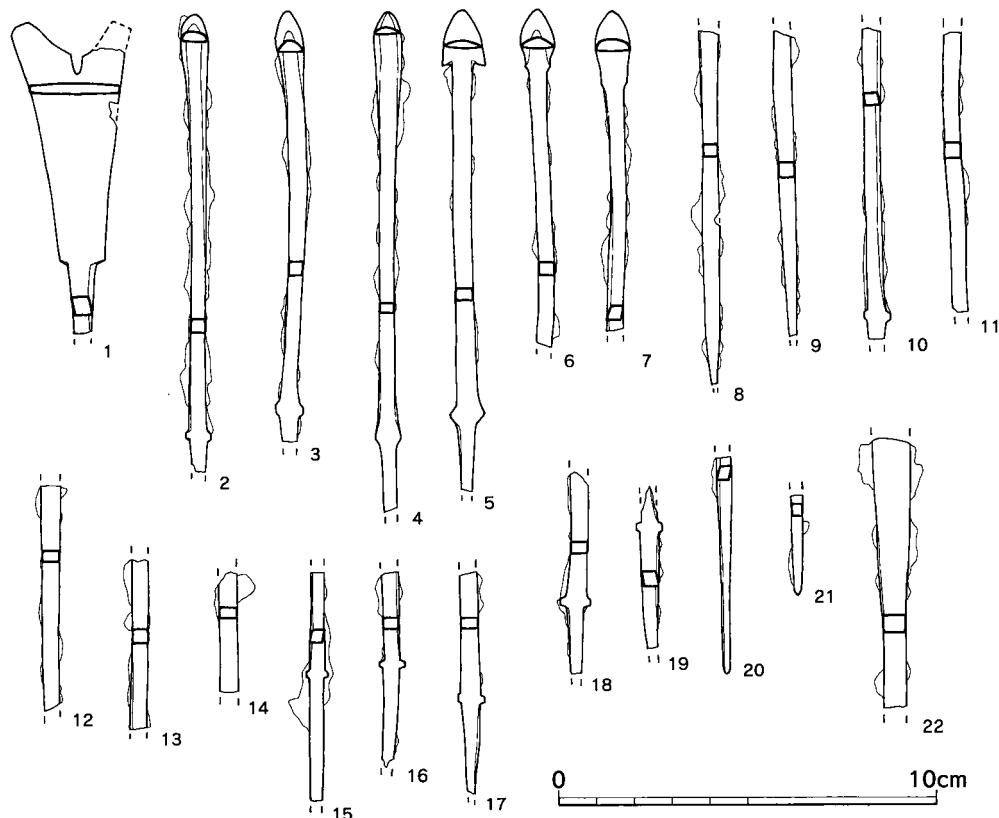
鉄器（第31図1～4・第32図1～22） 第31図1・2は刀子で、1・2とも刃部先端を欠くが柄の木質は若干遺存している。よく使い込まれており、柄の部分から急に細くなっている。1は残存長9.2cm、茎部での幅1.55cm、背の厚さ0.3cmを測る。2は口金が残っており、残存長9.4cm、茎部での幅1.4cm、背の厚さ0.35cmを測る。3は刀子の口金の破片で、内面に木質がみられる。1は前室床面の出土。2は左側玄門立石付近の出土。4は石を割る矢で、III区周溝褐色土（上層）の出土。長さ3.7

cm、頭部幅1.6cm、厚さ1.1cmで、重さは20.6gを量る。先端は損耗している。

第32図1~22は鉄鎌で、1は広根式で、先端が「V」字形に分かれている。残存長8.3cm。2~4・6・7は片丸造り棘籠被柳葉式で、何れも茎先端を欠失する。5は片丸造り棘籠被三角式で、基部は腸挟りが入っている。10・15~19は棘籠被部分の破片。11~14・22は鎌身部分の小破片。8・9・20・21は茎部分の破片で、20・21は茎先端部。4は残存長13.3cm、頭部幅0.8cmで、5は残存長12.8cm、頭部幅1.2cmを測る。1~21は前室床面の出土で、22は墓道左側石敷き部分の出土。

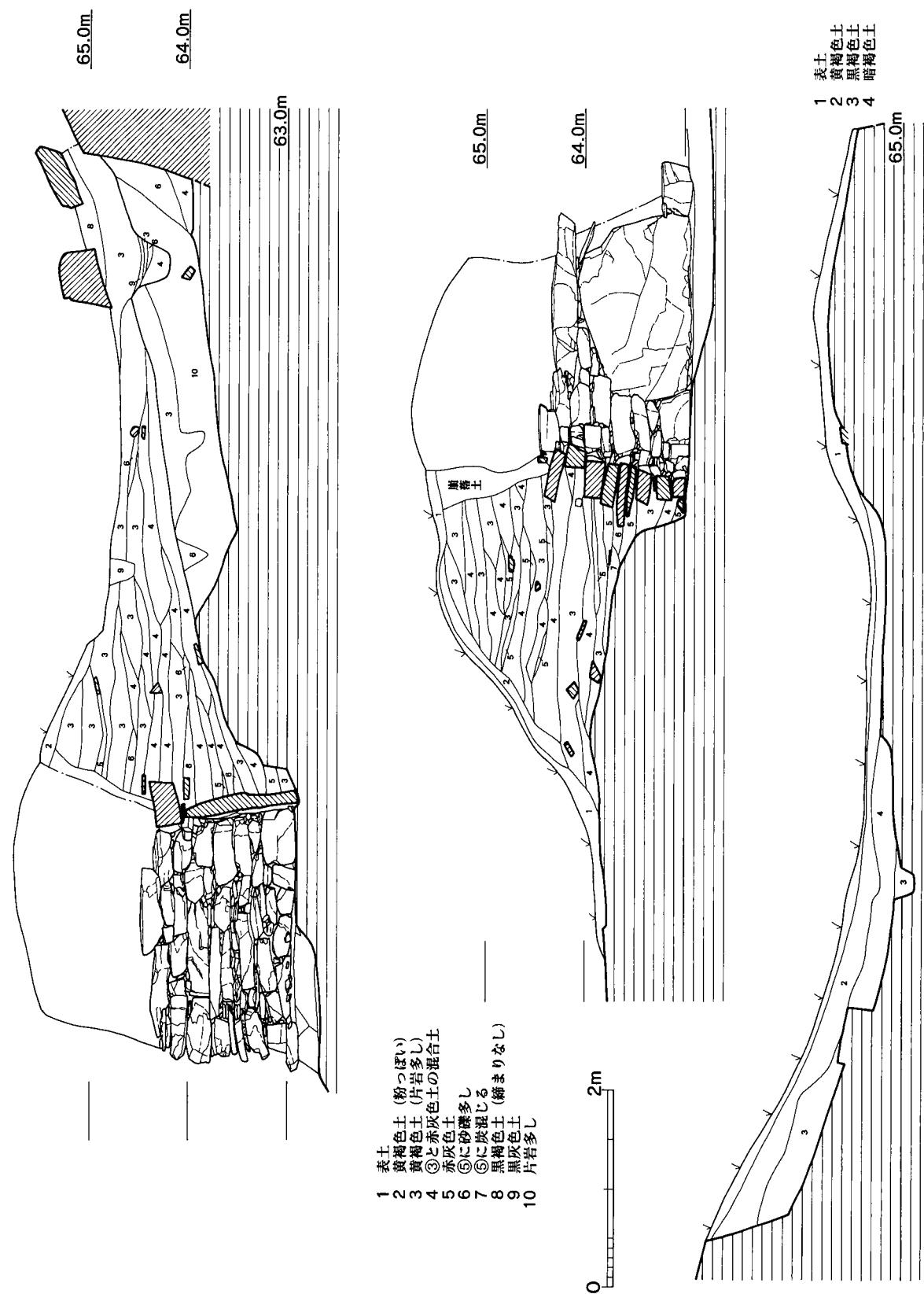


第31図 3号墳出土鉄器実測図(1/2)



第32図 3号墳出土鉄鎌実測図 (1/2)

4号墳（図版42・43・45-3、第33～36図）

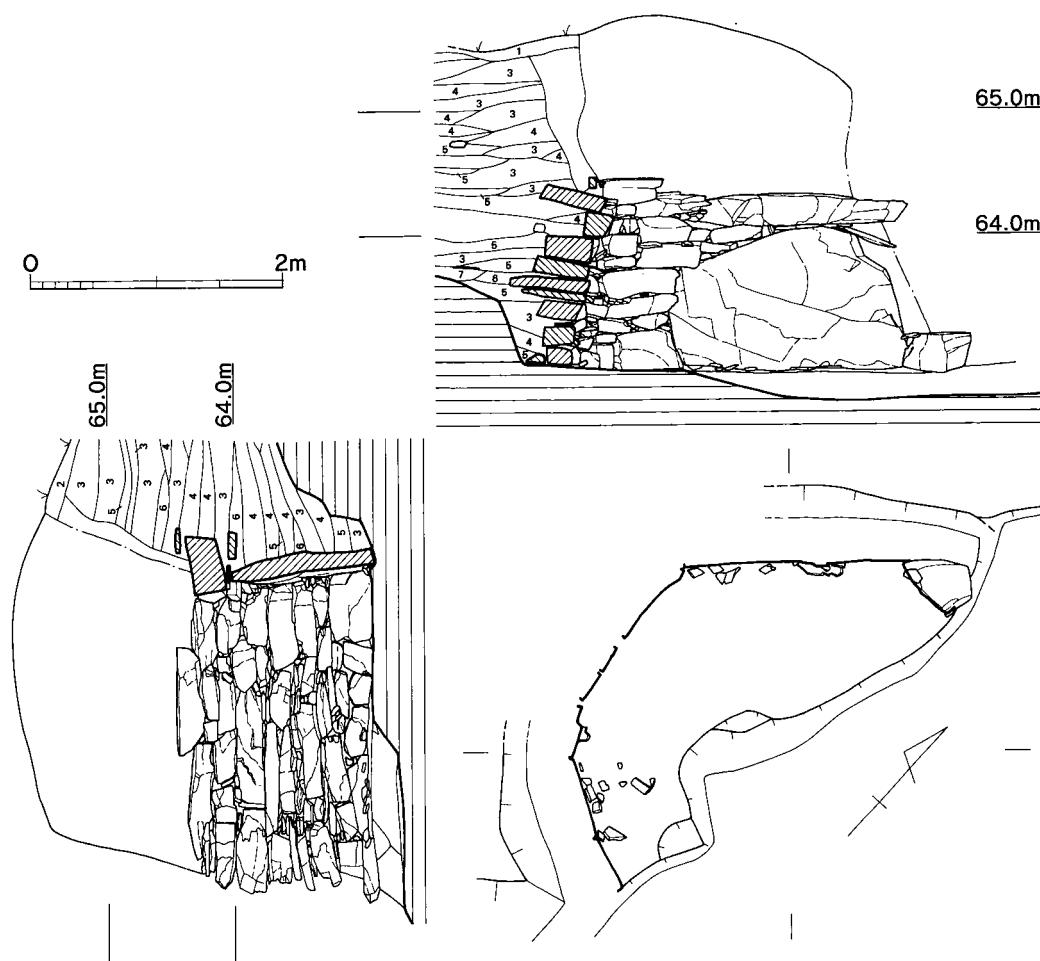


第33図 4号墳墳丘盛土実測図 (1/60)

調査区の北端に位置し、標高63~66mの丘陵緩傾斜面に築造されている。本墳は水路の開削工事によって墳丘の半分が失われている。

墳丘（図版42・43、第20・33図） 表土除去前は6×7m程度の高まりを有していたため、それ程壊されていないものと思っていたが、石室を掘り下げていく内に墳丘の大半を喪失していることが判った。周溝は丘陵斜面側に墳丘を半周する程度の遺存状態で、墳丘の北側で幅2.8m、墳丘の西側で幅2.8m、墳丘の南側で幅2.6mを測る。墳丘規模は南北で、周溝内径が10m、外径は16mを測り、玄室奥壁から西側の周溝立上りまでは6mの距離を有する。周溝の高さは西側で最も高く分水嶺状となり、北側と南側に高さを減じる。形状的には他の古墳と同様、馬蹄形に巡らせていたものと思われる。

墳丘盛土は黄褐色土を基調とし、盛土中に片岩の小破片を多く含んでいた。土盛りの方法は、他の古墳と基本的には同じで、遺存する玄室左壁側では地山調整面から110cmの高さ（奥壁鏡石の高さ）まで水平に盛って数段石積みを行い、露出している部分を覆う様に盛る。続けて、先に盛った部分に繋げて全体を盛り上げる。これを数回交互に繰り返して、墳丘を構築している。1・3号墳の墳丘土盛りと大きく異なる点は、奥壁側（丘陵側）の盛土で、土層が山側に向かって高くなっている点である。これは、本墳が丘陵斜面に構築されているためで、旧地形を最大限活用した省力的な



第34図 4号墳石室実測図 (1/60)

造作と捉えられる。また、興味深いことに、4号墳の墳丘西側に石切場遺構が存在するが、石材を切り出した後に採掘坑を一旦埋め戻して本墳を築造している点である（第33図）。この事は、古墳の新たな築造を放棄することを意味し、1~4号墳においては、4号墳が最も後出して築造されたことを物語るものであろう。

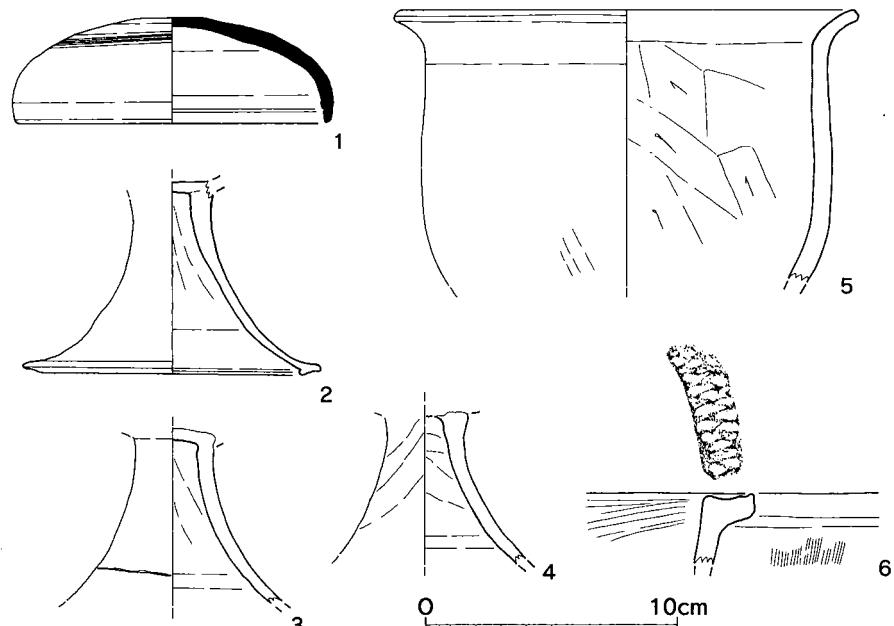
埋葬主体部（図版42・43、第34図） 本墳の埋葬主体部は、南東方向に開口する横穴式石室であるが、奥壁の鏡石から左壁面の3/4程度が残る状態であり、複室であったかは判然としない。しかし、辛うじて残っている右壁基底石と左壁とを重ねて求めた中心線をもとに玄室幅を復原すると、玄室幅は3.4mで、長野古墳群中最も大きな石室を有することとなり、複室構造であった可能性が高い。先の中心線を主軸とすると石室主軸はN48°Wを示す。玄室の壁体には緑簾片岩の割石が用いられている。玄室の床面プランは胴張りを呈し、長さ2.6m、幅3.0mの遺存状態であるが、推定長3.0m、推定最大幅は3.4mであろう。

奥壁は地山調整面から深さ60cm程掘り下げて構築され、奥壁の基部には長さ1.85m、高さ1.13m、厚さ0.15mの鏡石を立て、その上に長さ1.65m、高さ0.23m、厚さ0.47mの石を乗せている。左側壁は高さ1.55mの遺存状況で、9段程の積み石が残る。基底部に40~70cm大の石を据え、基底部から72°の傾斜角で持ち送りしながら積み上げている。玄室床面は攪乱され、敷石の裏込め石かと思われる小石が奥壁寄りと左壁側手前に数点遺存する程度であった。

出土遺物（図版45-3、第35・36図）

須恵器（1） 1は天井部がドーム形を呈する壺蓋。口縁部内面に僅かな段を有する。器高4.3cm、復原口径12.6cmを測る。焼成は堅緻で、灰色を呈する。IV区周溝黒色土の出土。

土師器（2~6） 2~4は高壺の脚部破片で、3・4は裾部を欠く。2の裾端部は内側に小さく突出する。裾部径は11.8cmに復原した。形態・手法的に須恵器の模倣品である。5は小型の甕で、口縁部は肥厚せずに外反する。また、頸部に締まりはなく、そのまま胴部に移行する。口縁部ヨコナデ、

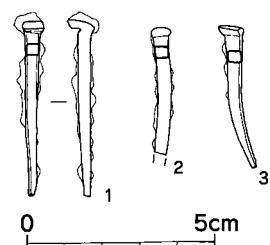


第35図 4号墳出土土器実測図（1/3）

外面ナデ、内面箇ケズリによる。口径は18.4cmに復原した。何れもIV区周溝黒色土の出土。

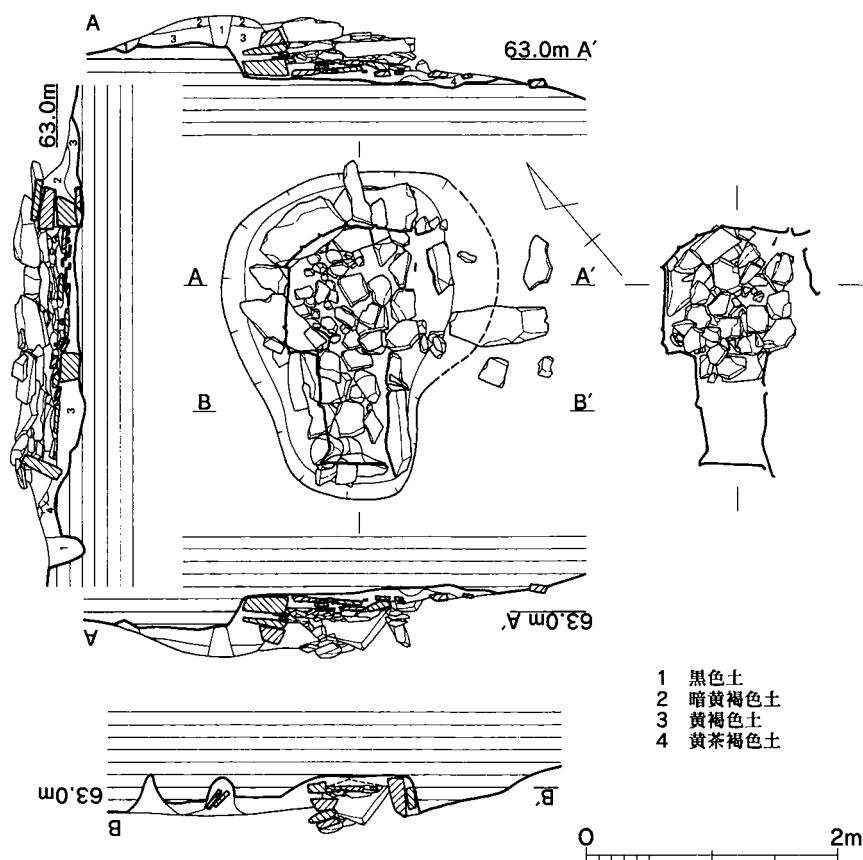
6は中世の鍋の口縁部小破片で、玄室埋土出土。口縁部はL形に外反し、上面には圧痕がある。

鉄器 (1~3) 1~3は鉄釘で、1は長さ4.8cm、頭部幅0.5cm、重さ2.2gを量る。2は両端部を欠く。3は長さ3.8cm、頭部幅0.55cmで、重さは1.7gを量る。1・2は玄室床面の出土で、3はIII区周溝上層褐色土中から出土した。



第36図 4号墳出土鉄釘
実測図 (1/2)

5号墳 (図版44、45-1・2・4、第20・37~39図)



第37図 5号墳石室実測図 (1/60)

墳丘 (図版44、第20・37図) 5号墳は3号墳の北側周溝と4号墳の南側周溝に挟まれた形で位置する。石室掘形の西側には黒色土の堆積が認められ、周溝の立上りと言えるほど明瞭なものではなかったが、石室掘形上場から1.5m西側に小さな段があり、これを周溝の西側立上りとすると外径4m程の小円墳になる。墳丘は低平なものであるが、25cm程度の盛土が残る。

埋葬主体部 (図版44、45-1・2、第37図) 南西方向に開口す



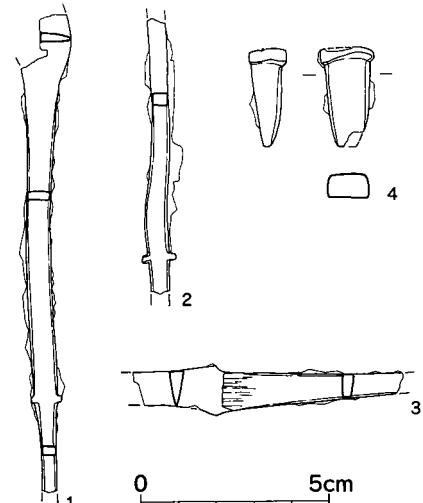
第38図 5号墳出土土器実測図 (1/3)

る単室の横穴式石室で、主軸をN40°Eに取る。玄室は東壁を失うが、石室全長1.92m、玄室長1.0m、玄室推定幅1.1mを測る。羨道部は長さ0.92m、先端幅0.45m、玄室側での幅0.56mを測る。壁体は3段程石積みが残っている。羨道部先端には長さ32cmの閉塞石を立てており、床面には敷石を施している。玄室床面から鉄鎌が出土した。

出土遺物（図版45-4、第38・39図）

須恵器（1） 1は5号墳東側の攪乱溝から出土した遺物。天井部が低平であることから蓋とした。外天井部は回転範ヶズリにより、内面はナデ調整。外面には灰が厚く被る。また、「V」字形のヘラ記号を付している。

鉄器（1～3） 1は片丸造三角形鎌で、茎先端を欠く。残存長12.65cm。2は鎌身下部の破片で、棘部が付く。1・2とも5号墳玄室床面敷石上の出土。3は5号墳東側の攪乱溝出土の刀子。両端部を欠き、残存長は7.2cm。よく使い込まれ、刃部は細くなっている。



第39図 5号墳他出土鉄器実測図
(1/2)

（2）落込

1号落込（第20図）

調査区の最南端で、1号墳周溝の南側で検出した落込。円形状を呈するが、調査区の制約上全体像は不明。検出長は4mで、深さは25cmと浅い。埋土は暗褐色砂泥で、埋土中から須恵器甕の胴部片などが出土した。

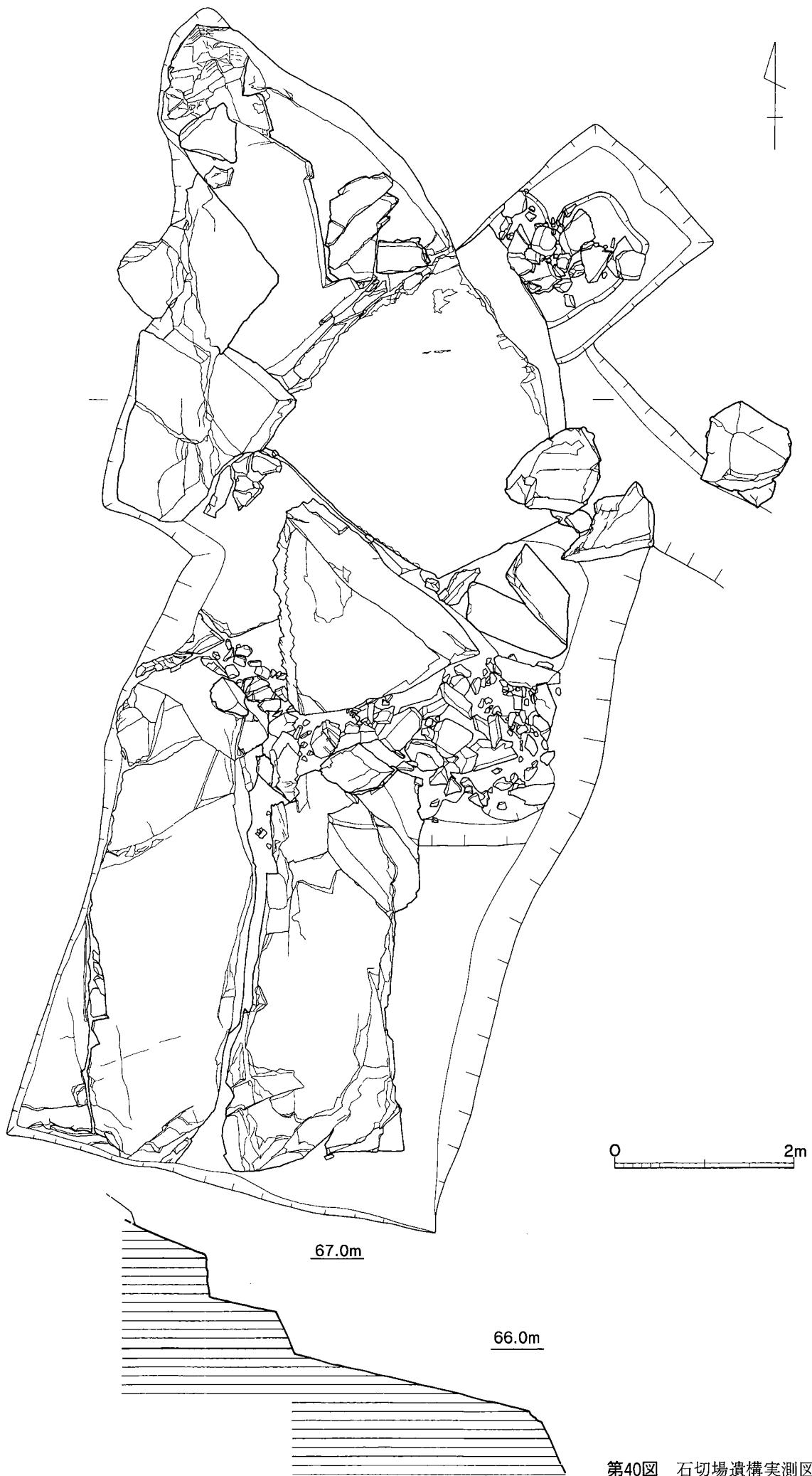
（3）石切場遺構

1号石切場遺構（図版46・47、第40図）

4号墳の西側斜面に位置する。重機による表土剥ぎの段階で緑簾片岩の岩盤が若干顔を覗かせていたが、4号墳の周溝を掘り下げていく内に三角形の石塊が出土した。石塊を詳細に観察すると工具による切り出し痕が確認されたので、南北12m、東西5mの範囲で掘り下げることにした。すると、第40図の如く、石材を採掘した遺構が発見された。また、工具痕のある岩盤が4号墳墳丘より深く潜っているので、墳丘との相関関係を確認するため4号墳縦断面を岩盤部分まで延長し掘り下げた所、石材を採掘した採掘坑を埋め戻した後に墳丘を構築していることが判明した。

出土遺物（図版45-4、第39図）

鉄器（4） 4は石を割るための矢で、先端部を欠損する。残存長2.6cm、頭部幅1.4cm、厚さ0.7cmで、残存重量は6.3gを量る。石切場の埋土中から出土した。なお、矢は2号墳II区周溝埋土から1点、3号墳III区周溝埋土から1点の計3点が出土している。



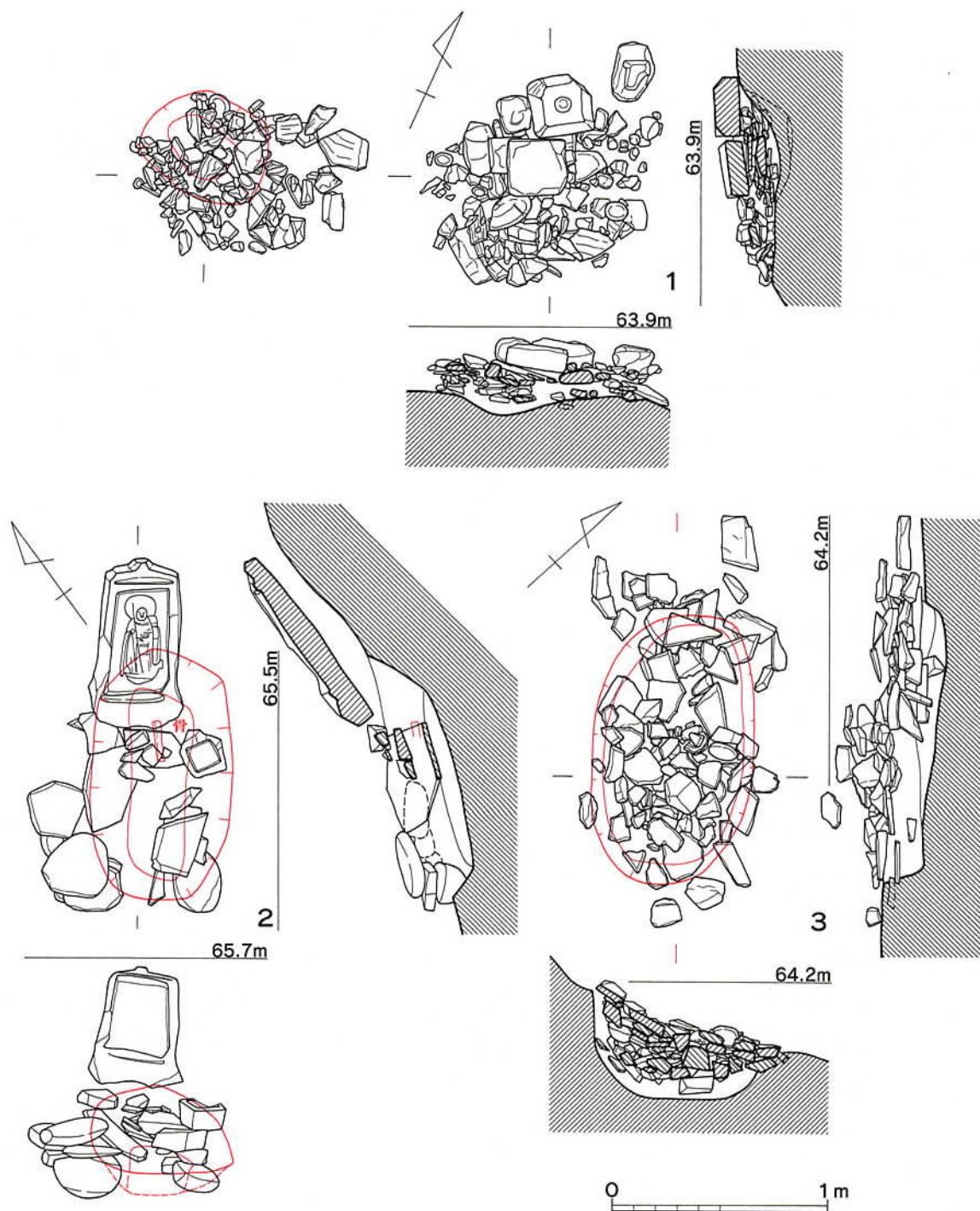
第40図 石切場遺構実測図 (1/60)

3. 近世以降の遺構と出土遺物

(1) 近世墓

1号近世墓 (図版48-1、第41図)

3号墳の南東側墳裾に埋葬される。表土を除去すると5~25cm大の川原石及び緑簾片岩が東西110cm、南北80cmの範囲に集石されており、その中央に五輪塔の地輪が鎮座する。水輪は付近に存在し



第41図 1~3号墓実測図 (1/30)

ないが、火輪と空・風輪は落とされた状態で地輪のすぐ北側に存在する。

墓壙は五輪塔と集石を除去した後に検出した。長軸60cm、短軸47cm、深さ22cmを測る楕円形を呈し、長軸をN70°Wに取る。墓壙の上位からは骨片が少量出土しているが、墓壙の規模と骨片の出土量からして遺体を火葬に付した後に火葬骨を埋葬したものと考えられる。墓壙内からの出土遺物はないが、集石中からは陶磁器が出土している。

出土遺物（図版51-1・55-1、第42・48図）

五輪塔（1） 原位置に存在するのは地輪のみであるが、周囲に存在する火輪と空・風輪及び水輪で復原した。地輪は高さ14cm、幅32cmの箱形で、水輪は高さ17cm、径22cmの断面逆台形を呈する。火輪は高さ16cm、上端幅35cmで、上部中央に空・風輪を乗せる臍穴を有する。空・風輪は高さ28cmで、復原した五輪塔の総高は67cmを測る。石材は何れも凝灰岩である。

陶器（43） 43は石組み中から出土した急須の蓋で、復原口径は9.0cmを測る。釉薬は外面の口唇部～摘みにかけて施され、内面は露胎。灰白色に発色し、鹿子文様は茶褐色に発色する。

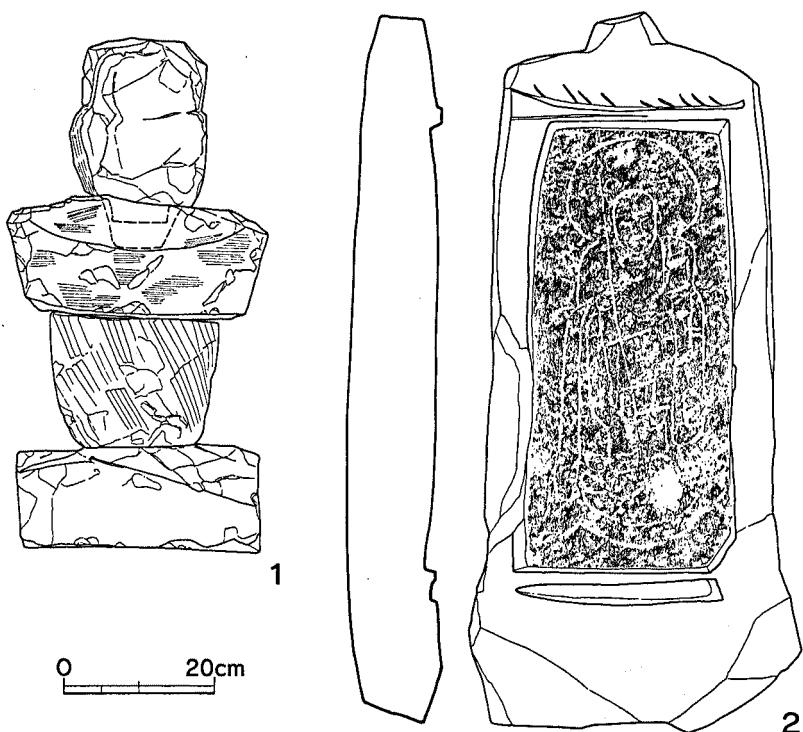
2号近世墓（図版48-2・3、第41図）

3号墳の南側墳裾に埋葬される。表土を除去する以前から墓石が露出しており、墓石は墳丘側に倒れた状態にあり、内部に彫り込まれた地蔵菩薩は天を仰いでいた。墓壙は墓石を除去した後に検出した。長軸116cm、短軸66cm、深さ33cmを測る楕円形を呈し、長軸をN35°Eに取る。墓壙の南側には川原石が2段ほど積まれており、壁面を構成している。また、墓壙の中位からは大腿骨と思われる長さ20cm程の骨が出土しているが、これ1点のみであり、埋土中に炭は含まれているものの火葬墓とは異なる印象を受ける。骨の付近からガラス瓶の破片が出土しており、近代の埋葬であろう。

出土遺物（図版51-2・52、第42・46図）

墓石（2） 位牌形を呈し、長さ94cm、頭部幅33cm、基部幅44cm、厚さ12cm。頭部は先端が尖っており、宝珠を意識したものか。体部を1～2cm程彫り窪め、線刻による地蔵菩薩を描く。

地蔵菩薩は袈裟を身にまとい、右手に錫杖を持ち、左手には如意宝珠を掲げている。頭の後ろには頭光が丸く描かれている。また、顔・両手・裾の部分は白く着色されており、線刻の一部には墨痕がみられる。戒名・年号などは刻まれていない。石材は凝灰岩。



第42図 1・2号墓墓石実測図 (1/10)

磁 器 (26) 26は墓壙内出土の染付小皿で、器高2.8cm、高台径3.6cmで、口径は8.8cmに復原した。見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。

3号近世墓（図版49、第41図）

3号墳の北側墳裾に埋葬される。表土を除去すると15~25cm大の川原石及び緑簾片岩が東西90cm、南北160cmの範囲に集石されていたが、墓石の類は周辺に存在しない。墓壙は集石を除去した後に検出した。長軸125cm、短軸75cm、深さ28cmを測る橢円形を呈し、長軸をN38°Wに取る。墓壙内部には角礫が底面付近まで落ち込んでいることから空洞が存在したと考えられるが、木棺の存在を示す鉄釘は出土していないことから遺体を直接埋葬した土壙墓と判断される。角礫の上部から陶磁器が出土している。

出土遺物（図版53、第47図）

磁 器 (36) 36は墓壙上面出土の菊花型押による染付小皿で、器高3.5cm、復原口径13.0cm、高台径6.4cmを測る。内面には菖蒲の花が描かれ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。

1号甕棺墓

3号墳の西側墳丘を掘り下げている最中に検出した甕で、甕自体は大破しており、3号墳玄室内にも破片が落ち込んでいた。また、原位置を留めるものではないため墓壙は不明であるが、3号墳の墳裾周囲には近世墓・胞衣壺が埋葬されていることから近世墓として報告する。

半胴甕（図版51-3、第43図）

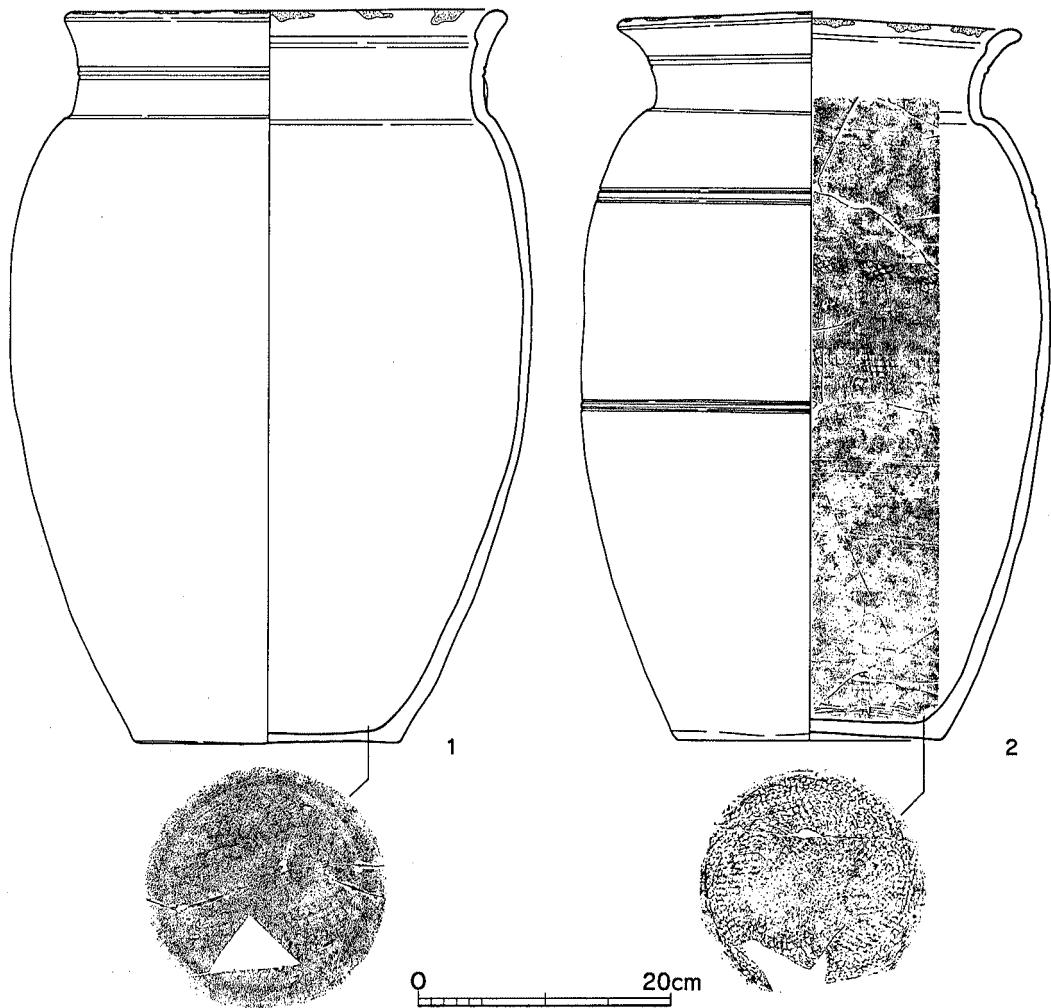
1は器高が58.3cmの中型甕で、復原口径35.1~39.8cm、底径21.0cmを測る。口縁端部は内側に折り曲げたもので、肥厚する。口縁部は直立気味に外反し、撫肩の肩部から緩やかに平底の底部に移行する。器面調整は口縁部がヨコナデで、体部は格子目タタキを丁寧にナデ消しているが、内底面には格子目タタキを留める。頸部外面中央には笠先による沈線を2条施している。釉薬は灰味を帶びた褐色を呈し、口縁部~体部にかけて灰白色の釉を波状にかけている。また、口唇部上面には目砂が16箇所みられる。

2号甕棺墓

3号墳の北側墳丘を掘り下げている最中に検出した甕で、甕自体は1号甕棺墓同様大破していた。原位置を留めるものではないため墓壙は不明であるが、当甕も近世墓として報告する。

半胴甕（図版51-4、第43図）

2も器高が58.0cmの中型甕で、復原口径32.0~36.1cm、底径21.0cmを測る。口縁端部は内側に折り曲げたもので、肥厚する。口縁部は開き加減に外反し、撫肩の肩部から緩やかに平底の底部に移行する。なお、底部の締まりが悪いため全体として寸胴な印象を受ける。器面調整は口縁部がヨコナデで、体部は格子目タタキを丁寧にナデ消しているが、内底面には格子目タタキを留める。頸部外面中央と肩部及び胴部中位に笠先による沈線を各2条施している。釉薬は灰味を帶びた褐色を呈し、口縁部~体部にかけて灰白色の釉を波状にかけている。また、口唇部上面には目砂が14箇所みられる。



第43図 1・2号甕棺実測図 (1/6)

(2) 胞衣壺

1号胞衣壺 (図版50-1、第44図)

3号墳のⅡ区周溝埋土中に埋納されている。壺が存在すると予測していなかったため墓壙の検出を疎かにしてしまった。壺は南側にやや傾いているものの蓋が被った状態で検出された。壺の中には若干土が入っていたため土を洗浄したものの副葬品など皆無であったが、壺の形状などからして胎盤を埋納した胞衣壺と考えられる。

出土遺物 (図版51-5、第45図)

素焼土器 (1・2) 1は蓋で、低平な形状を呈する。器高2.9cm、口径16.2cm、天井部径14.0cmを測る。口縁部は工具によるシャープな切離しのままで、外天井部にはヘラ切離しの痕跡がみられる。器面調整は内外面ともナデによる。胎土は粗く、石英・雲母粒を含む。

2は身で、器高11.4cm、口径12.0cm、底径11.6cmを測る。口縁部は蒲鉾形に肥厚し、頸部の締まりは悪い。体部は粘土板2枚を張り合わせ底部と接合しており、内外面に縦方向の粘土板接合痕がみられる。内外面ともヨコナデによるが、外底面のみ未調整。胎土は粗く、石英・雲母粒を含む。墨書・穿孔などは施されていない。

2号胞衣壺（第44図）

3号墳のⅢ区周溝埋土中に埋納される。墓壙は30cm×36cmの楕円形を呈し、そのほぼ中央に置かれている。蓋が被った状態であったが、壺の中には若干土が入っており、土を洗浄したものの皆無であった。壺の形状などからして胎盤を埋納した胞衣壺と考えられる。

出土遺物（図版51-5、第45図）

素焼土器（3・4） 3は蓋で、器高2.6cm、口径16.0cm、天井部径13.8cmを測り、1とほぼ同じ大きさ。口縁部は工具によるシャープな切離しのままで、外天井部には箆切離しの痕跡がみられる。器面調整は内外面ともナデによる。胎土は粗く、長石・石英・雲母粒を含む。

4は身で、器高11.6cm、口径12.4cm、底径11.6cmを測り、2とほぼ同じ大きさ。口縁部断面は蒲鉾形に肥厚し、頸部の締まりは悪い。体部は粘土板2枚を張り合わせ底部と接合しており、内外面に縦方向の粘土板接合痕がみられる。内外面ともヨコナデによるが、外底面のみ未調整。また、墨書き・穿孔などは施していない。

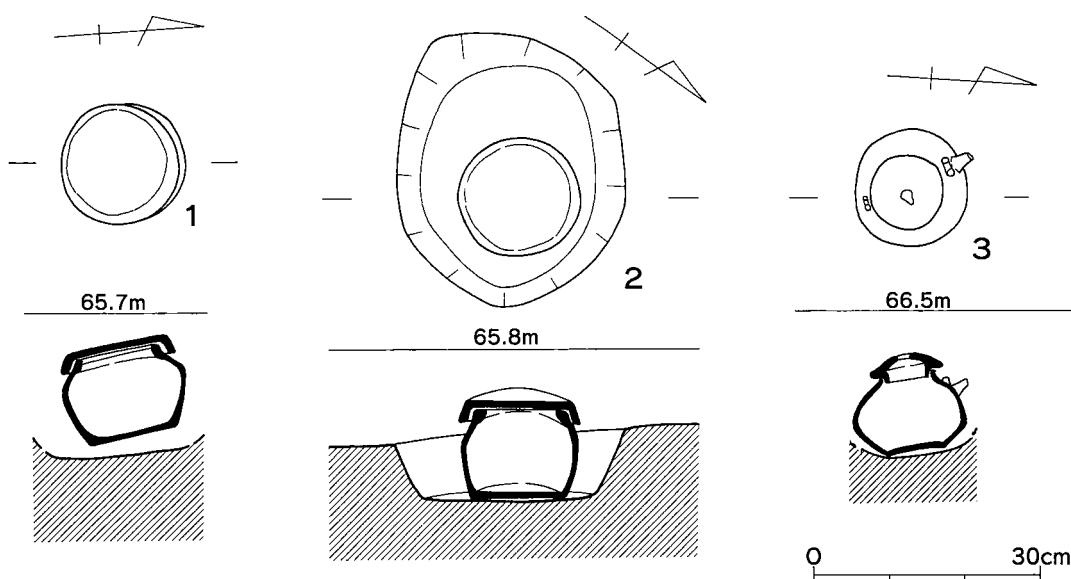
3号胞衣壺（図版50-2、第44図）

2号墳の北側に設定した1Tr掘り下げ中に検出したため墓壙は確認し得ていない。位置的にはトレンチの中央で、②層の褐色土に掘り込まれている。壺は土瓶を転用したもので、蓋の摘みと本体の取手・注ぎ口が欠損している。

出土遺物（図版51-5、第45図）

陶器（5・6） 蓋と身がセットになる土瓶で、5が蓋で、6が身。5の蓋は摘みを欠損する。口径9.3cm、かえり径6.2cm。口唇部から天井外面にかけて施釉しており、口唇部には口紅を施す。

6は取手と注口先端部を欠損する。体部は算盤形を呈し、体部部中位外面から口縁部にかけて釉薬を施しており、緑灰色に発色する。器高11.2cm、口径8.4cm、底径7.4cmを測る。なお、大木町の横溝中島遺跡C地区1号近世墓からは、本跡出土の土瓶に形状・釉調が類似した土瓶が出土している。



第44図 1~3号胞衣壺実測図 (1/10)

(3) その他の出土遺物

ここでは、古墳の墳丘・石室内・周溝埋土上層及び周辺から出土した陶磁器・銅製品・石製品・古錢などの近世遺物を報告する。

出土遺物 (図版52~56、第46~50図)

磁 器 (1~8・10~15・17~24・27~35・37~41)

1~3は染付の壺。1は器高に比して口径が大きく、外面に文字4字が染め付けられるが、判読不明。器高2.9cm、口径7.8cm、高台径3.0cmを測る。2は見込みに青色で「酒」の文字とその左側に金文字で「百葉之薬也□」の文字がある。3は見込みに山水文が染付けられている。2・3とも体部外面の中程にシャープな突線がみられる。器高は2が2.8cm、3は3.4cmで、口径は2が6.3cm、3は7.5cmを測る。

4・5は染付の小壺で、4には草花文が、5には雨降り文が染め付けられる。器高はともに4.1cmで、口径は4が6.6cmで、5は7.0cmに復原した。

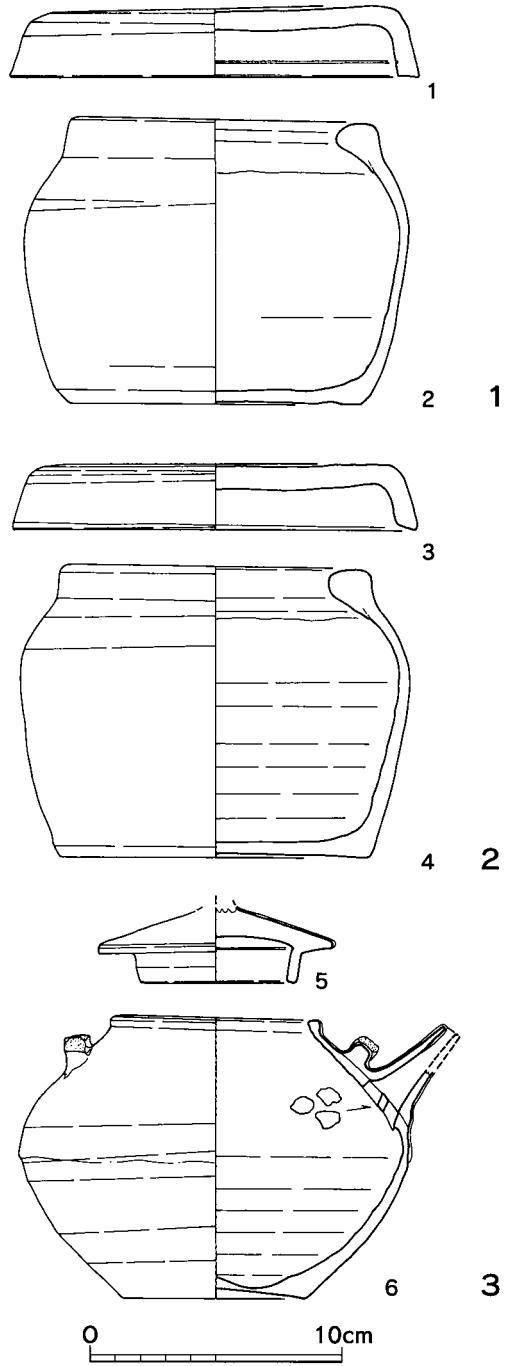
6~8は染付の小碗で、6は花文が2箇所に描かれる。7の外面には型紙摺りによる花文が染め付けられるが、滲んでいる。また、口縁部内面には輪宝繫文を施している。8は横線の後に楓葉文を3枚描いている。6は器高5.3cm、口径6.4cm、底径3.8cmを測る。

10・11は型紙摺りによる筒形碗で、10は絵窓の中に菊花が染め付けられ、口縁部内面にも輪宝繫文をあしらう。11は花鳥文を染め付け、口縁部内面には輪宝繫文を施すものかなり簡略化されている。また、高台内面には「玩」の文字を描く。10は器高7.1cm、口径7.9cm、高台径5.0cmを測る。

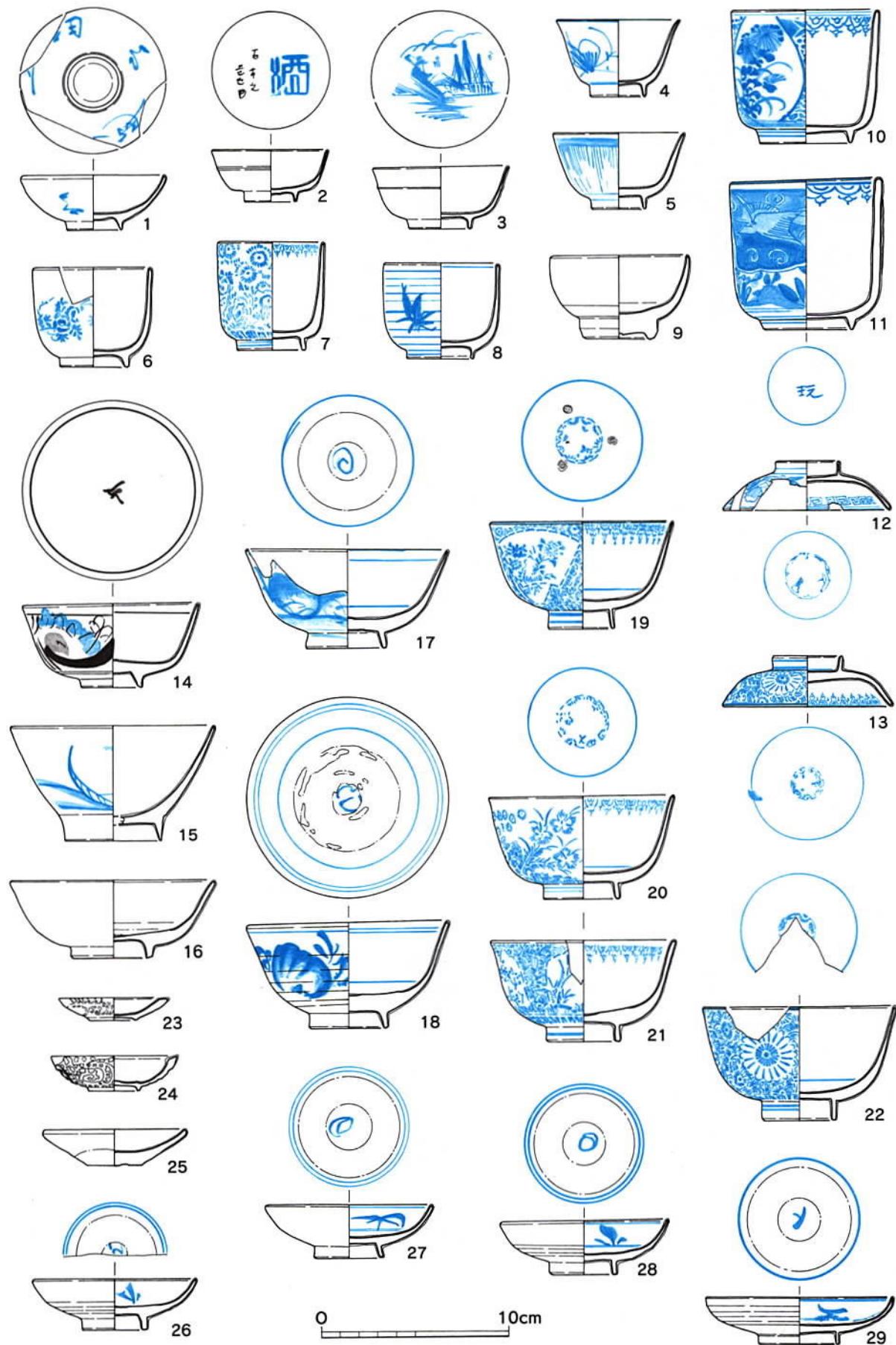
12・13・22は染付蓋付碗。12・13が蓋で、22が13とセットとなる本体。12は外面に花文、内面の口縁部に雷文、見込みには松竹梅円形文を描いている。13・22は外面に菊花、口縁部内面には輪宝繫文を型紙摺りで染め付け、見込みには簡略化した松竹梅円形文を施している。器高は13が2.7cm、22は6.1cmで、口径は13が9.2cmで、22は10.4cmを測る。

14は色絵碗で、草花文様が赤・青・黄色で描かれている。また、見込みには蝶文?をあしらう。器高4.5cm、口径9.5cm、高台径3.4cmを測る。15は所謂廣東碗であるが、小片のため外面及び見込みの文様は不明。

17~21は染付碗で、17・18は外面に花文を染め付ける。また、見込みは蛇ノ目釉剥ぎによる。19



第45図 1~3号胞衣壺実測図 (1/3)



第46図 古墳他出土陶磁器実測図① (1/3)



第47図 古墳他出土陶磁器実測図② (1/3)

～21は型紙摺りによるもので、19は扇形の絵窓の中に竹・牡丹を描く。21も花頭窓形の絵窓の中に梅と花文を交互に描いている。19・20の口縁部内面には輪宝繫文、見込みには簡略化された松竹梅円形文を施す。21の見込みは蛇ノ目釉剥ぎによる。19は器高5.7cm、口径9.8cm、高台径3.6cm。

23・24は蛸唐草型押成形による白磁の紅皿で、内面のみ釉薬を施している。23の外面は磨滅によるものか蛸唐草がかなりすり減っている。23の口径は5.8cmを測る。27～29は染付小皿で、内面には草花文？が描かれている。何れも見込みは蛇ノ目釉剥ぎによる。

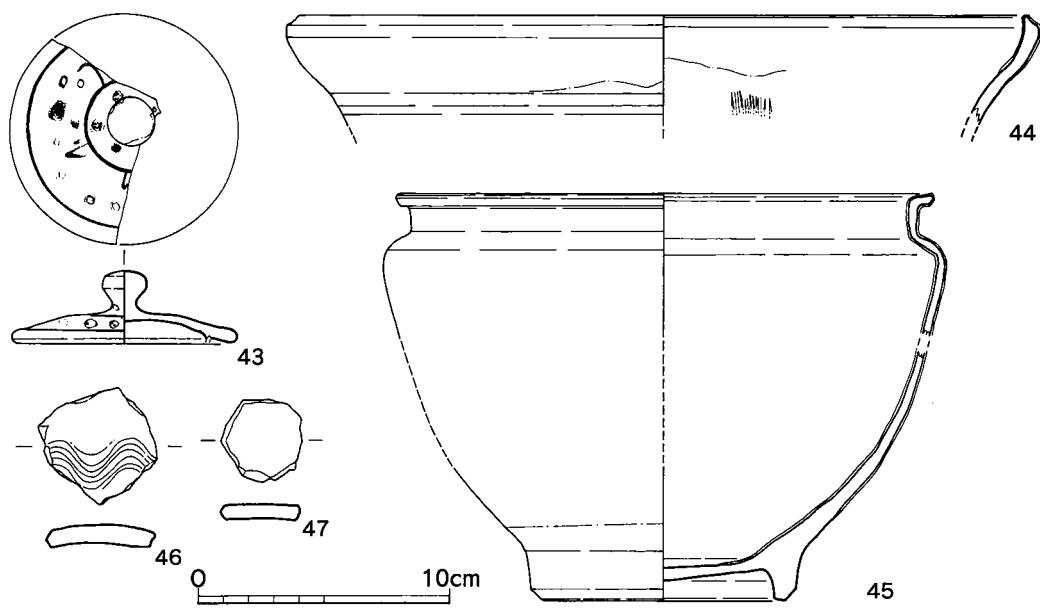
30～32・35は型押による染付皿で、30・31の見込み文様は型紙摺りによる。32の内面は口縁部が雷文、見込みには草花文を施す。35は見込みに山水文様を描き、口唇部に口紅を施している。35は器高3.1cm、口径12.9cm、高台径8.1cmを測る。高台は何れも蛇ノ目凹形高台。33は染付皿の小片。34は菊花型押成形による白磁皿。

37は染付の中皿で、草花文を型紙摺りで染め付けている。高台は蛇ノ目凹形高台である。器高5.2cm、口径16.0cm、高台径10.0cmを測る。38は口縁部が大きく開く鉢で、内面に花文、外面には源氏香文を3箇所に描いている。また、口縁部上面を杏仁形に切り欠いている。

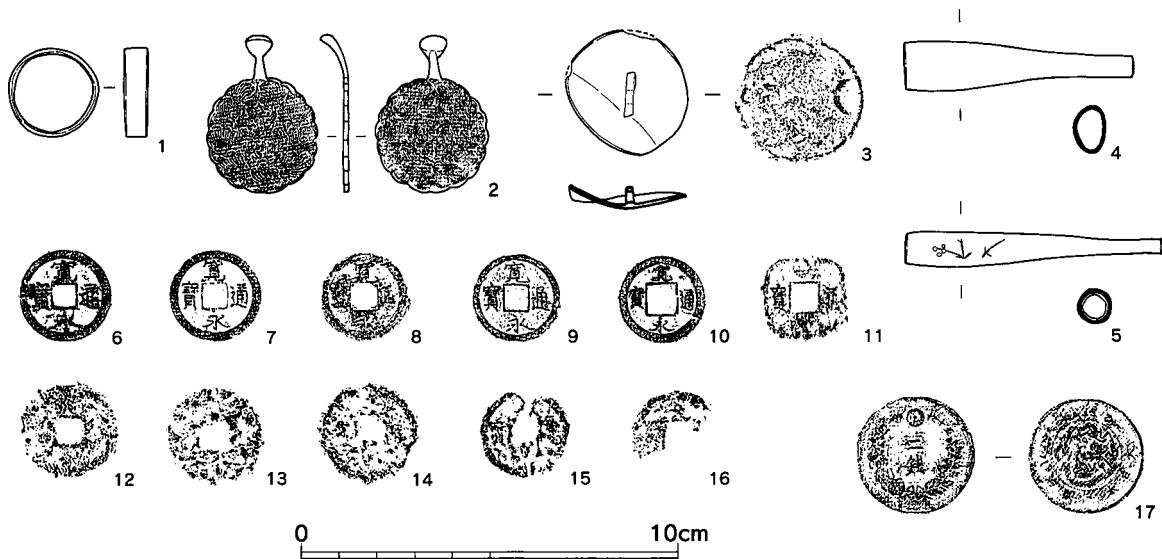
39は平戸焼きの瓶で、下膨れの安定した器形を呈する。器面には線刻による牡丹文様をあしらう。体部は緑黄色に発色する。40は染付の瓶で、牡丹を描いている。器高25.1cm、口径3.7cm、高台径8.5cmを測る。

41は赤絵の仏飯器で、外面は菊花散らし文様を描く。高台疊付は無釉で、上げ底をなす。器高5.3cm、口径6.0cm、高台径3.4cmを測る。

陶 器 (9・16・25・44・45) 9は陶器の小碗で、釉薬は茶褐色に発色する。高台部分は無釉。器高4.5cm、口径7.5cm、高台径3.4cmを測る。16は浅めの碗で、釉薬は焦げ茶色に発色する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、疊付も無釉。器高4.2cm、口径10.8cm、高台径4.4cmを測る。25は無高台の小皿で、高台付近は無釉。切離しは糸切りによる。44は摺鉢の口縁部小破片で、口縁部付近のみ飴釉を施す。45は星野焼きの小型甕で、口縁部は短い頸部から水平に開く。高台は肉厚で、上げ底をなす。釉薬は緑灰色に発色し、高台付近のみ無釉。推定器高16.5cm、復原口径21.6cm、高台径9.8cm。



第48図 古墳他出土陶磁器実測図③ (1/3)



第49図 銅製品・古銭実測図 (1/2)

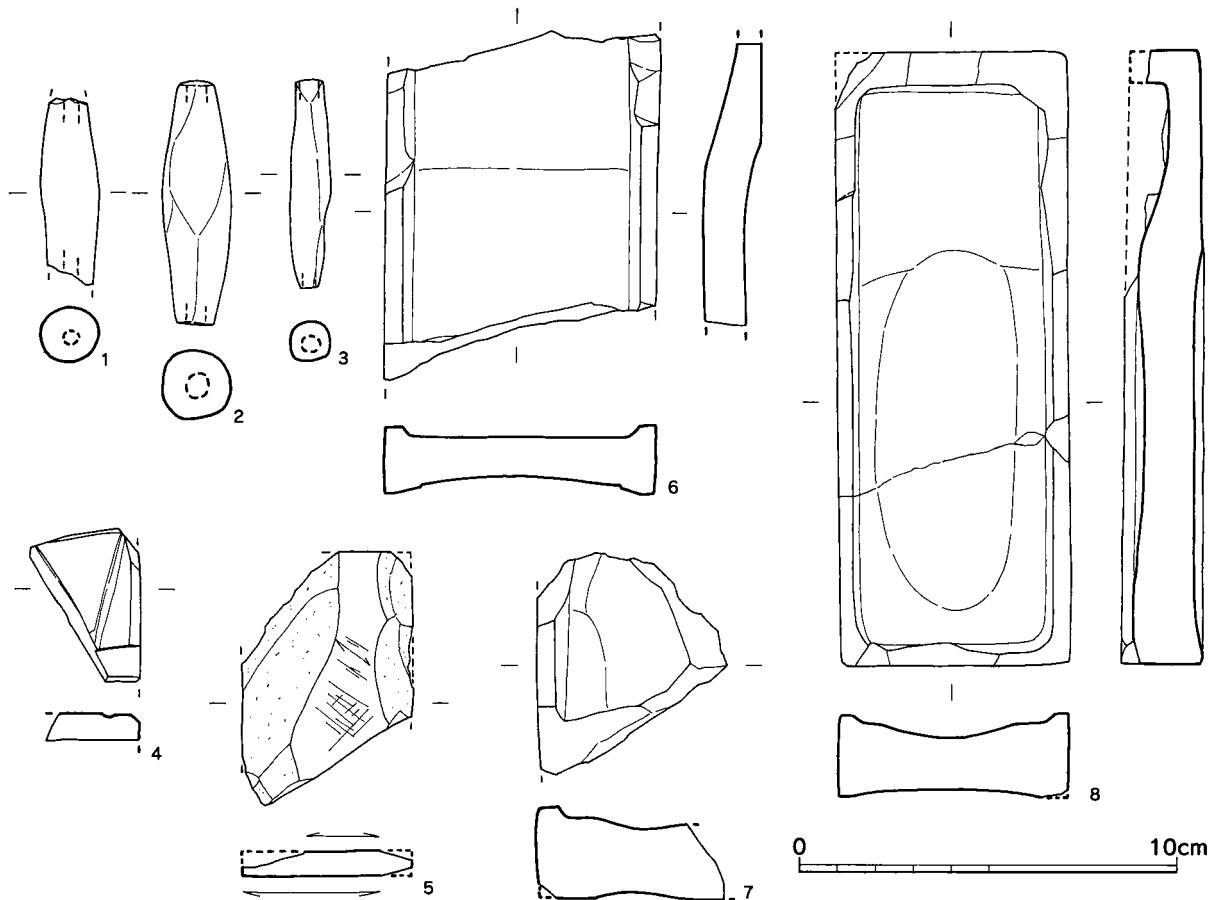
素焼き器 (42) 42は素焼きの線香立てで、口縁部は小さく外反する。器高5.0cm、口径9.6cm、高台径4.6cmを測る。底部外面のみ籠ケズリで、他はヨコナデによる。

土製品 (第48図46・47、第50図1~3) 第48図46・47は土師器の体部片を粗く打ち欠いたもので、46の外面には櫛歯による波状文がみられる。第50図1~3は管状土錐で、1は残長5.0cm、径1.5cm、重さ10.8gで、2号墳墳裾右側の出土。2は長さ6.5cm、径1.8cm、重さ16.1gで、3号墳II区周溝の出土。3は長さ5.6cm、径1.0cm、重さ4.6gで、4号墳北側斜面の出土。

銅製品 (第49図1~5) 1は円形の銅製品で、径2.35cm、幅0.65cm、厚さ0.15cmを測る。法量からして指輪になろう。2号墳墳裾右側の黒色土からの出土品。2は右側列石上層出土の耳搔き。握り部の側縁は連続した円弧で、上下面とも牡丹様の花弁を毛彫りしている。径3.0cm、厚さ0.15cm、重さ8.1gを測る。3は3号墳IV区墳裾表土出土の円盤で、裏面に紐を通すための突起を有する。表面には何らかの文様が鋳出されているが、不明。径3.35cm、重さ8.9g。4・5は煙管の吸口で、4は長さ6.1cm、吸口径0.6cm、重さ6.2g。5は長さ6.85cm、吸口径0.4cm、重さ8.5gを測り、表面には花弁を浮き彫りで、茎葉を線彫りであしらう。また、内部には竹筒が遺存していた。

古銭 (第49図6~17) 6~10は「寛永通寶」銅銭で、6は古寛永通寶。8は「通」文字の頭が「マ」になっている所謂マ通寶。7・9・10は新寛永通寶。径・重さは、6が2.45cm・2.9gで、7は2.45cm・2.3g、8は2.35cm・2.3g、9は2.35cm・3.5g、10は2.3cm・2.0gを測る。11~16は「寛永通寶」鉄銭で、11は方形を呈する仙台通寶で、一辺2.3cm・重さ2.5g。他の径・重さは、12が2.5cm・3.5gで、13は2.5cm・3.3g、14は2.6cm・3.6g、15は2.4cm・3.4g。17は明治八年発行の二銭銅貨で、径3.2cm、厚さ0.25cm、重さ13.7gを量る。6・7が2号墳前面の出土で、8・11~15・17は2号墳玄室埋土の出土。9・10は3号墳III区周溝埋土の出土。16は4号墳玄室埋土の出土。

石製品 (第50図4~8、第54図24・25) 4・5・24・25は砥石。4は側縁の小破片で、上面には「×」状の線刻がある。2号墳玄室の出土。5は使い込まれて薄くなっている。2号墳前面の出土。ともに粘版岩製。24・25は砂岩製の砥石で、24は1号墳I区墳裾の出土。残存長8.2cmで、3面を砥面としている。25は3号墳玄室出土品であるが、古墳に伴うか不明。実測図の向かって上下面以外を使用



第50図 土製品・石製品実測図 (1/2)

している。上面幅6.2cm。

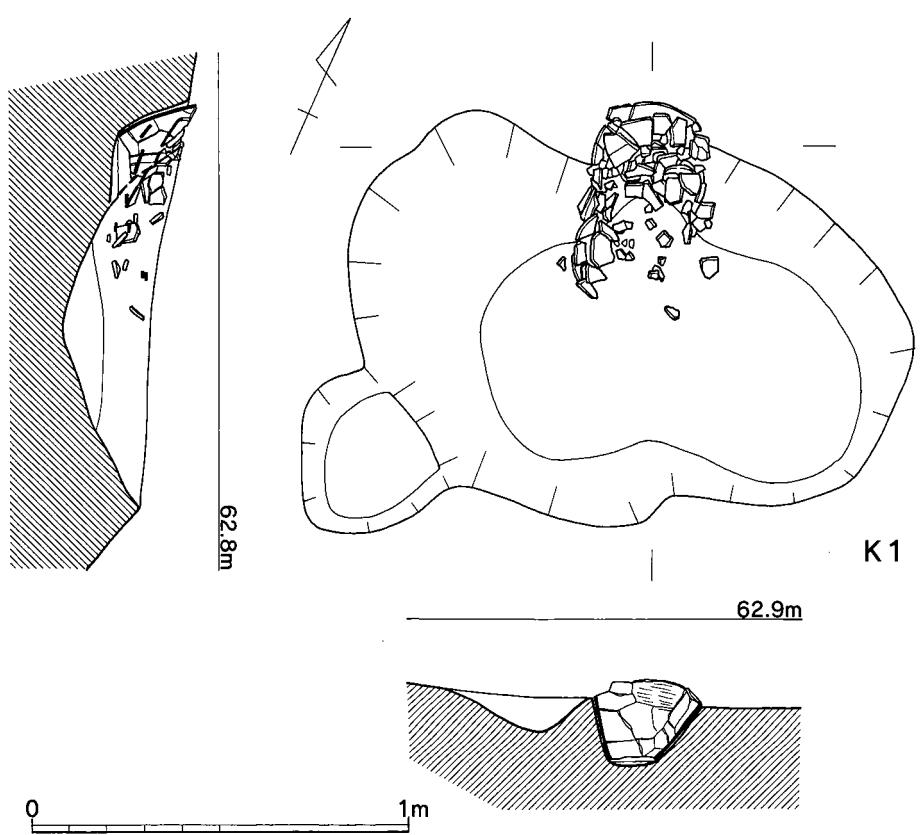
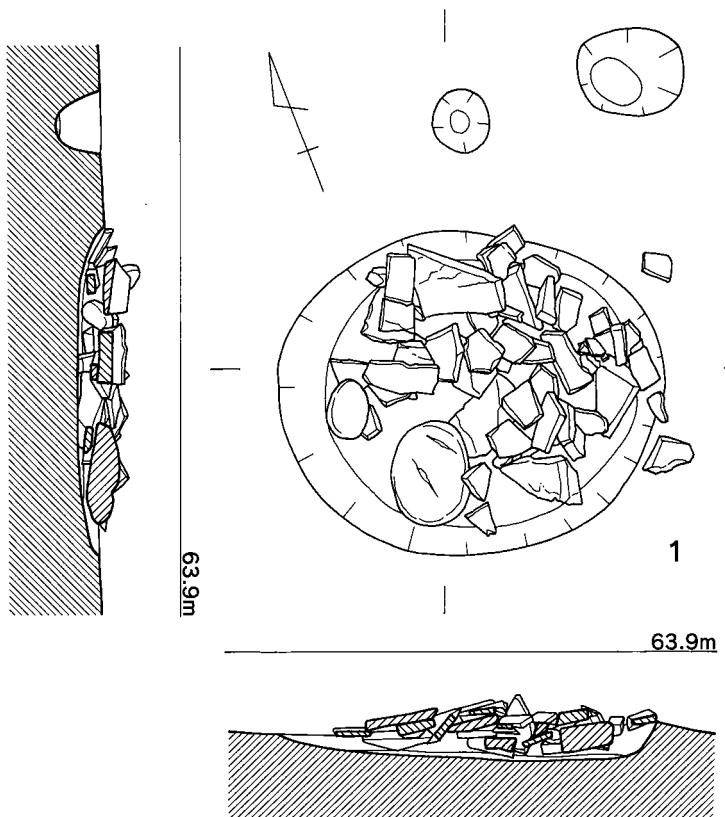
6~8は硯。6は海部~陸部にかけての破片で、裏面も若干窪む。幅7.1cm。7は陸部側縁の小片で、砂岩製の様である。8は海部側縁を欠く程度。長さ16.3cm、幅6.2cm。裏面には漢字風の文字が彫られている。6・8は粘版岩製。6は3号墳II区周溝上層の出土、7は4号墳II区周溝上層の出土、8は3号墳玄室埋土中の出土。

4. 縄文時代の遺構と出土遺物

(1) 集石遺構

1号集 石 (図版50-3、第51図)

3号墳III区周溝掘り下げ後に検出した。平面形は長円形を呈し、長軸1.01m、短軸0.86m、深さ0.16mを測る。土坑内には10~20cm大の片岩・川原石が集積されていた。壁面・石は焼けておらず、焼土・炭の出土もなかった。石の間から縄文土器の小片が出土している。



第51図 1号集石、1号埋甕実測図 (1/20)

(2) 埋甕

1号埋甕 (図版48-1、第51図)

2号墳北東側の平坦面で検出されたが、攪乱されており、規模など詳細は不詳。攪乱内からは鉢の破片が出土しており、粗製の甕を正立させていることから鉢が上甕で、粗製深鉢が下甕になる。

また、攪乱内からは粗製深鉢の底部が出土しておらず、元々底部は欠損していたものと考えられる。

出土遺物 (図版57-1、第52図)

上甕 (1) 大型の浅鉢で、口径の1/4程が残存する。器高12.1cm、復原口径36.4cm。口縁部はS形に屈曲し、口唇部内外面に沈線を有する。器面調整は外面丁寧な横方向のミガキ、内面の下半部は擦過による。胎土に石英を多く含み、色調は茶褐色を呈する。

下甕 (2) 粗製の深鉢で、口縁部は短く外反する。頸部から

8cm程下位に屈曲部を有する。調整は内外面とも条痕によるが、外面の下半部は擦過の後、縦方向に雜に磨く。また、胴下半部外面には炭化物が付着している。

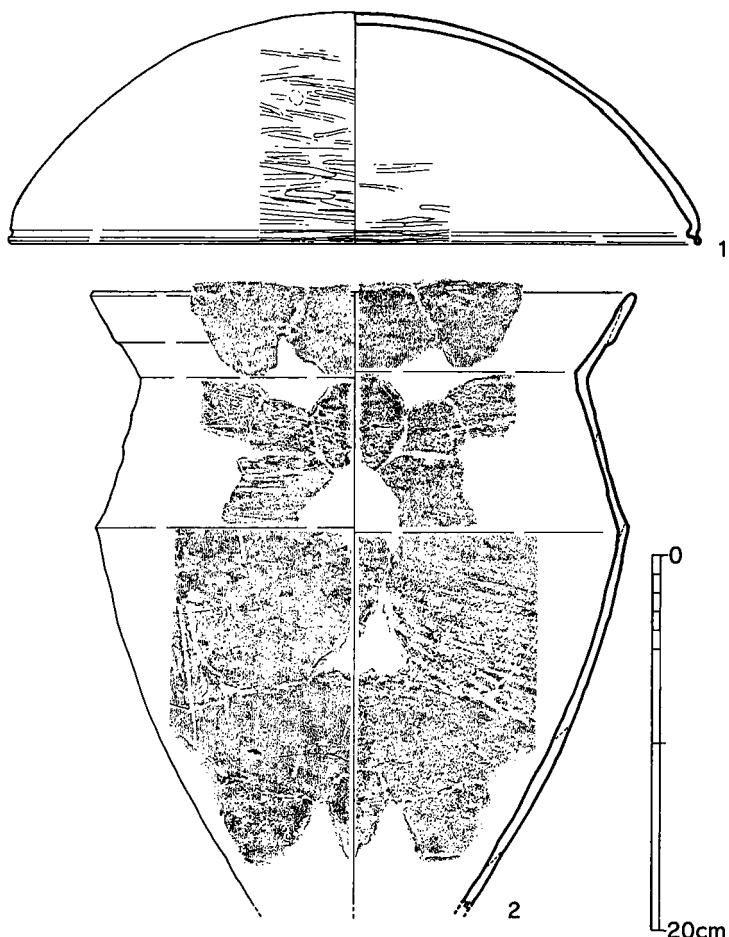
(3) 包含層他出土の遺物

出土遺物 (図版57-1、第53図)

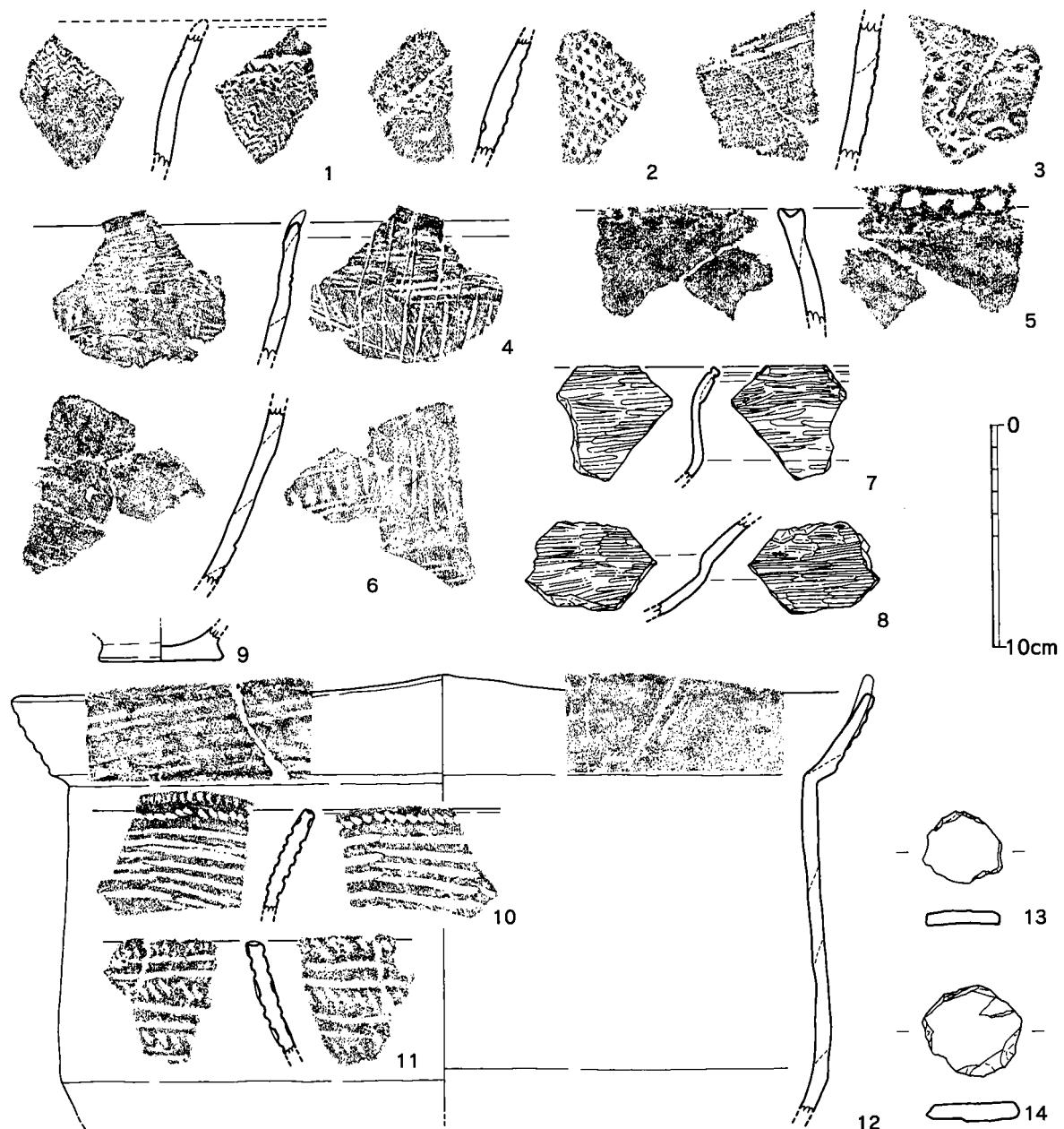
縄文土器 (1~14) 1~3は押型文土器。1は外面から口縁部内面にかけて横方向の山形文を施している。2・3は外面に横方向の楕円文を施し、3の口縁部内面には斜位の条痕が認められる。

4~6は深鉢。4は山形口縁をなし、外面には範先による沈線を施す。5はナデ調整により、口縁部上面には連続凹点文を施している。6は体部破片で、外面に凹線文を施す。7・8は精製浅鉢で、内外面とも丁寧な範ミガキによる。9は深鉢の底部破片。磨滅が著しく、器面調整は不明。10・11は内外面に疑似条痕を施し、口縁部の内外面と口唇部には連続刺突文がみられる。12は山形口縁の深鉢で、口縁部に浅い凹線文を施す。13・14は二次加工の土器片錐になろう。

1・10・13は表土、2・8・14は包含層、3・7は1号墳II区ベルト、4・11は1号墳断割りTr、5は1号墳II区周溝黒褐色土、6・9は1号墳周溝上層褐色土、12は3号墳墓道の出土。



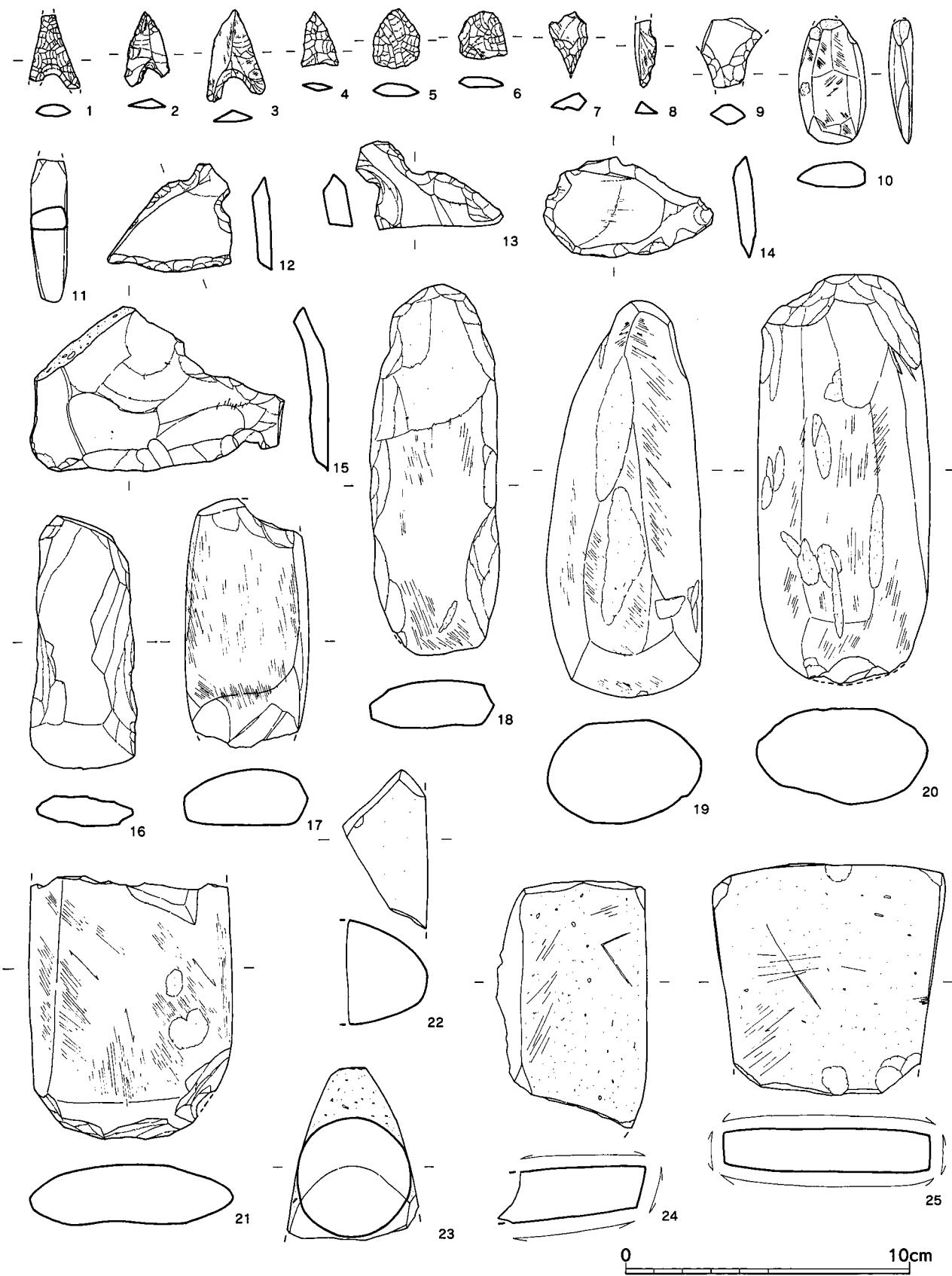
第52図 埋甕実測図 (1/4)



第53図 繩文土器実測図 (1/3)

石 器 (1~25) 1~3は黒曜石製の凹基式石鏃で、2・3は剥片鏃。2は長さ2.6cm、幅1.6cm、重さ1.3g。4~6は三角鏃で、4がチャート、5・6は黒曜石製。7~9は石錐で、8は半欠品。7・8が黒曜石製で、9はサヌカイト製。10は小型の磨製石斧で、残長4.5cm、幅2.3cm。11は滑石の棒状品で、残長5.0cm。12~15はサヌカイト製の石匙で、12は長さ5.0cm、幅3.6cm、重さ10g。16~22は石斧で、16は刃部のみ研磨した局部磨製石斧。19は長さ14.0cm、幅5.5cmで、20は長さ14.4cm、幅6.1cm。16は片岩製、17・22は頁岩製、18~21は蛇文岩製。23は円錐形を呈するもので、用途は不明。材質は凝灰岩。24・25は砥石で、24は砂岩、25は硬砂岩製。25は表面が二次加熱により黒変している。

1は1号墳II区周溝、2・3・6・8は表採、4・25は3号墳玄室床面、5・21は1号墳IV区墳裾、7は1号墳玄室、9・16は1号落込、10・17は3号墳盛土下部、11・22・23は1号墳前面、12・20は包含層、13・19は3号墳断割りTr、15・18は1号墳IV区周溝、24は1号墳墳裾テラスの出土。



第54図 石器・石製品実測図 (1/2)

IV 総括

1. 長野古墳群について

長野古墳群では、道路建設工事によって破壊される5基の横穴式石室古墳を調査した。本古墳群は盜掘を受けていたものの墳丘・石室の遺存状態は良好で、新たな知見を得ることができた。また、古墳群に隣接して石材を採取した遺構も発見され、従来不明であった古墳と石材採掘場所との関係が明らかになるなど、古墳群の消滅と引き換えではあるが大きな成果を納めることができた。

ここでは、墳丘の築造方法及び古墳群の築造年代について検討を加えまとめとしたい。

① 立地

長野古墳群は、標高63～66mの丘陵緩傾斜面から丘陵裾部平坦面にかけて築造されており、1号墳が裾部平坦面に立地し、2・4号墳は丘陵緩傾斜面に立地し、3号墳はその中間位置に立地している。また、古墳群は墳頂部での距離が、1-2号墳間は20m、2-3号墳間は15m、3-4号墳間は16mの間隔で南北方向に配列している。

② 築造方法

個々の古墳の築造方法については前述したので、ここでは古墳の築造工程を復原してみよう。作業工程として、以下の4工程が想定される。

- 1) 地山整形：古墳を築く場所を選定し、旧地形の整形を行う工程
- 2) 掘形掘削：石室を構築する掘形を掘削する工程
- 3) 石室構築：石室を構築する工程
- 4) 墳丘土盛り：墳丘を盛り上げる工程

地山整形については、4号墳で観察した如く、旧地形を最大限利用し、大規模な地山整形は行っていない。掘形掘削は丘陵の緩やかな傾斜面を利用して省力的に掘形を掘削している。これは、石室構築及び墳丘土盛りとも関連し、急傾斜地だと掘形掘削に時間を多く要する反面、周囲を掘削するだけで墳丘盛土が用意に確保できる。逆に、平坦面だと掘形掘削にさほど時間は要しないが、墳丘盛土の確保に多くの時間を要することとなる。また、石材の中でも最も重量物である奥壁鏡石を立てる際、斜面の傾斜を利用して掘形上方から落とし込ませれば容易に立てることが可能である。1・3・4号墳の縦断面土層図にみられる奥壁側掘形の抉れは、上方から石を落とした際にできたものと考えられる。さらに、斜面側と墳丘との間にスロープを設ければ天井石の架構も容易となる。つまり、緩傾斜地の立地が省力的で、しかも短期日での施工が可能となる。

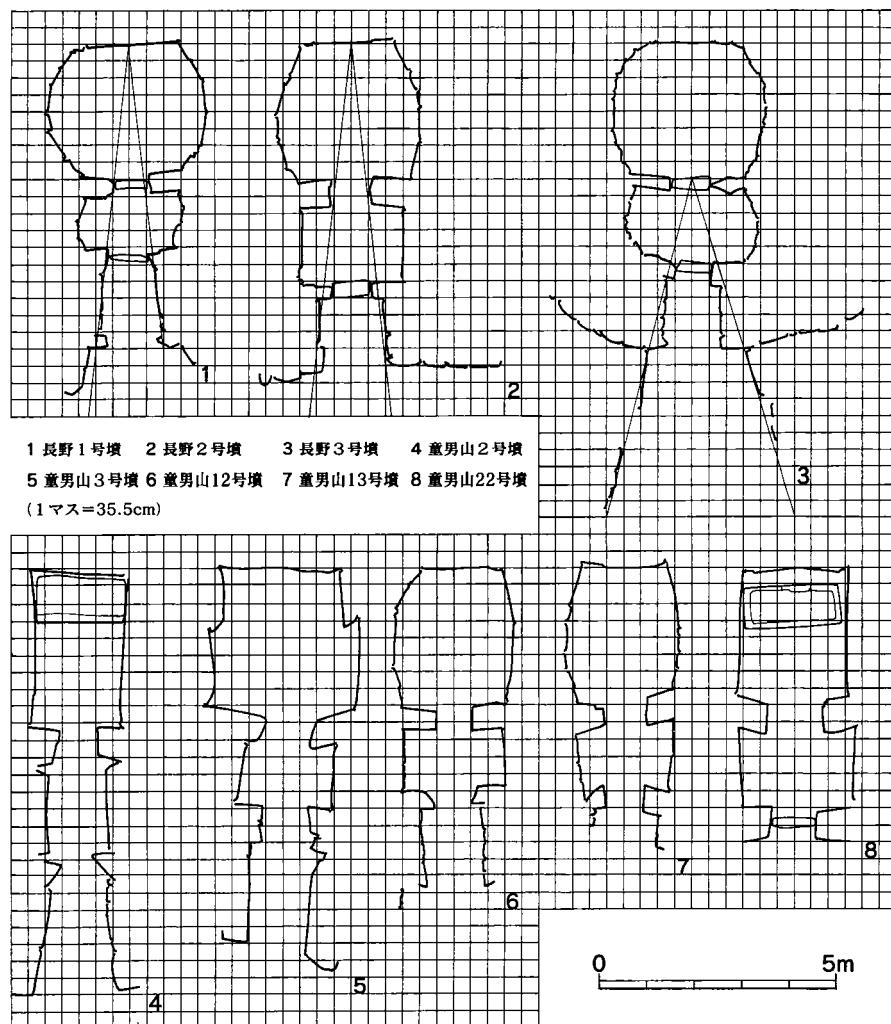
土盛り・石室の構築作業は、①奥壁鏡石及び玄門・前門・羨道立石の高さまで垂直に側壁を積む。②水平に土盛りを行う。③楣石を乗せる高さまで持ち送りで側壁を積む。④石材が露出している部分を覆う様に盛る。⑤天井石の高さまで持ち送りで側壁を積み上げる。⑥天井石を架構する。⑦墳丘全体を盛る。以上の作業手順が想定され、この際、外護列石が土盛り範囲の明示と土止めの役割を担ったものと考えられる。

③ 石室形態

長野古墳群の石室形態は、割石を持ち送りで積み上げた複室の横穴式石室で、玄室の床面プランは胴張り形を呈する。また、長野3号墳は玄室奥壁に吉村分類 I a 類（註1）の石棚を架構している。長野古墳群に隣接する童男山古墳群では、2・12・16・25号墳の4基が石棚を構築しており、石室形態を含めて両者を比較・検討してみよう。

童男山古墳群の石室形態は、基本的には基底部に巨石を据えた複室の横穴式石室で、玄室は長方形の床面プランを呈し、胴張りで割石を積み上げた長野古墳群の石室形態とは大きく異なる。しかし、童男山12・13号墳は玄室床面プランがやや丸みを帯び、割石を積み上げている点など長野古墳群との石室形態の類似性が窺える。童男山2号墳の玄室床面は長方形であるが、奥壁に平行して凝灰岩製の棺床が設けられており、その直上に石棚が突出している。長野3号墳の場合、死床の間仕切り溝は確認されなかったが、恐らく奥壁に平行して棺が安置され、それを覆うかの如く、その直上に石棚が存在したものと推測される。

また、第55図は一マス35cm（高麗尺）で方眼を切ったが、長野古墳群の場合、奥壁から玄門立石の外側までの距離を二倍にすると羨道部先端立石の位置にあたる。



第55図 石室床面プラン比較図 (1/160)

④ 築造年代

最後に長野古墳群の築造年代であるが、何れの古墳も盗掘を受け、石室内出土の土器に乏しいが、墓道・周溝などから出土した土器も含めて検討してみよう。

1号墳の墓道からは須恵器坏身・坏蓋が出土しているが、坏蓋の天井部は丸く、外面には口縁部と体部との境の段、沈線を有しないものであり、小田編年のⅢB期（註2）におけるよう。前室出土の見受けのかえりを有する坏蓋は、V期におけるものであり、当該期の追葬が考えられる。

2号墳の前室からは須恵器坏身・坏蓋が出土しているが、1号墳出土土器同様、外面には口縁部と体部との境の段、沈線を有しないもので、ⅢB期におけるよう。3号墳前室からは完形の須恵器坏身・坏蓋・横瓶が出土しているが、1・2号墳出土土器同様、坏蓋は段・沈線を有しないもので、ⅢB期におけるよう。

4号墳の周溝からは坏蓋が出土しているが、外面には口縁部と体部との境の段、沈線を有しないもので、ⅢB期におけるよう。

以上、みてきたように、古墳からは何れもⅢB期の遺物が出土しており、土器からは明瞭な前後関係はつかめなかった。

石室形態は、5号墳を除き、何れも複室構造の横穴式石室で、玄室が胴張りプランをなし、形態的にも前後を云々言えるようなものではない。ただ、4号墳が石切場遺構の上に築造されていることは古墳築造の終焉を意味し、1~4号墳にあっては、4号墳が一番最後に築造されたものと推測される。5号墳は、3・4号墳の周溝を切って築造され、単室構造の小石室であることから4号墳の築造からある程度の年数が経た後に築造されたものと考えられるが、何時の時期かは出土土器を欠くため判然としない。

なお、長野古墳群出土の須恵器は、形態の特徴やヘラ記号の共通性から八女市塚ノ谷窯跡群からの供給と考えられる。

《付記》

長野2号墳は、地権者・八女土木事務所・工事施工者の文化財に対する理解と協力により、現地保存されている。関係各位に深く感謝する次第である。

註1 吉村靖徳「九州における横穴式石室の石棚について」『九州歴史資料館研究論集17』1992

註2 八市教育委員会 1972 立山山窯跡群

図 版



(1) 長野古墳群全景（表土除去前、南から）



(2) 長野古墳群全景（表土除去後、南から）



(1) 長野古墳群全景（気球写真、南上空から）



(2) 長野古墳群全景（気球写真、北上空から）



(1) 1号墳全景（表土除去前、東から）



(2) 1号墳全景（表土除去後、東から）



(1) 1号墳外護列石（北から）



(2) 1号墳外護列石（南から）



(1) 1号墳墳丘断割り状況（東から）



(2) 1号墳墳丘断割り状況（北から）



(1) 1号墳周溝土層堆積状況（東から）



(2) 1号墳周溝 1 Tr (南から)



(3) 1号墳周溝 2 Tr (東から)



(1) 1号墳羨道部



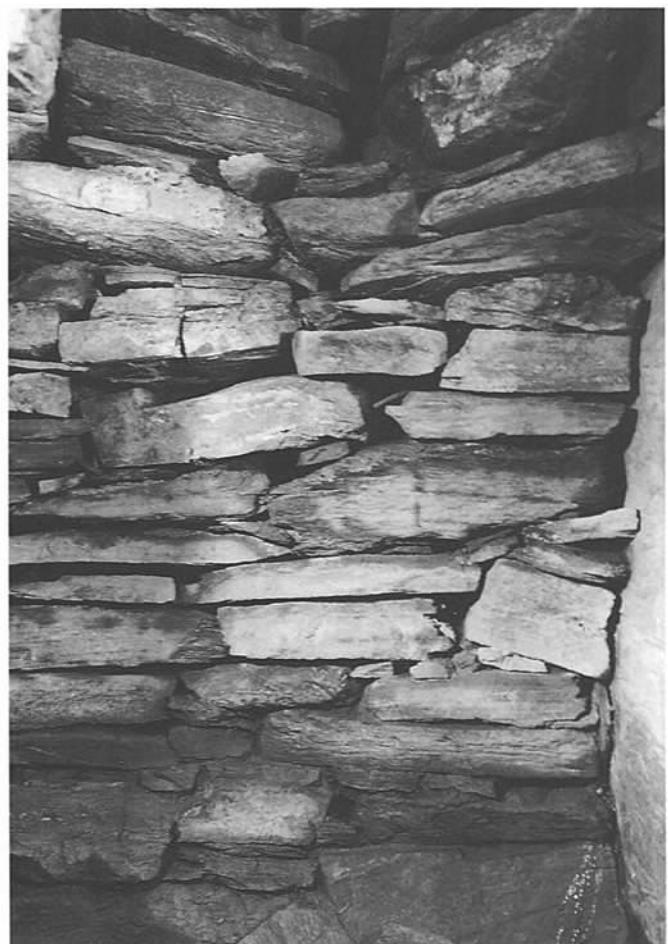
(2) 1号墳羨道部左壁



(3) 1号墳羨道部右壁



(1) 1号墳前室天井（左壁側）



(2) 1号墳前室左壁



(3) 1号墳前室右壁



(1) 1号墳玄室入口側上部



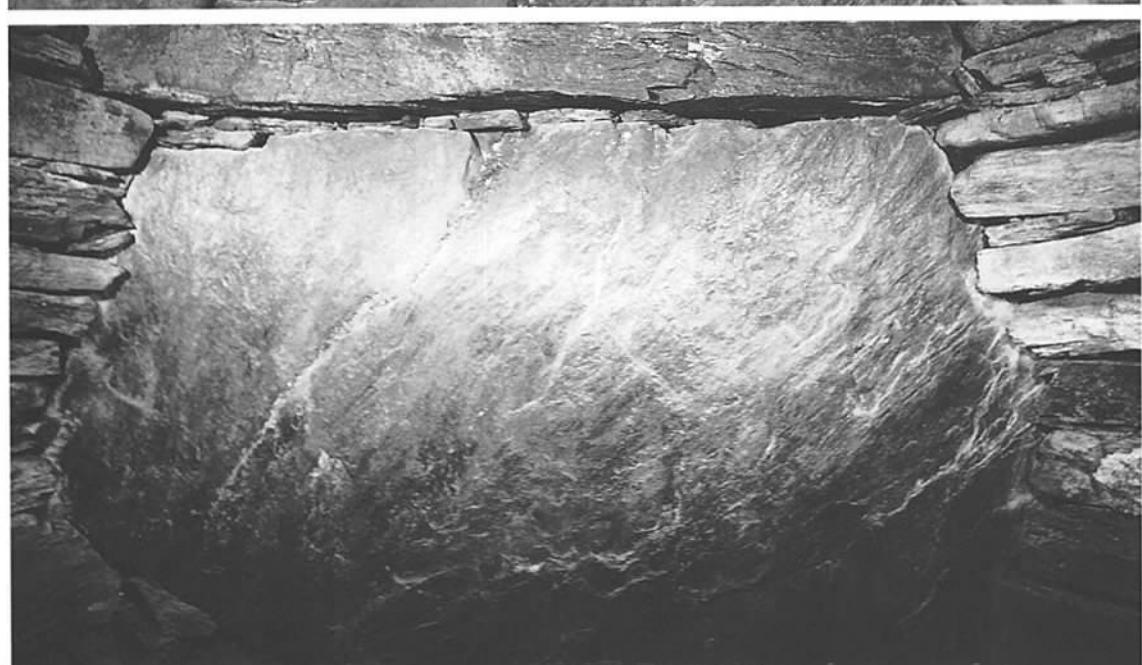
(2) 1号墳玄室入口側下部



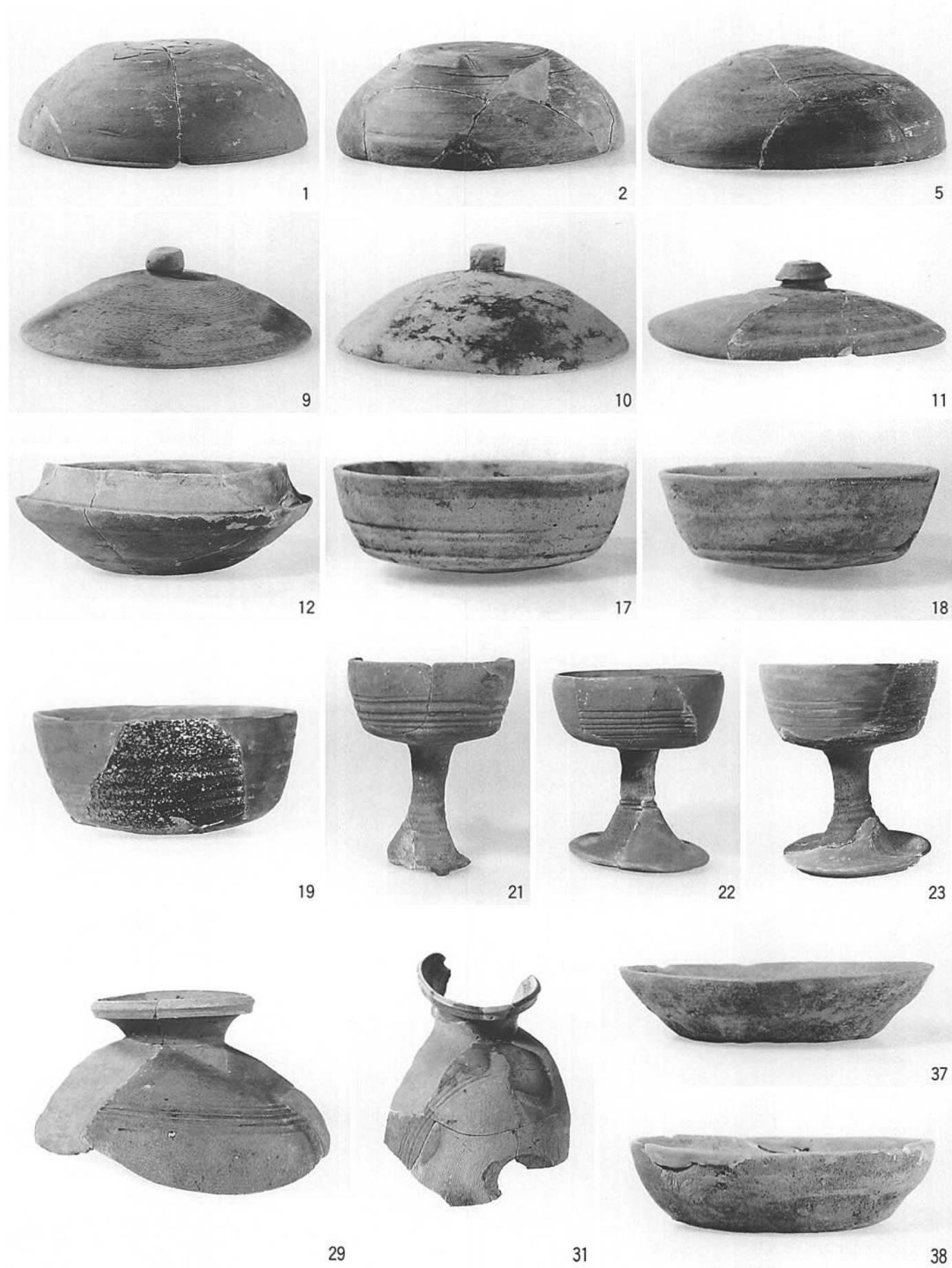
(1) 1号墳玄室左壁



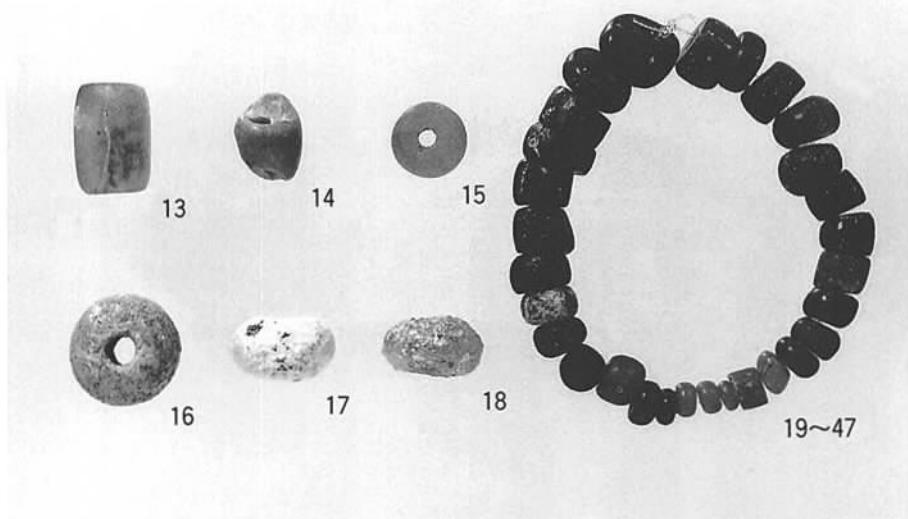
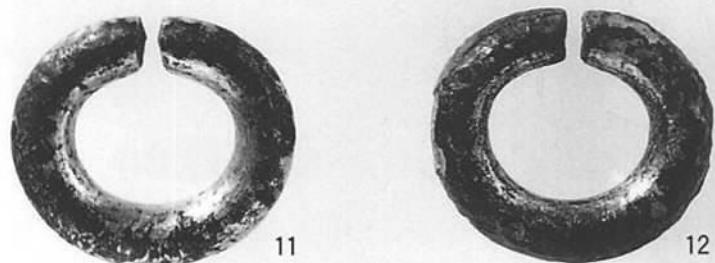
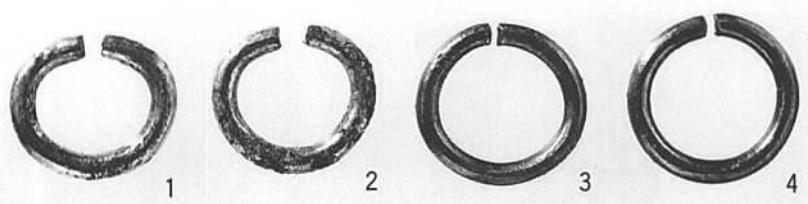
(2) 1号墳玄室右壁



(1) 1号墳玄室天井（奥壁側） (2) 1号墳玄室奥壁上部 (3) 1号墳奥壁鏡石



1号墳出土土器



1号墳玄室出土装身具



1号墳玄室他出土鉄器



(1) 2号墳全景（表土除去前、東から）



(2) 2号墳全景（表土除去後、東から）



2号墳全景（気球写真、東上空から）



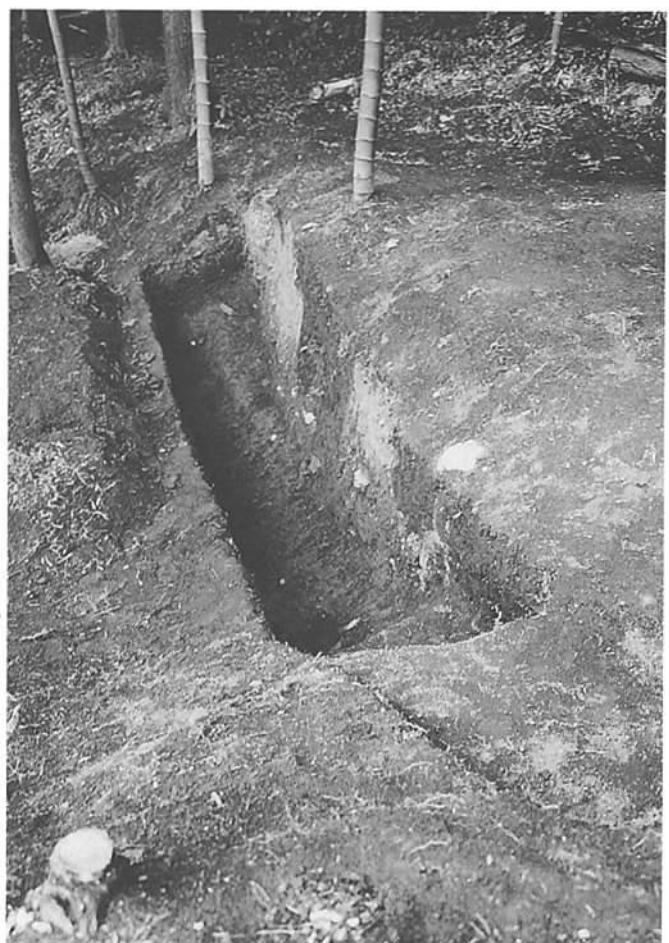
(1) 2号墳周溝 1 Tr (南から)



(2) 2号墳周溝 2 Tr (南東から)



(3) 2号墳周溝 3 Tr (東から)



(4) 2号墳周溝 4 Tr (北東から)



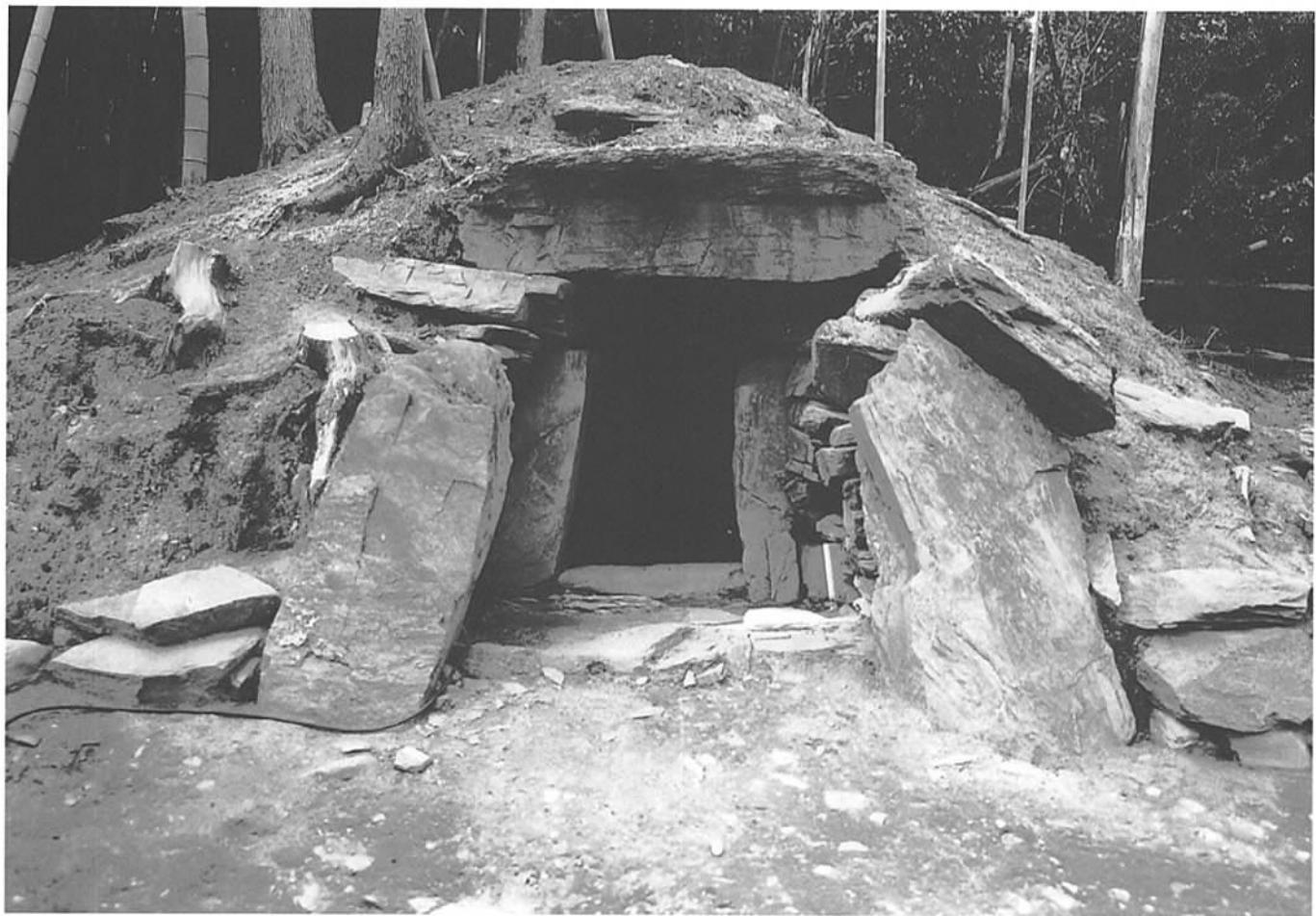
(1) 2号墳周溝 5 Tr (南から)



(2) 2号墳前庭部祭祀土器上部



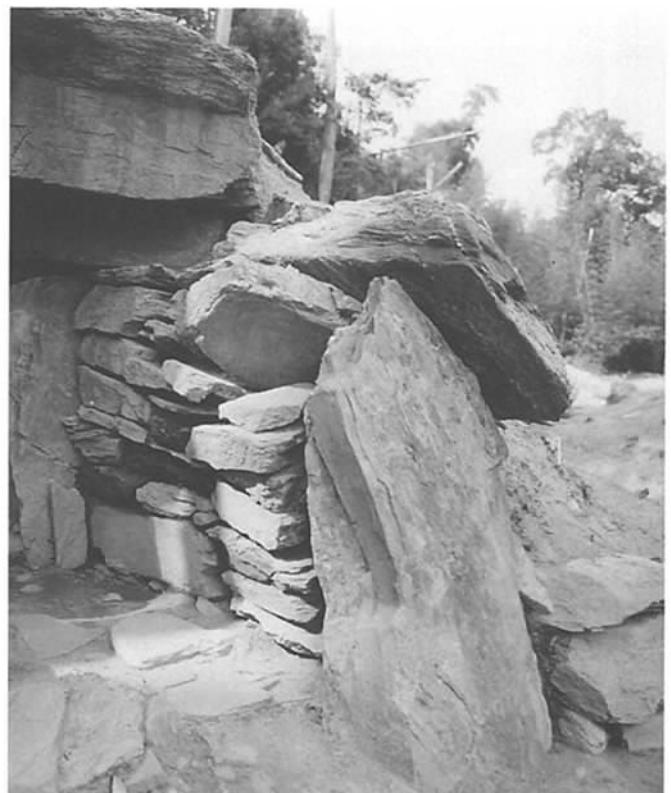
(3) 2号墳前庭部祭祀土器下部



(1) 2号墳羨道部



(2) 2号墳羨道部左壁



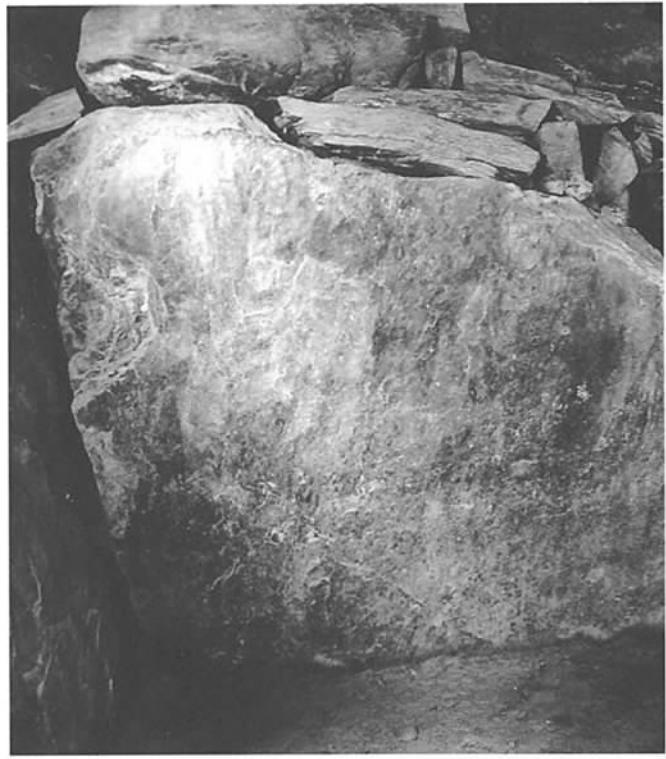
(3) 2号墳羨道部右壁



(1) 2号墳前室天井（右壁側）



(2) 2号墳前室左壁



(3) 2号墳前室右壁



(1) 2号墳玄室左壁上部



(2) 2号墳玄室左壁下部



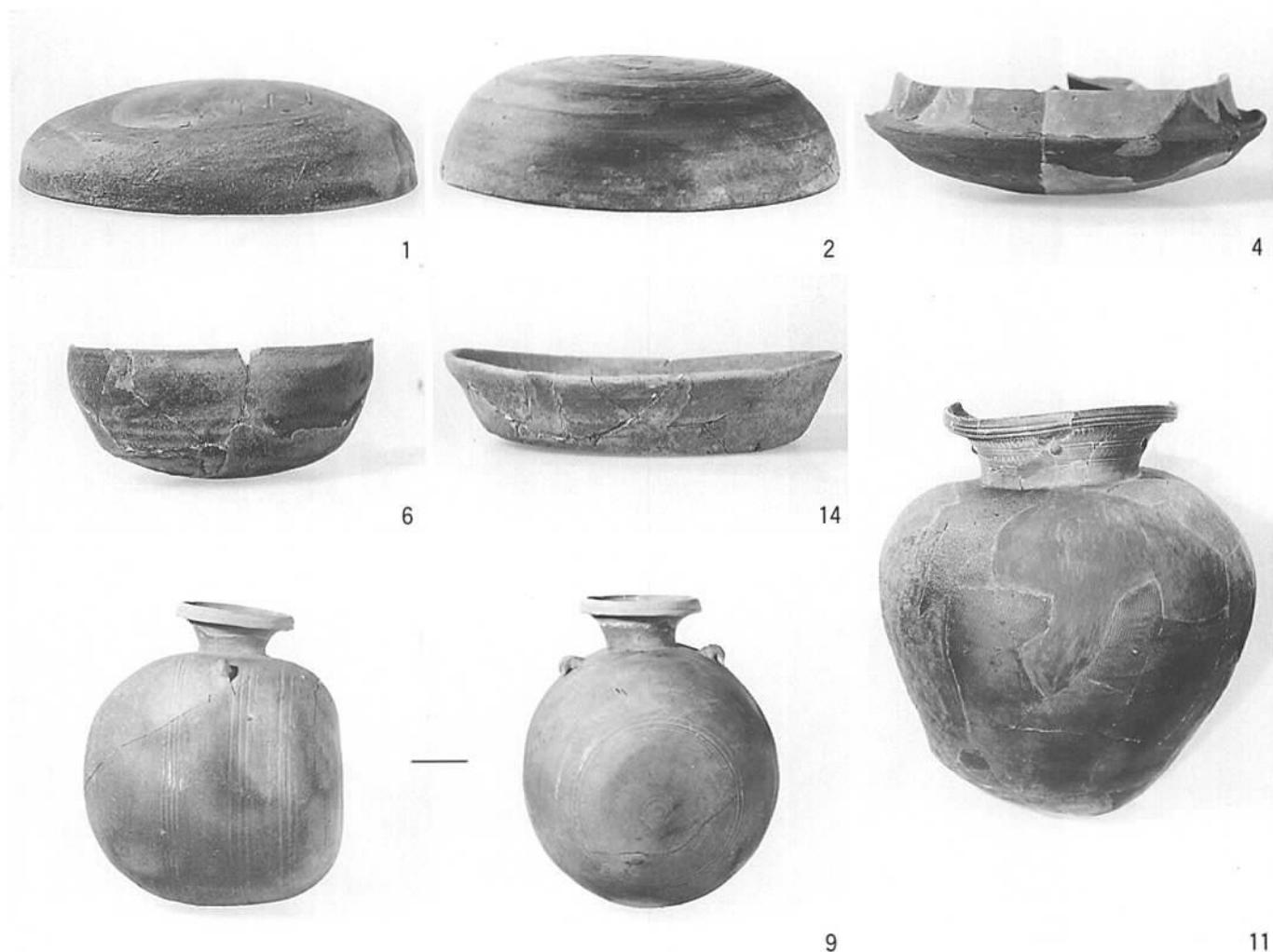
(1) 2号墳玄室右壁上部



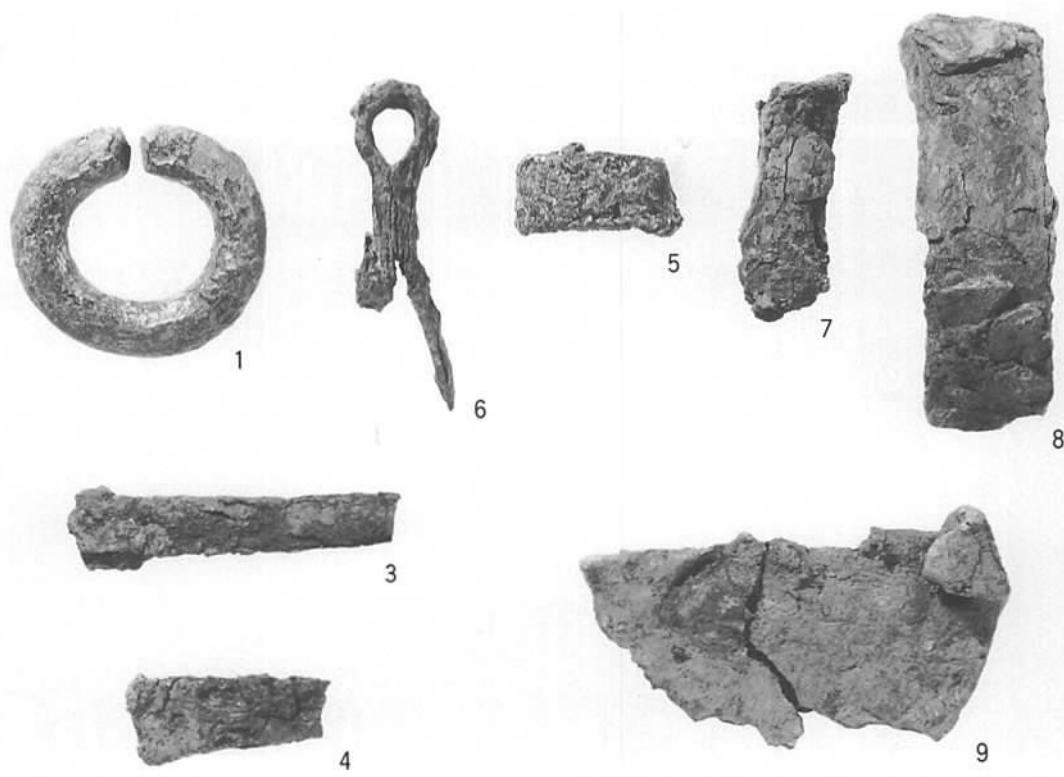
(2) 2号墳玄室右壁下部



(1) 2号墳玄室天井（奥側壁） (2) 2号墳玄室奥壁上部 (3) 2号墳奥壁鏡石



(1) 2号墳出土土器



(2) 2号墳玄室他出土装身具・鉄器



(1) 2号墳玄室出土鉄釘

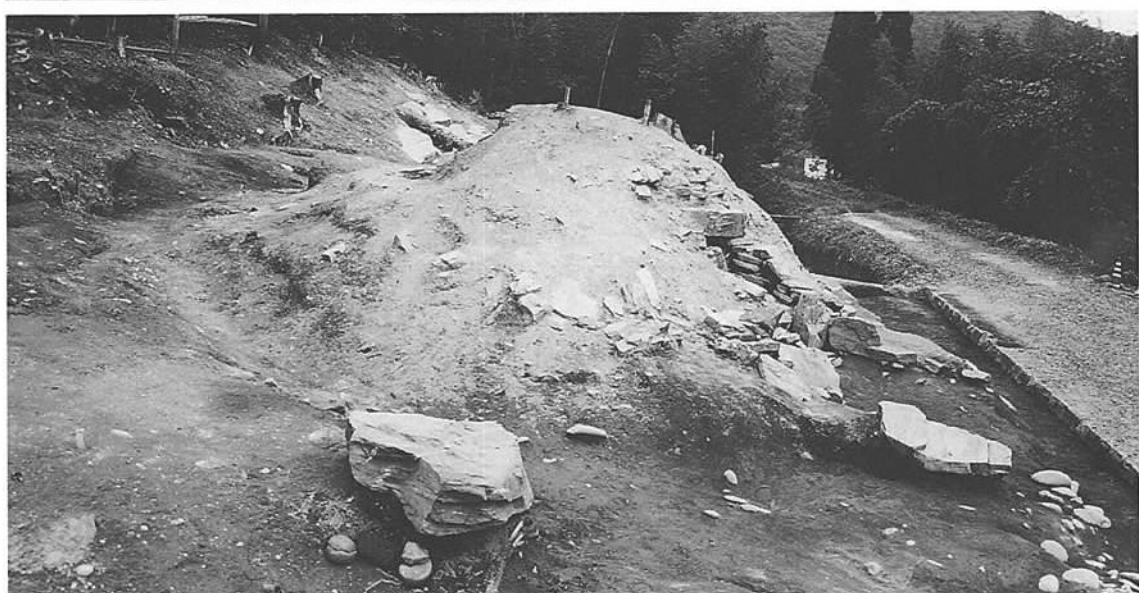
(2) 2号墳前室出土鉄釘



(1) 3号墳全景（表土除去前、東から）



(2) 3号墳全景（表土除去後、東から）



(1) 3号墳墳丘 (北東から)

(2) 3号墳墳丘 (南から)

(3) 3号墳外護列石 (南東から)



(1) 3号墳墳丘断割り状況（北から）

(2) 同（南から）

(3) 同（西から）



(1)



(2)

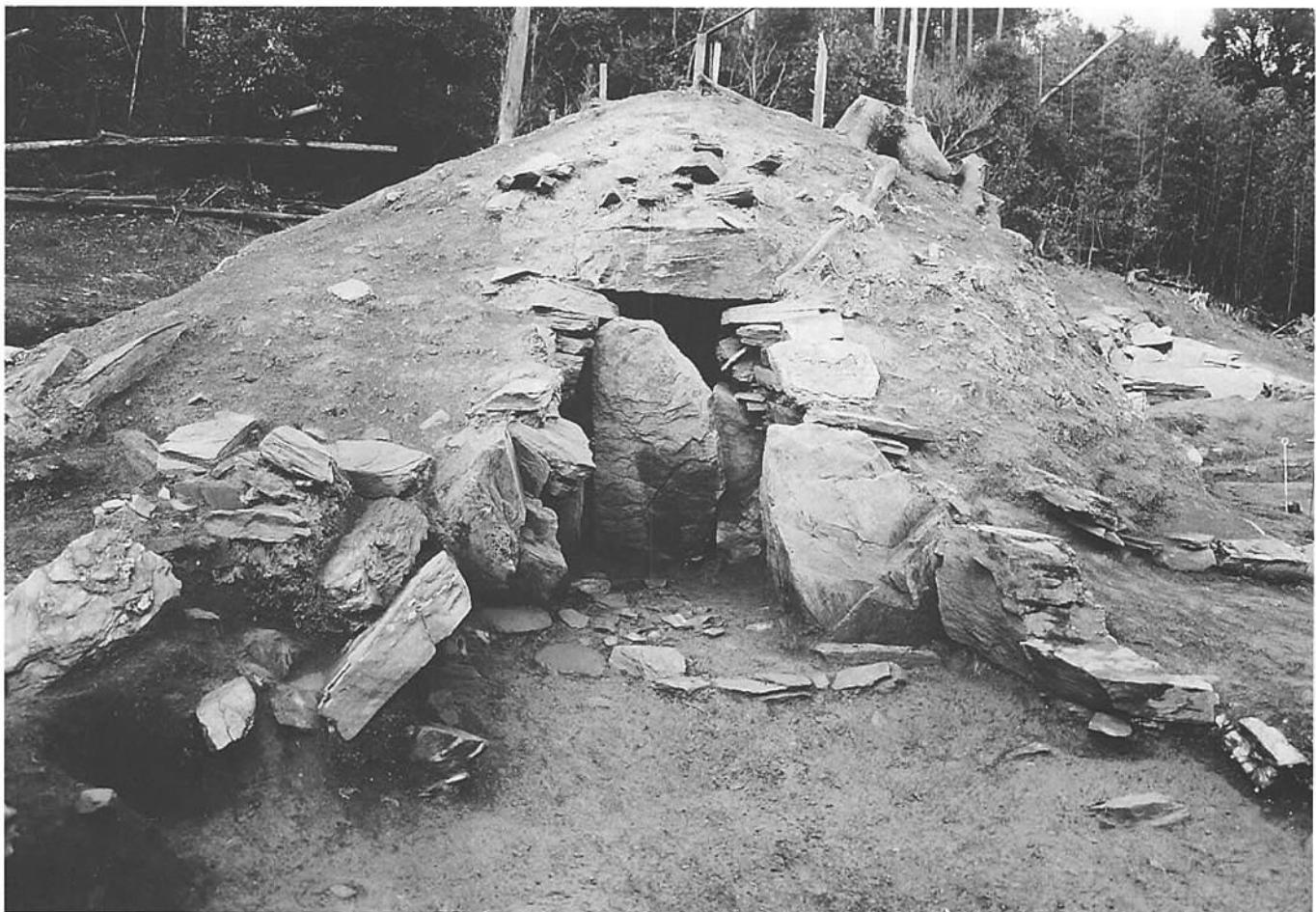


(3)

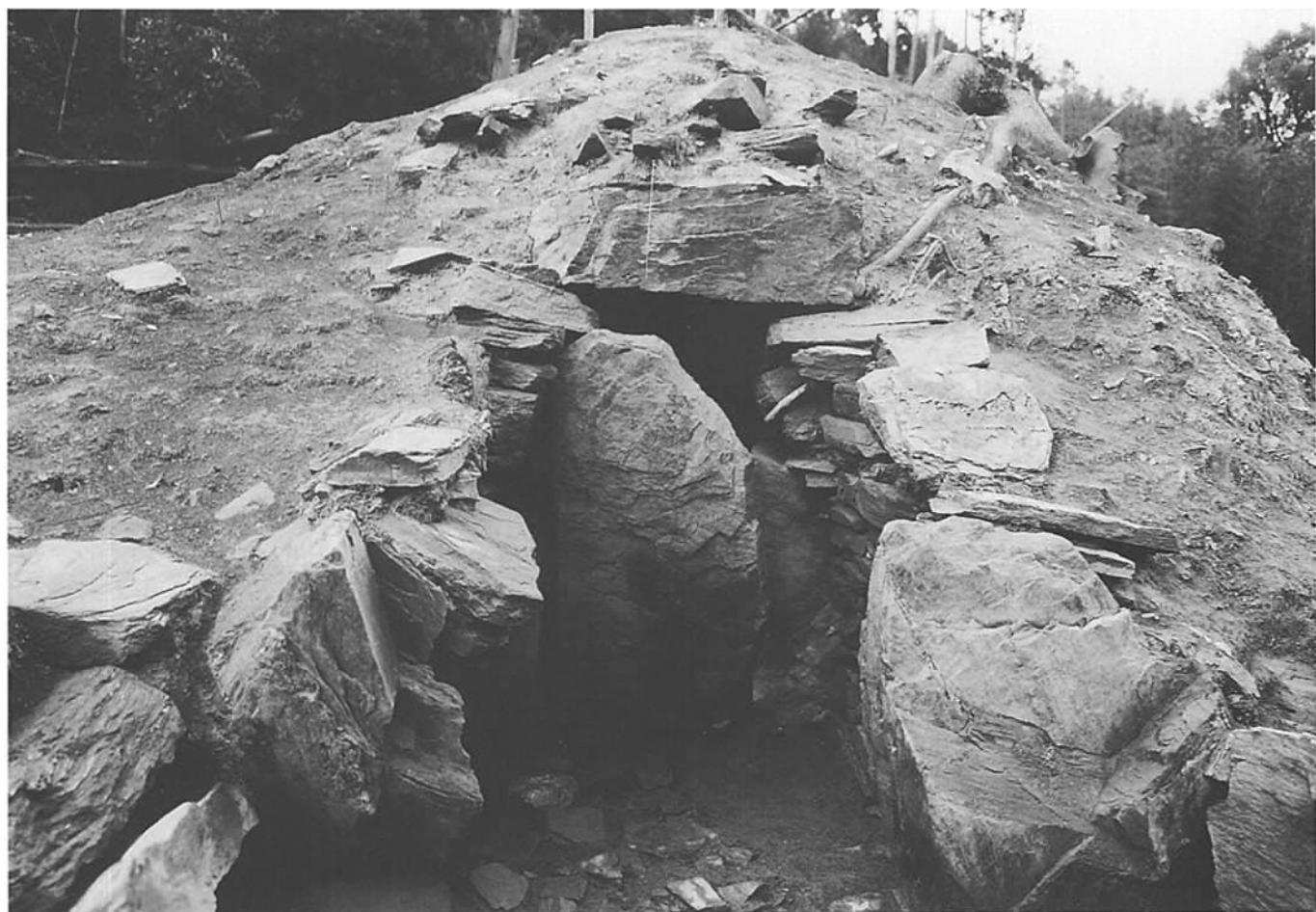
(1) 3号墳周溝Ⅱ区土層(北東から) (2) 3号墳周溝Ⅳ区土層(南東から) (3) 3号墳周溝Ⅰ区遺物出土状況(東から)



(1) 3号墳羨道部閉塞状況（東から）



(2) 3号墳閉塞石除去後（東から）



(1) 3号墳羨道部



(2) 3号墳羨道部左壁



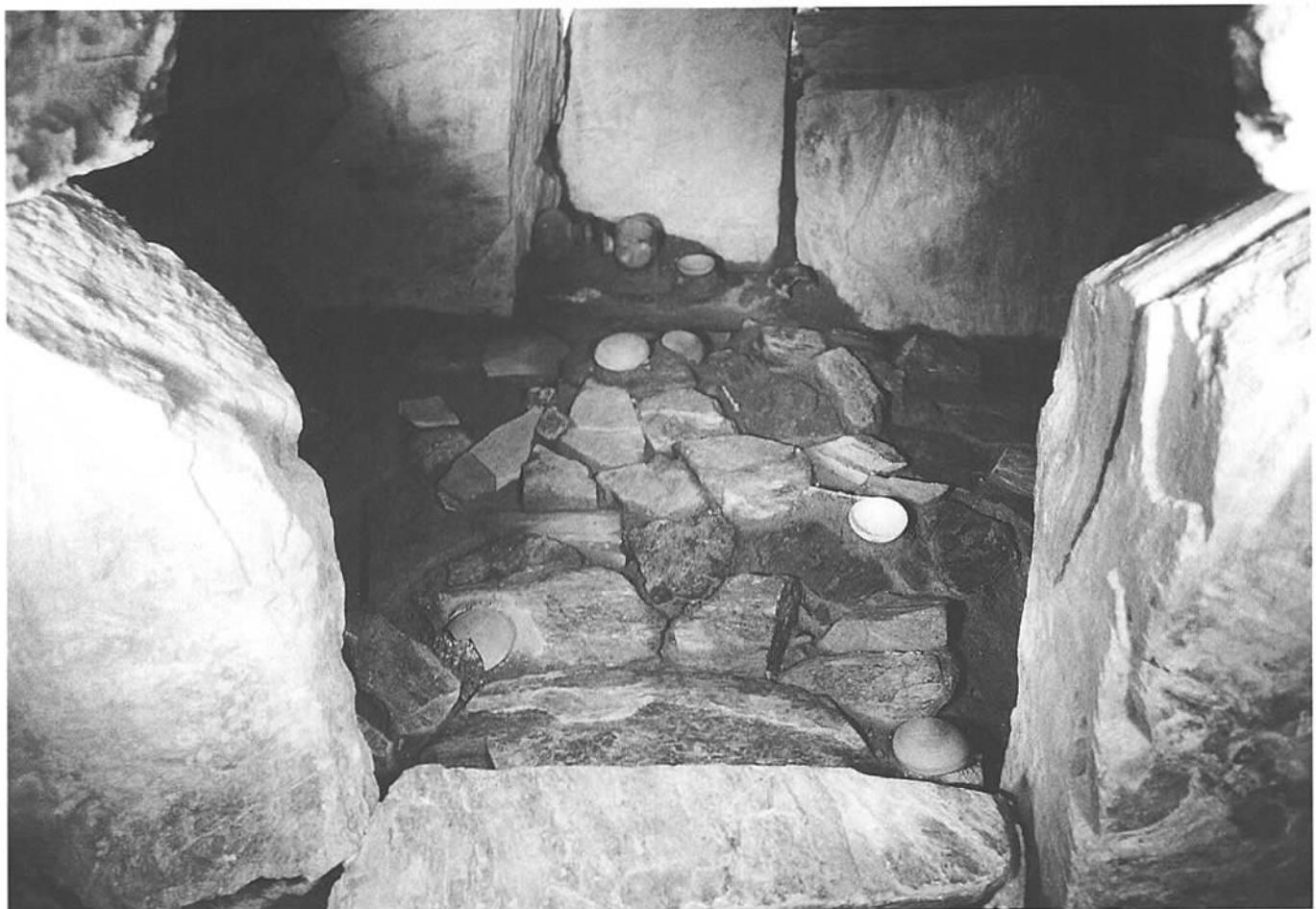
(3) 3号墳羨道部右壁



(1) 3号墳墓道左壁先端部 (2) 3号墳墓道遺物出土状況 (3) 3号墳左外護列石前面遺物出土状況



(1) 3号墳前室天井（右壁側） (2) 3号墳前室右壁上部 (3) 3号墳前室右壁下部



(1) 3号墳前室遺物出土状況（奥壁側から）



(2) 3号墳前室遺物出土状況



(1) 3号墳玄室入口側上部



(2) 3号墳玄室入口側下部



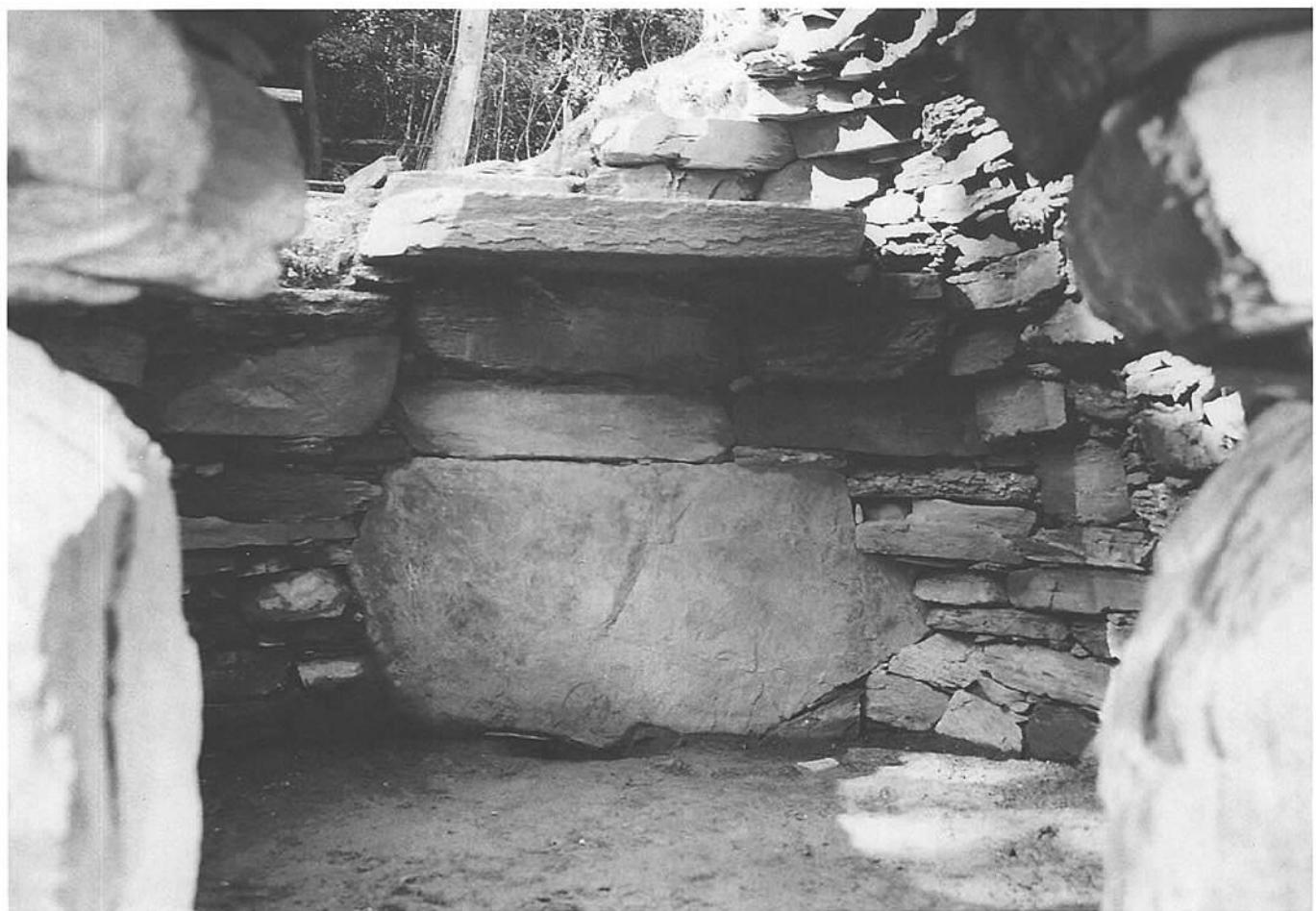
(1) 3号墳玄室左壁



(2) 3号墳玄室右壁



(1) 3号墳玄室



(2) 3号墳玄室奥壁



(1)



(2)



(3)

(1) 3号墳玄室石棚 (2) 3号墳奥壁断割り状況 (3) 3号墳前室楣石穿孔状況

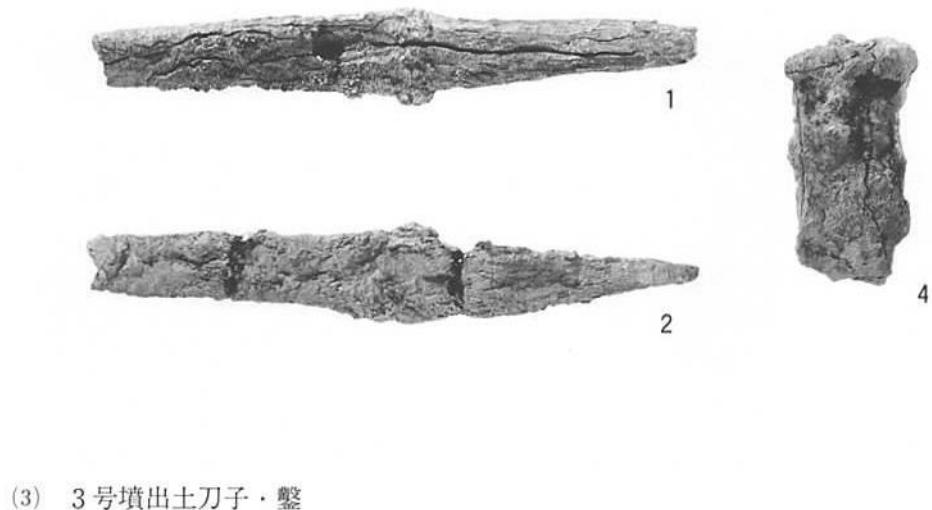


(1) 3号墳前室出土土器

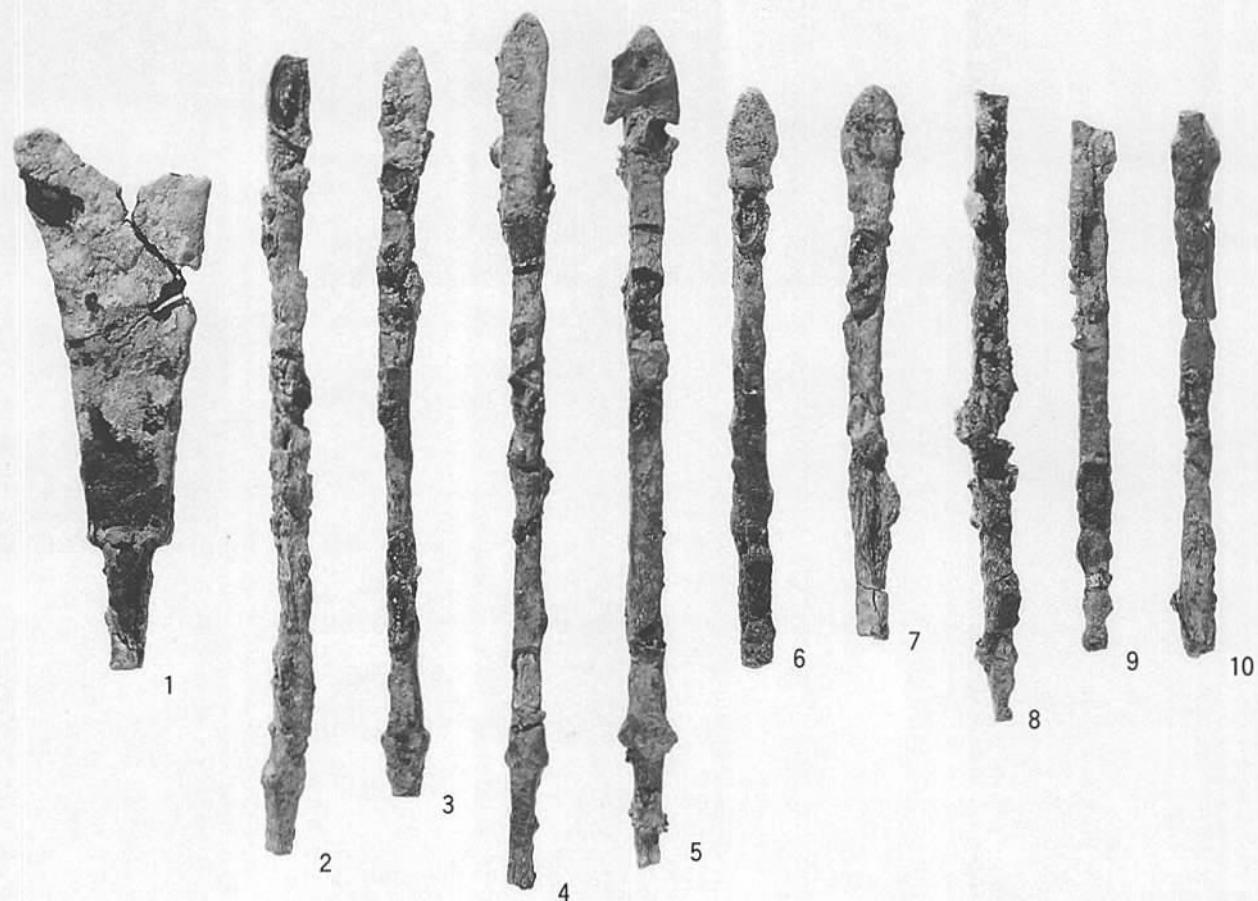
(2) 3号墳墓道出土土器



(1) 3号墳外護列石前面出土土器 (2) 3号墳周溝出土土器



(3) 3号墳出土刀子・鑿



3号墳前室出土鉄鎌



(1) 4号墳全景（表土除去前、東から）



(2) 4号墳全景（表土除去後、東から）



(1) 4号墳墳丘断割り状況（東から）



(2) 4号墳墳丘断割り状況（北から）



(1) 5号墳全景（南から）



(2) 5号墳全景（東から）



(1)



(2)

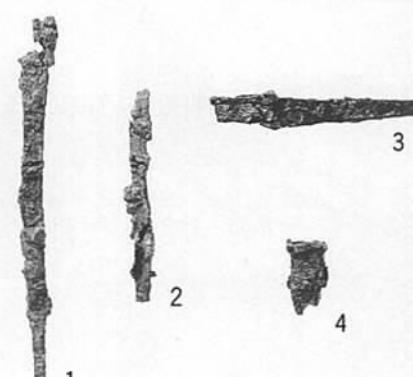


(3)



4-2

4-5



1



2



3



4

(1) 5号墳羨道部(北東から) (2) 5号墳玄室左壁(北東から) (3) 4号墳出土土器 (4) 5号墳他出土鉄器



(1) 石切場遺構（南から）



(2) 石切場遺構（東から）



(1)



(2)



(3)

(1) 石切場遺構北端（南東から）

(2) 切り出された石材（北東から）

(3) 工具痕



(1) 1号近世墓（東から）



(2) 2号近世墓（南から）



(3) 2号近世墓墓壇（南から）



(1) 3号近世墓（東から）



(2) 3号近世墓下部（東から）



(1) 1号胞衣壺（北から）



(2) 3号胞衣壺（東から）



(3) 1号集石遺構（北から）



(1)



(2)



(3)



1



2



5



6



(4)



3



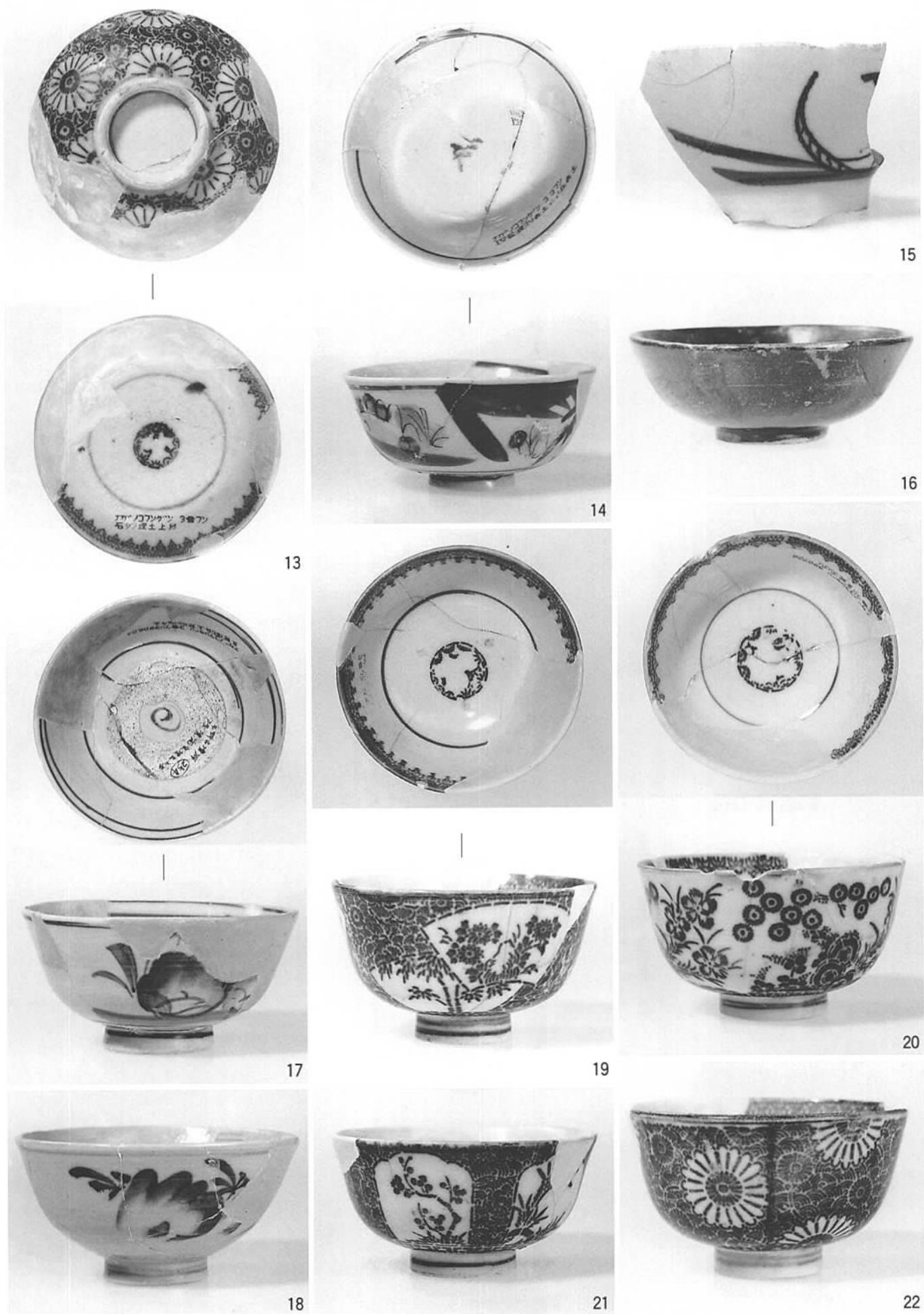
4

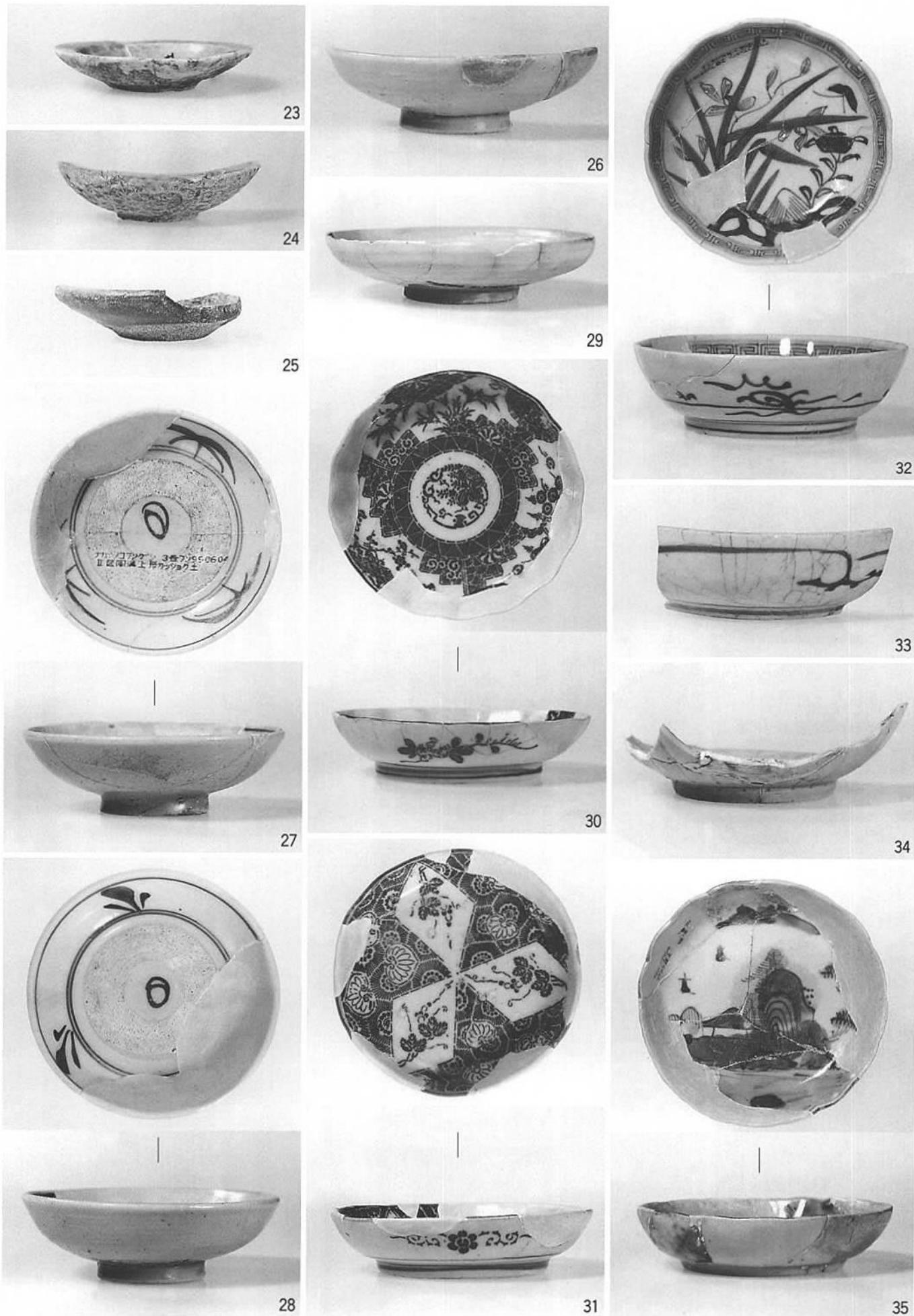


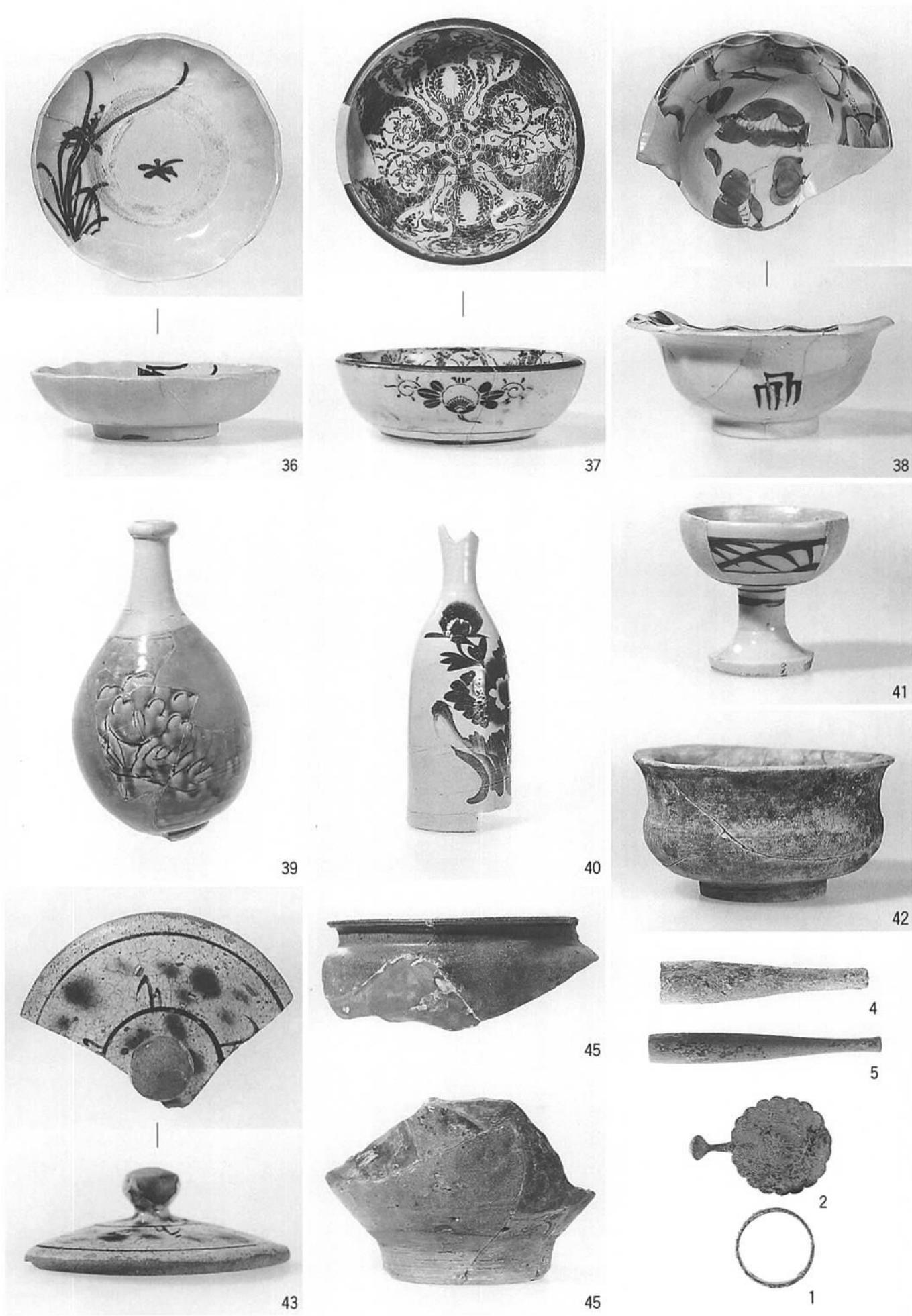
(5)

(1) 1号墓墓石 (2) 2号墓墓石 (3) 1号甕棺 (4) 2号甕棺 (5) 1~3号胞衣重







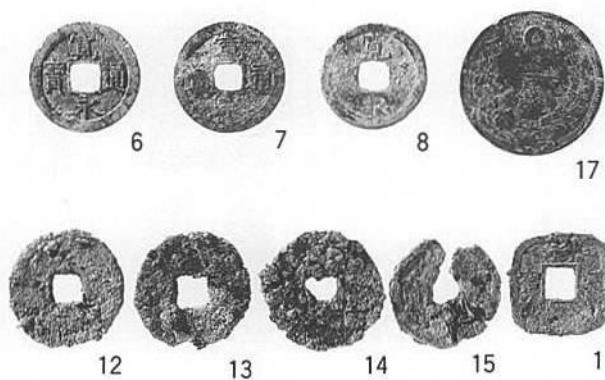


(1)

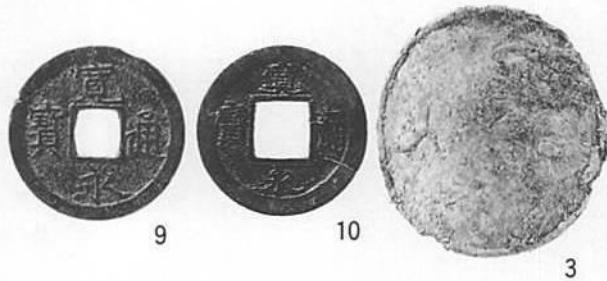
(1) 古墳他出土近世陶磁器④

(2) 2号墳周辺出土銅製品

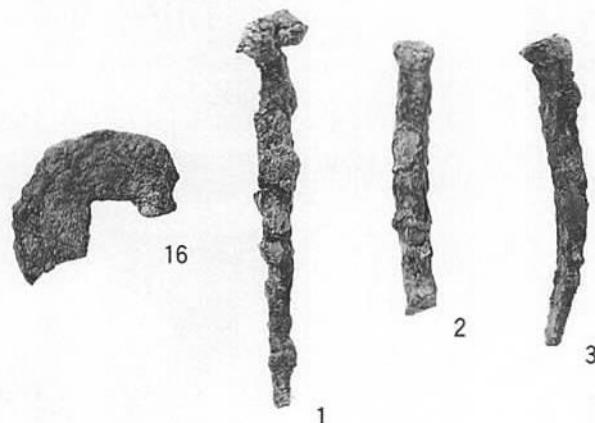
(2)



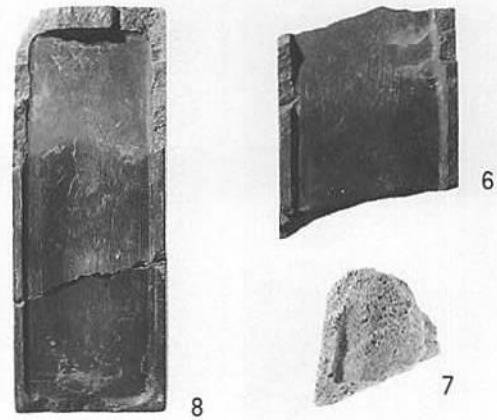
(1) 2号墳玄室出土古銭



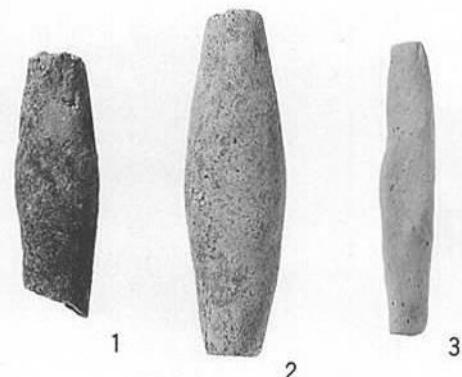
(2) 3号墳周溝他出土古銭・銅製品



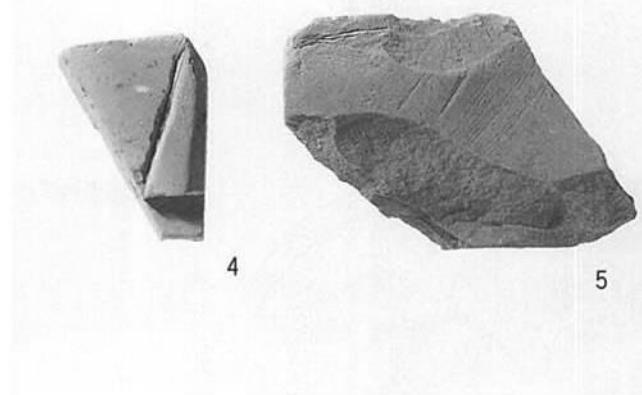
(3) 4号墳玄室出土古銭・鉄釘



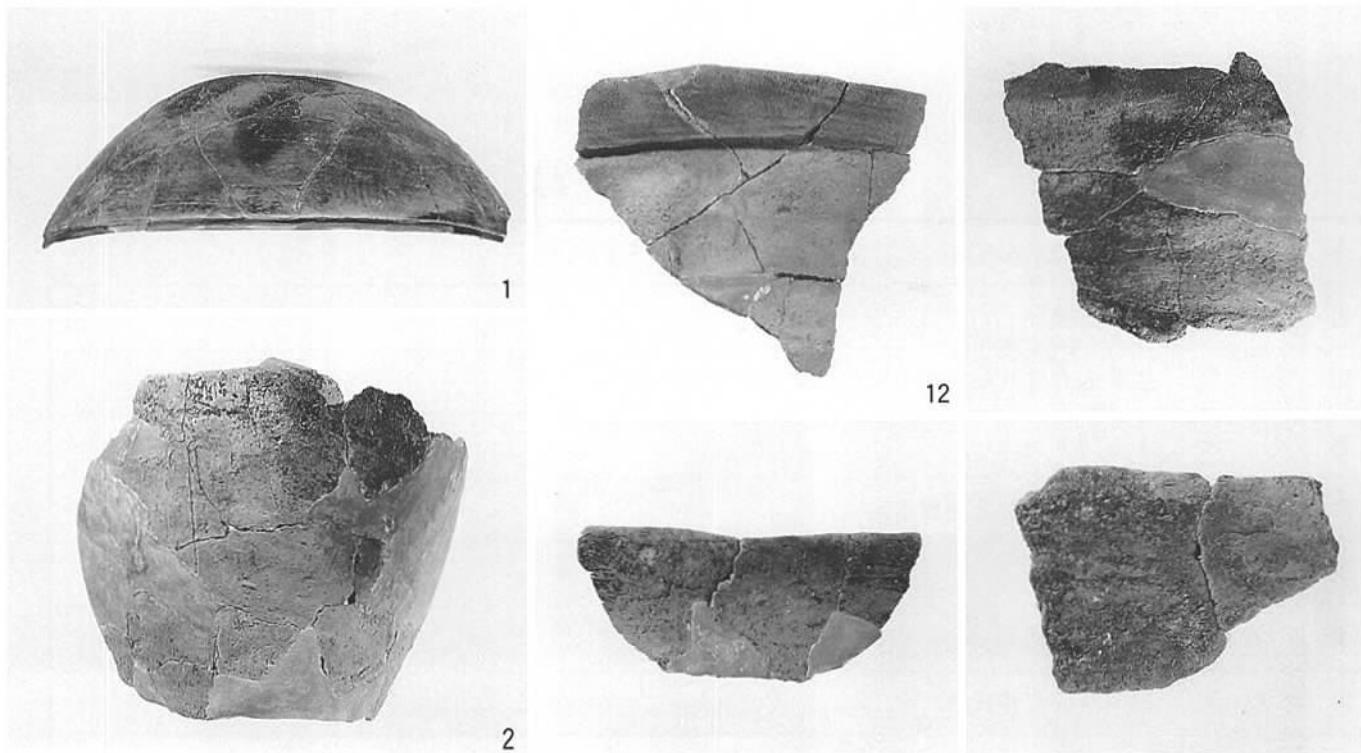
(4) 3号墳周溝他出土硯



(5) 出土土鍾

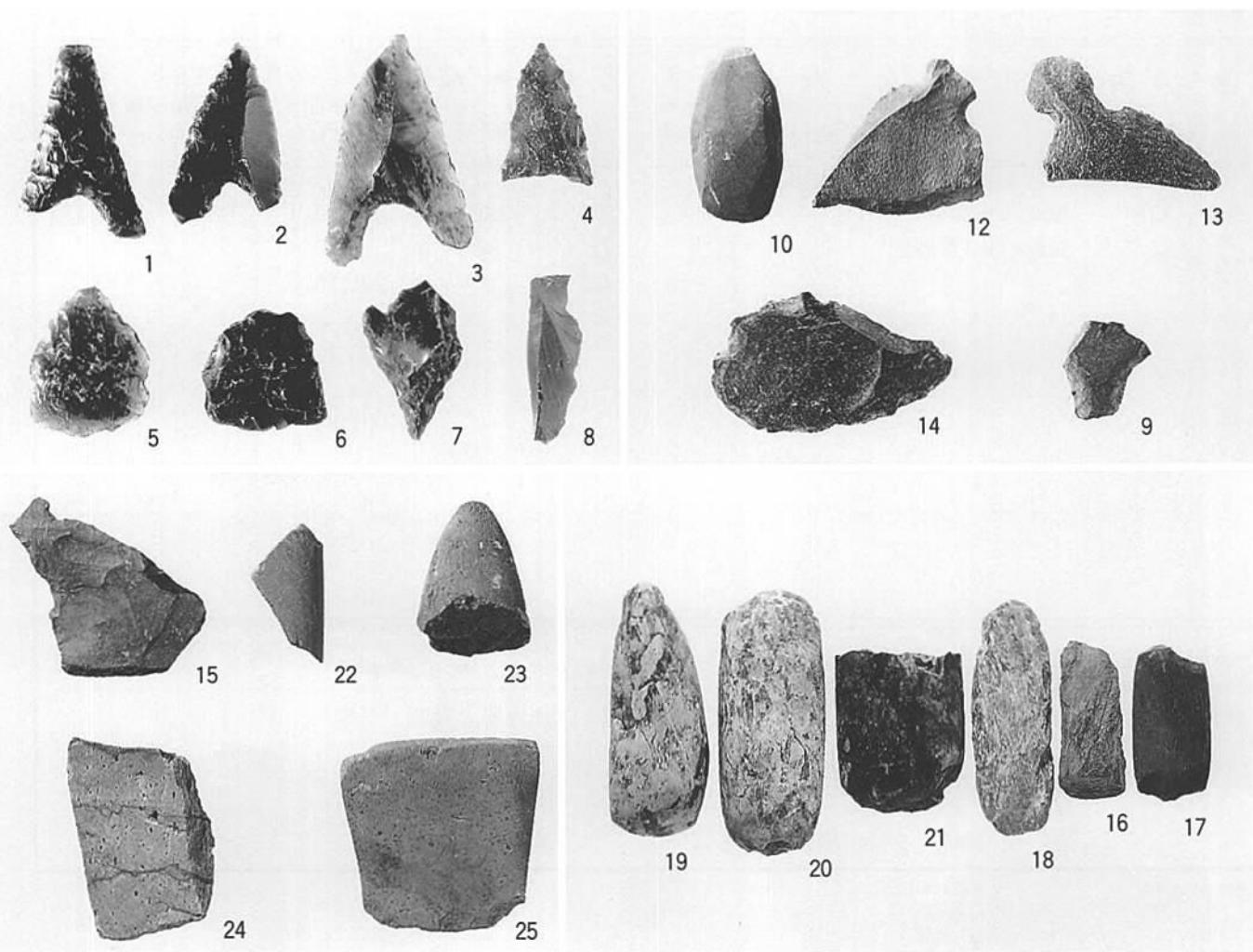


(6) 出土砥石



(1) 1号埋甕

(2) 包含層他出土縄文土器



(3) 出土石器類

報告書抄録

ふりがな	ながのこふんぐん							
書名	長野古墳群							
副書名	主要地方道八女香春線関係埋蔵文化財調査報告							
卷次	1							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第158集							
編著者名	小田 和利							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東經 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
長野古墳群	福岡県八女市大字 長野174-1番地他	市町村	遺跡番号	33° 12' 40"	130° 37' 30"	990616 (991130 . 000510 (001130	520	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長野古墳群	古墳 近世墓 埋甕	古墳 江戸 縄文	横穴式石室古墳 5基 石切場遺構 1基 近世墓 5基 埋甕 1基	須恵器・鉄器・玉類 陶磁器 縄文土器・石器				